

戦闘機人 code.Archer

國真流

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です。小説を書いたのはこれが初めてなので、読みにくかったり、文体が安定しなかったりするかもしれませんが、読んでいただけると幸いです。

拙著ですが楽しんでいただければ幸いです

f a t eのBADENDルートの衛宮士郎が、なのは世界でスカさんによって改造され登場します。空白期から始まるので無印とA,sはやりません

あとタイトルがアーチャーになってますが、アーチャー要素はほぼ無いです。普通に衛宮士郎です。

目次

プロローグ	1
1 / 起動	10
2 / 鑑定	18
3 / 訓練	25
4 / 姉妹	32
5 / 強襲	38
6 / 強襲②	46
7 / 強襲③	53
8 / 猛獣	59
9 / 旅立	66
10 / 始動	77
11 / 決意	85
12 / 鉄の輪	92
13 / 崩落	99
14 / 透過	107
15 / 不屈	114
16 / 焦土	124
17 / 天獄	132
18 / 仮面	146
19 / 追憶	156
20 / 穴埋	168
21 / 追跡	179
22 / 教会	189

プロローグ

「荒廃し生命の存在が感じられないとある滅んだ次元世界

草木は枯れ 建物は風化し それらを灰色の空が覆っている

そんな物寂しい世界を一人の長身の女が歩いていった

年の頃は二十代前半 短めの髪をなびかせ全身を藍色のスーツが覆っておりその首元にはⅢの文字が刻印されていた

たった一人歩くその姿は、モノクロ写真に青い花が咲いている姿を彷彿とさせる

迷い込んだ異物故に

本来ありえない物であるが故に

その姿は一層青々しく、そして美しく見えたのだろう

『トーレそちらの様子はどうか？』

電子音と共に若い男の声が響いた

「問題ありません ドクター しかし、こんな所にドクターの探し物があるようにも思えません？」

長身の女 トーレが辺りを見回しながら言った

辺りには石造りの建物の残骸の様なものこそあれど 何か使い物になりそうな物など見つかる気配もなかった

ただただ灰色の世界が広がるばかりで乾いた地面は踏んだところで虚しい音を鳴らすだけだ

『前方約200m先の座標まで行けばわかると思う

巨大な地下空間があるはずだ そこから地面をぶち抜いて進んでくれたまえ』

「了解しました」

トーレにドクターの意向に逆らうと言う発想はない例え無意味だとしても命令通り実行するだけだ

しばらく進むと一見何も無い場所に出た

今まで通り灰色の地面と石しかない。他の場所と相違点など有り
そうもない

しかし常人には分からないレベルで地面に違和感があった。
戦闘機人であるトーレには体内にある高感度センサーにより、はっ
きりとドクターの言った通り地下に巨大な空間がある事を認識でき
た。

しかしなんらかの魔法的結界が張られているらしく 穴を開ける
のは手間がかかりそうだった

成る程ガジェットでなく自分が派遣されるわけだ

そう独りごち トーレは渾身の力で地面に拳を叩きつけた

粉塵が舞い 石の欠片が飛ぶのも気にせず何発も何発も拳を打ち
付ける 一度打つごとに地面が抉られ徐々に穴が大きくなってゆく

そうすることに一枚一枚結界が割られていく

そして とうとう 最後の一枚に到達した

トーレは体を弓なりにしならせ鋭い一撃を叩き込んだ地面に大穴
が開き地下への道が開かれた

「想像以上に硬かったな とても無人世界のものとは思えん」

呼吸を整える様に大きく息を吐き 体に積もった埃をはらう

『トーレもう穴は開いたかい?』

狙いすましたかの様なタイミングでドクターから通信が届いた

とうかサーチャーですつと眺めていたのだろう

「はい ちょうど今。 ところで此処はどういった場所なのですか?

この結界といたただの遺跡とも思えませんが」

トーレが大穴を見下ろしながらいうとドクターは何も説明してい
なかつたことに気づいたらしく

少し楽しそうにその口をひらいた

『ああ 言っていないなかつたね そこはその世界の魔導師の研究施設

だった場所だよ』

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ドクターによればこの世界は数百年前に滅んだ次元世界で、時空航行技術も持たなかったような世界だったそうさ。

しかし様々な《対人で人を殺すこと》に特化した遺失物が多数発掘されているらしい

今回ドクターが目をつけた遺失物は【起源弾】と言うものらしく魔導師を殺す事に特化したものだそうさ

『【起源弾】はとても興味深い遺失物でね

質量兵器の銃で撃ち出す弾なのだが、素材が特殊なものらしくてね魔導師のレアスキルの恩恵を受けたものようだが実はそれもはつきりしていないんだ

効果としては被弾者の魔法を使えなくすると言ったものなのだが原理が面白くてね、リンカーコアを一度砕いて 再構成すると言った現象が起こるんだけどね

これだけ聞くと何の害も無さそうだけど リンカーコアはエネルギー体であると同時に内臓の一種だからねバラバラにされた後適当に繋がれた所で機能しなくなるんだ

その状態で無理に使おうとすると暴発して大抵死んでしまうだろうね

まあ余程優れた魔導師なら少しは使えるかもしれないがリンカーコアが砕かれると言うのは凄まじい痛みを伴う。

シヨック死一步手前の痛みの中でそこまで精密に魔力を操作できる魔導師はそうはいないだろうさ

まあそんな訳で

AMFに應用できないかと試行錯誤していたんだが

使い捨てって事を忘れて実験に使ってしまったね

それで探しに行ってもらっているのさ』

成る程とわざわざこの次元世界まで来た理由をトールは理解した。ここの言う未知の力というものをドクターはよく好む、だからここまで強い興味を持っているのだろう

しかしそうなるともう一つ疑問が出てくる

「ドクターその様な強力や遺失物が多数発見されているのであれば管理局も駐屯しているのでは？」

そう、ドクターが言うように強力な遺失物が多数発見されているならば管理局が危険視ないし手中に収めようしない筈がないが

『それはないよ 絶対にね』

ドクターいつも通りな軽薄な顔で、しかしキツパリとはそう断言した

「それは何故ですか？」

『この次元世界に「クモ」がいるのさ』

『クモ？』

トールは足が8本でワシヤワシヤ動く虫を思い浮かべた

ドクターはトール想像した物を察して続ける

『そう 君が想像している通りの見た目だよ

ただ 物理が無効で 魔法が効かなくて 死ななくて

巨大なクモだけだね』

それはクモなのだろうか？

あまりのトンデモ生物にトールはいつぞ呆れすら覚えたが話を続けるドクターに耳を傾けた

『もうかなり前のことだけどね 管理局がそのクモを討伐しようとしたことがあったんだ

アルカンシエルで吹き飛ばすつもりだったみたいだけど撃つたアルカンシエルで吹き飛ばすどころかアルカンシエルと時空航行船ごと影みたいなのにパツクリ食べられちゃったそうだよ』

『それ以来管理局はこの次元世界には来てないね
監視ぐらいはしてるかもしれないけど常時じゃないだろうしま
あ 気にするほどじゃないさ』

説明を聞き終わりトーレは大穴に向き直った
覗き込んでみると穴はそこまで深くはなく、古びた石の床らしきも
のが見える

『さっきの結界の事もあつた中に罾があるかもしれないから気をつけ
て』

そんな忠告を聞きつつトーレは穴に飛び込んだ

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

結局のところドクターの心配は杞憂だった

外の結界こそ作動していたものの中は罾こそあれど経年劣化で作
動していないものがほとんどだ

が それは遺失物にも言えたらしく中にあつたもののほとんど
は使い物にならない程に劣化 損傷していた

広大な地下空間を探し回ったにもかかわらず何の成果も得られな
いまま とうとう発見できたうち最後の部屋にたどり着いた

一番奥にあり物々しい雰囲気を放つその部屋の前に立ちトーレは
深くため息をついた

この部屋もハズレならとんだ無駄足だったなと
そんなトーレの内心を知ってか知らずかドクターから通信が入る

『その部屋に【起源弾】はあるはずだから見逃さない様に頼むよ』

トーレは暫し沈黙し、若干声を震わせながらドクターに聞いた

「……………この部屋に目的のものがあつたと知つていたのですか？」

『当たり前前じゃないか 【起源弾】の特徴的な魔力を辿ってその施設を見つけたんだから場所くらい分かって当然だろう?』

ハッハッハッと良い声で笑いながら説明するドクターに少しイラっとしたが

言われてみればこの次元世界にある事は資料なりに調べることができて

この世界のどこにあるのかを調べる方法が無くては

そもそもこの施設を見つける事もできなかったという事に考えが行き着かなかった自分のミスであり

ドクターを責めるのもお門違いかも知れないが

それにしたってもうちよつと早く言ってくれても良いのではないかと思った

『それにしても 【封印指定】かどういいう意味なんだろうねえ…』

どこか楽しそうで、どこか期待に満ちた声色が聞こえた

ドクターが扉に書かれた文字を読んだ様だ

なお、当然トールには読めるわけがなく 封印指定 と言われても何か封印されているのでは?

という印象しか持ち得なかった

何となく嫌な予感を感じつつ部屋の扉に手を掛け開け放つ

するとそこには

夥しい量の生体ポッドが並んでいた。 いや、生体ポッドと言うよりは どこか牢獄めいた雰囲気醸し出している。

広さは小さめのグラウンド程あり、他の部屋と比べるとかなり広めだ

この部屋も他の部屋よりは若干マシとはいえ劣化によって荒れている

ポッドも半数以上は割れて中身が漏れてしまっているし

割れていない物も中身がグズグズになって辛うじて人間だったと

ということが分かるものがほとんどだ

元々そういう形の物もあっただろうが殆どが使い物にならない事は明らかである

ポツドの他にも金庫の様なものもポツドの横に並べられナンバリングされている

近くの金庫を開けて見ると中からは資料らしきものと魔力の込められた何らかの道具が出てきた

いずれもポツドに関する資料らしい

『右奥の方から反応がある　すぐそちらに向かってくれたまえ』

目当てのものか近くにあると分かり、我慢できなくなったのか急かす様にドクターが言う

辺りの様子を見ながら言われた通り右奥に進む

すると不意に辺りが明るくなった様な気がした

ハツとして周囲を警戒するが特に危険なものはなく

光源らしきものもなかった

周りには割れたポツドと溢れた中身、画一的な金庫しかなかった

「気のせいか」と一人納得し前向き直る

しかし　そこにあつたものを目にし先程のは気のせいでは無かつたと思ひ知らされた

正面数メートル先に不自然なほど状態のいい素体があつた

それは一人の少年だった

年の頃は16　か17　と言つたところだろうか

赤銅色の髪に童顔気味の顔

身長は170弱で全体的に筋肉質な体をしている

ただ一点　心臓の上にある傷跡がその少年に不自然さを与えている

死体と瓦礫しかないこの場所ただ一つ、生きているかの様に見えるほど、今にも瞳を開けそうなほど

それは異色で、それは異端で、そして何より美しく見えた

そんな素体があつたからだろう辺りを明るく感じたのは

サーチャー越しに見ていたのかドクターも感嘆の声を上げている

『素晴らしい…数百年放置されてなお形を失っていないなど…遺失物？ いやそれとも時間操作系魔法の応用？ しかし……これはなんとも……興味深い』

爛々と目を輝かせ まるで新しいオモチャを手に入れた子供の様に 夢中になって観察している

トーレはポッドに近づきポッドを撫でた

溶液に浮かぶ少年をひとしきり観察した後

横に備えつけられている金庫に目を向け中を確認する

中には紙媒体の資料 ケースに納められた銃弾や人の背骨の様な物があつた 銃弾や骨にも興味はあつたがひとまず資料から確認することにした

資料の大部分は読めなかったが個体名と思われる表記がミッド表記に近い言語だったのでかろうじて読むことができた

「SIROU EMIYA」

「シロウ エミヤ…」

これがこの少年の名前なのだろうか

この少年がどういった経緯でここに居るのかは分からない

死の世界でただ一人取り残されている訳も分からない

死んだまま、この世界での何よりも生きているように見えるこの少年にトーレは心惹かれていた…

『衛宮…士郎 ふむ 聖杯戦争？……【投影】…アヴァロン？ 魔術回

路…東の果て…穂村原学園…冬木…s a b a r…衛宮切嗣
…汚染…暴走…大聖杯…消滅…これは…いや…ほう
………』

ドクターもサーチャーを使って資料に目を通していている様だ 思考
の海に沈んでいる

トーレは邪魔して悪いと思いつつも指示を仰いだ
「ドクター どうしますか？」

『…うん？ ああそうだね こちらからガジェットを送ろう そ
れで彼を回収してくれたまえ

あと その金庫にある銃弾 それが起源弾だよ 隣の骨は原料の
様だ 忘れずに持って帰ってきなさい』

そう言ったきりドクターからの通信は途切れた。次の実験の準備
をしているのだろうか

おそらく…この少年を使った

ガジェットが三機やってきた

トーレは資料その他を一機ガジェットに乗せ

残り二機で生体ポッドごと少年を運ばせた

ガジェットと共にトーレは新たな姉弟になるかもしれない少年を

眺めつつ

【スカリエッティの研究所】に帰投した

1 / 起動

水の音がする

水に揺蕩う音がする

ここはどこで 俺は誰だろう

『問??う、??が私??マ??ーか?』

これは…:…なんだろう

『もし、??が??い??な??ら

??は??つてくれ??すか?』

なぜ…懐かしく思うのだろう

『…:…うん。??は、こんなコト??つちやダ??なん??ど…は、明??も

??いに??てくれる?』

なぜこんなにも心揺さぶられるのだろう

『??けた者が女なら??すな。目??で??なれるのは、??に応??るぞ』

悲しいのか

『??、??方にとって??はその程??の存在??すか』

思い出すのが辛いのか

『…:…ちゃった。??し、??しちやった。あんなに??にして??れてたの
に、わた??、??を、??し、ちゃった——』

消えてゆくのが虚しいのか

『??ったよね、兄貴は妹を守るもんなん??って。ええ。??は
??もん。なら、??を??らなくっちゃ』
??????

分からない

『僕はね、

????????

になりたかったんだ』

もう何も分からない

水の音が聞こえる

何かが消えていく

水の音が聞こえる

何が掠れていく

水に溶けて

何かが終わって

意識が消えた

◇◇◇◇◇◇◇◇

暗かった意識に光がともり徐々に明るくなっていく
身体に感覚が生まれ 指先が空気の流れを感じ取り始める 呼
吸の感触と自分の心臓の音が聞こえる

目を開けると 空気に触れた反射だろう 涙が溢れた
熱い雫が頬を伝う、何か夢を見ていた気がするが何も思い出すこと

はなかった

滲んだ視界がクリアになった頃 白衣を着た男がやって来た

「やあ！ 目が覚めたようだね

私のがわかるかい？」

喜色を浮かばせ なにやら楽しそうに男が問う

上体を起こし至極当然のように口を開く

そんな事……” 知らない筈がない”

俺を創った 俺を生み出した

”天才” 科学者 [Dr. ジェイル・スカリエッティ] だ

……データに一部 ナルシズムを感じるが気にしてはいけない

「ふむ…情報入力は上手く出来ているようだね

なら自分の事も分かっているね？」

もちろんだ俺は…

「俺は 戦闘機人 code. Archer これよりドクターの指
揮下に入る」

頭に刻み込まれた情報を確認するように復唱した

そう 俺は戦闘機人 正確にはナンバーズとは別アプローチ

での強化を成された、レリックを使用した人造魔導師とのハイブリッ
トだ

「うん 君の誕生を祝福しよう これから家族としてよろしく頼むよ
『シロウ』」

シロウ

聞き慣れたようで覚えのない単語に一瞬思考が停止する 胸に痛
みが走った様な気もしたが、すぐに消えてしまった

「シロウって…俺の名前はArcher じゃないのか？」

「それだと味気ないし 何より呼びにくいからね

名前はシロウということに今決めた」

あつけらかんと言う様子呆れつつ自分の開発コードがArche
r で自分の個体名をシロウという風に記録する

ドクターがわざわざこの名前を与えた真意は分からないが 『今決めた』と言うぐらいだし深い意味はない
ただの気まぐれなのかもしれない

『カシユツ』

背後でドアの開く音が響いた誰か入って来たようだ

「ドクター、シロウはもう起き……」

目が合った

合ったと思ったら視線が下にずれる

そう、丁度 俺のへその下あたりまで……

一瞬動きが止まったと思うと視線を逸らしながら俺の方に歩いて来た

そして……

『ドゴオオツ!!』

「ふげっ!？」

いきなりゲンコツを食らった

しかも割と本気っぽい力で……戦闘機人じゃなかったら頭蓋ぐらいは陥没していたかもしれない

「なんでさ……」

「下くらい履かんかバカモノ!」

言われて初めて気がついた……

俺 全裸だ

慌てて着るものを探すと自分のすぐ横に簡素な服が置いてある

上は白地に肩から手首にかけて薄紫の線が入ったシャツで下は濃い紺色のズボンだ、一見すると何かの制服のようにも見える

それらを手に取り、縮こまるようにして着替えた。

(それにしても、目が覚めたときドクターが言ってくれればこんな事にはならなかったのに……)

そう思いドクターを睨む

恨めしそうな視線に気が付いたのか、くつくつと笑いながらドクターは言う

「いや、私も言おう思っていたのだがね　あまりに堂々としていたから気づいていると思っただよ」

絶っつっ対、嘘だ！面白がって敢えて言わなかったに違いない。
そうじゃなきや、あんな悪い笑みは浮かべないだろう

「ゴホンッ！」

背後でわざとらしい咳払いがされる

「お前の戦闘指導を担当する事になったトーレだ以後よろしく頼む」
彼女は少し固い、けれど親しみを感じさせる表情で

そう言つて右手を差し出してくる

「あ、ああ　よろしく　ええつと……トーレ姉！」

「ね、姉え？　やつ、やめんか！トーレでいいトーレで!!」

トーレ姉が少し赤面しつつ顔を背けた

不覚にもちよつと可愛いと思つてしまう

「いいじゃないかトーレ、初めての弟だろう？」

ドクターも意地悪く微笑みながらオレに加勢してくる

トーレ姉は暫く葛藤していたがやがて観念したように溜息をつき

「分かったそれでいい、呼びやすいように呼ぶのが一番理にかなっているしな……うん……」

どこか無理やり自分を納得させているように見えるが一応、許可は貰えたのでよしとしよう

「それにしても、なんで此処に？」

ずつと気になっていいる疑問をぶつけてみる

「挨拶……と言うのも理由の一つだがドクターの事だから此処の案内もしてくれないだろうからな、

研究所内の案内と此処にいる他のメンバーの紹介を済ませようと思つて来た。」

成る程。確かに納得の理由だドクターは全裸すら指摘してくれなかったぐらいだし……

「この研究所には私とドクター、そしてお前以外には二人しかいない。

まあ二人共今は作業中で顔は出せなかったが、案内するついでに会いに行くでしょう」

そう言つてトーレ姉はドクターに向き合つた
「と言つわけでシロウはお借りします」

「ああ、ちゃんと案内してあげなさい

私もチンクとクアット口の調整に戻ろうかな

予定より二週間程遅れてしまつているのでね」

ドクターが怪しく目を光らせながら言う

オレとトーレ姉はすっかり研究者モードになつたドクターに背を
向けその部屋を後にした

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

モニターが立体的に並び様々なデータが映し出されている 不規則に浮かぶそれらは目眩を起こしそうな程大量に流れている

そんな部屋の中心で薄紫の少しウェーブがかかった長髪で背筋をスツと伸ばし 薄く微笑んでいる女性が目の前に座っている

「ドクターから話は聞いているわ

私はウーノ、主にドクターのサポートやシステム面での防衛が仕事よ

これからよろしくね」

「あつ…はい、よろしくお願いします、ウーノさん」

しどろもどろになりながら返す

忙しくキーボードを叩いていたのをわざわざ呼び止めて挨拶して貰つたので気が引けてしまったのかもしれない

そんな様子がおかしかったのか、ウーノさんはクスリと笑つた

「そう緊張しなくてもいいわよ、トーレみたいに呼んで頂戴」

「そう…ですか？ じゃあ よろしくウーノ姉」

そう言つてウーノ姉は満足そうに頷いた

と、何故かトーレ姉の肩震えている、何かあつたのだろうか？

「待て…なぜ私がトーレ姉と呼ばれている事を知っている…」

そういえばそうだこの部屋に来てからは一度も言っていないはず、
精々案内の途中で数回呼んだくらいだ

「まさか…見てたな」

恨みがましそうにトーレ姉がウーノ姉を睨む

ウーノ姉はそれを涼しい顔で受け流す

その態度に何も言えないトーレ姉を見るとなんとなく力関係が見えてくるようだ

関係はもちろんウーノ姉トーレ姉だ

「ドゥーエもいればよかったのだけれど

ついさつき任務に戻ってしまったのよ

だからまた後日挨拶に行くといいわ、ちなみにドゥーエは あなたの対人スキルの指導に当たる予定よ」

対人スキル？ 耳慣れない言葉に困惑する。人と対するというぐらいだから格闘術の一種だろうか？

俺の困惑を察したらしくトーレ姉が言う

「対人スキルと言うのは、自然な会話や態度、仕草などの事だ誘導尋問や思考操作も含まれるがな

私は苦手なのでドゥーエに任せた」

あんまりにもキツパリと言うものだから少し感心してしまった

しかし自分のできない事を気付けているというのは尊敬すべきところなのだろう

それにしても対人…会話技術が…

成る程、確かにトーレ姉は苦手そうだ…

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「さて…もう粗方案内は終わったし、あとは自室だが…空き部屋があるから自由に使っいいい。

今日は稼働したばかりだし もう休んでおけ」

そう言って空き部屋の多い棟まで連れてこられた

どの部屋も簡素なベットと机 水洗一式が揃っている

飾り気のない部屋だが、まあ部屋ってゆうものは大体そう言うもの

だろう

「うん、ありがとうトーレ姉。じゃあおやすみ」

「ああ、また明日」

案内してくれたトーレ姉にお礼を言って簡単に挨拶を済ませる。トーレ姉も俺に気を使って長居する事なくさっさと出て行ってしまった

『ドサツ』

ベットに倒れこむ 意外とこの研究所は広く説明を聞きながらだったからか、すべて回るのに3時間も掛かってしまった。幾ら戦闘機人とは言え稼働仕立てでこれだけ歩くのは割と辛かった。

「明日から…頑張らなきゃな」

なんてつたて訓練や調整で大忙しだ。トーレ姉によると固有武装やISの試運転もしなければならぬとのことと暫くは大変そうだ

徐々に目蓋が重くなってくる

自分で思っていたよりも一層疲れていたようだ

色々考えるのは明日にして 今はただこの眠気に身を任せよう

…

そうしてオレは1分も経たないうちに眠ってしまった

2 / 鑑定

side スカリエツテイ

先日、私はとても興味深い素体を手に入れた

切っ掛けは、そう【起源弾】という遺失物を手に入れた事だった
【起源弾】自体は闇オークションで競り落とした物だ。

しかし効果を疑う声が大きく私以外に興味を持った者はほとんど
いなかった

そのオークションは実用品を欲しがる 所謂マフィアやテロリスト、そして私のような違法研究者が主なものだったのも理由の一つだろう

コレクターらしき者も居ないではなかったが【起源弾】には興味は
持たなかったようだ

かくいう私自身も半信半疑だったがAMFの実験に使えるかと思
い気紛れに手に入れたのだ

しかし研究所に戻り解析してみると未知の宝庫だった

この弾丸には特殊な魔力が込められており「切断」と「結合」の効
果があるらしい

そういうレアスキル持ちの製造したものなのかそれとも魔法生物
由来なのか

それすら分からなかったが、ともあれ私の知的好奇心を著しく刺激
したのは言うまでもない

余りにも興奮しすぎて実際に撃ってしまったのも仕方ないと言え
よう

それに撃った時のデータもキチンと取ってあるので後悔はしてい
ない

まあそのせいでトーレを派遣する羽目になったのだが今回のこと
を考えると結果的に良かったと言える

トーレを派遣したのは第72管理外世界

星を滅ぼした原因と思われる【クモ】以外の生物が一切存在しない
灰色の世界

古くからその存在は知られており、ベルカ戦乱時にもこの世界から
発掘された遺失物が多数使われたと記録されている。

特にこの世界の衛星から発見された【巨神】と呼ばれる遺失物は凄
まじい猛威を振るつたとされる

それも【聖王の揺り籠】に討滅されたようだが…。

【起源弾】から発せられる微量の、しかし特徴的な魔力を辿り あの時
所を見つけ出した。

だが、そこで私は【彼】を見つけた……

【衛宮士郎】

星が滅びてなお形を損なわず眠り続けていた少年

サーチャー越しに彼を見た瞬間私は直感した…

彼は、私の最高傑作の一つになり得ると

トーレに彼を運ばせ直接見てもその考えは変わらなかった。

否。むしろ強くなったと言ってもいい

観察すれば観察するほど

解析すれば解析するほど

彼への興味は尽きなかった

【全て遠き理想郷】と言うらしい

彼が人としての形を保つことのできた理由だ

彼の資料から知ることができた

古き王の遺失物であり、癒しなどと言う半端なものではなく事象の

否定という力を持つものだった

だが彼の体が崩れていなかった理由はこれだけではない

これも資料から分かったことだがこの【全て遠き理想郷】ある特定

の人物が居なければ本来の力を発揮しないらしい。

そう。本来ならこの遺失物が体の中にあると言うだけでは力を発

し得ないのだ

なら何故この遺失物は十全の力を発揮し彼の体を守っているのか

…

その疑問は彼の体を解析しているうちに分かった

彼の体内には、リンカーコアが三つある

正確には彼のリンカーコアは三人のリンカーコアが融合して形成されている

一つ目は【衛宮士郎】自身のもの

二つ目は【彼と同質の何か】（おそらく彼のクローンか何かだと私は推測している）

そして、三つ目。

前の二つとはあまりに異質な極大の力を持つもの

何処か【竜種】を思わせる、Sランクのリンカーコアだ

この【竜種】のリンカーコアこれが【全て遠き理想郷】とリンクしているようだ

だが、さらに詳しく彼に調べていくと

これすらも、あくまで付属品でしかなかった…

【投影】

これこそが彼があそこで眠って居た理由だ

資料にはこうあった

『創造理念を鑑定し、基本骨子を想定し、構成材質を複製し、製作技術を模倣し、憑依経験に共感し、

蓄積年月を再現する

衛宮士郎のみに可能な魔法にも届き得る力である』

所々、意味のわからない場所もあるが、要は刀剣の類であれば遺失物だろうと何であろうと複製できるもののだと言う

それも魔力が続くかぎり何度でもだ

これには驚かされた。魔法とは物理法則を無視した力の総称でもあるが、ある程度の法則性、規則性はある

しかし、これは明らかにそれを無視している
あの世界でも恐れられたことだろう

さて彼の戦闘機人化にあたって一つ、いや結果的に二つ困ったことがあった

まず一つ目。

再生能力が高すぎて強化がしにくい

【全て遠き理想郷】によって常に身体が最良の状態に保たれるので切開して骨格を補強するだけでも一苦労だった

なので肉体面の強化は骨格の補強、人工筋肉への差し替えだけにとどまった

そして二つ目の問題だが、【全て遠き理想郷】により肉体面の強化が最低限になったことにより

本人の戦闘力があまり高くできなかったことだ。

生産だけをさせるのであればそれでも良かったかもしれない。

しかし彼はSランクの魔力を持っている

折角ならば活用したい。

そこで目を着けたのが彼、衛宮士郎の義父、衛宮切嗣の魔法だ。

衛宮士郎の資料と共に保管されていた素材

【魔術刻印】と言うものらしい

これは衛宮切嗣のレアスキル（と思われる）【固有時制御】の使用を可能にするものだそうだ

ただ正確にはこれは衛宮切嗣のものではなくその父、衛宮矩賢のものだ。

（衛宮切嗣 自身も同様のものを持っていたようだが、死亡した折失われたようだ）

【魔術刻印】というものは血脈と共に受け継がれていくものであり本来であれば衛宮矩賢から衛宮切嗣へと受け継がれる筈だったが、何か不備があったのだろう全体の約7割と思われる量が残されていた

血の繋がりのない衛宮士郎にはこれを移植するのは難しいことだったが、レリックで彼を蘇生させるついでに組織を変容させて上手く移植した

使えば使うほど身体に馴染んでいくことだろう…

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふう…」

シロウの調整が粗方終わり一息つこうとする

「ドクター、どうぞ」

目の前に紅茶が差し出された

どうやらウーノ が淹れてくれたらしい

「ありがとう、ウーノ」

お礼をいい一服する

それにしても、目の前に紅茶を差し出されるまでウーノ の接近に気がつかないとは

自覚していなかったが余程集中していたようだ

「それで、彼の調整はどうですか？」

「順調だとも、後は不必要な記憶の削除と必要事項の転写ぐらいのものさ」

ただ、彼の投影は記憶したもものから再現するという事なので、エピソード記憶は上手く消して、意味記憶を残さなければならぬ

とは言え二つは密接に絡み合ったものだ。

多少は記憶が残ってしまうだろう

まあ ある程度、記憶があつた方がより人間味のある人格になり易いだろうし

それはそれで面白い

「武装や固有機能の方は？」

「武装はトーレ達よりも防御に重きをおく予定だよ

固有装備については少し考えがあつてね」

「【起源弾】ですか？」

「ツ!! よくわかったね」

素直に驚く

と同時にここまで自分の事を理解してくれているウーノに心強さを感じる

「衛宮切嗣の骨の培養の目処がついたからね

ただ大分劣化した出来にはなりそうだが」

「それでも十分でしょう ああ弾丸は魔導師には脅威です」

「ああ それともう一つ考えていることがあつてね…」

「それは？」

考えただけで笑みが溢れてしまう

ウーノには気づかれているだろうか

「シロウの【起源弾】を作ってみようと思ってるんだ」

「それは…また、可能なのですか？」

「どうだろうね、彼は特殊だから。ただ試す価値はあるだろう」

衛宮切嗣が切断と結合なら、シロウは剣

どういった効果が現れるかは未知数だ

「他に質問は？」

「…ああ、そういえばトーレがシロウの稼働はいつからか頻りに気にしていました」

「トーレが？」

「はい」

初めて自分より製造順が後の子が生まれるのだ

気になりもするか…

「ふむ…明後日の午後には目覚めるだろう

そう伝えてあげなさい」

「…はい」

それだけ言うとウーノは部屋から出て行ってしまった
それにしてもトーレが……うん

これから妹達も増える事だし『お姉ちゃん』と呼ばれるのに慣れて
おいた方が良くももしれないな

そんな事を考えつつシロウの調整を再開した

3 / 訓練

広い空間

そこにトーレとシロウが立っている

二人の距離は約二十メートル

何の合図も無く、トーレは地面を蹴り前進する

シロウも投影した黒白の双剣を構える

トーレが鞭のように右足を振りシロウの上体を狙う

シロウはそれを双剣を十字に交差させ防ぐ

衝撃がシロウを襲うが、トーレはすかさず身を翻し

地面に擦れるほど身体を下げシロウの足を払う

体勢を崩されたシロウは双剣を投げトーレの進行を邪魔する。転

けた後すぐさま後方に下がり、黒弓を投影し矢を構える

トーレは飛んできた双剣を下から払うように跳ね飛ばそうとする
が

「壊れた幻想《ブローケン・ファンタズム》!!」

突如、双剣が爆破しトーレの視界を奪う

その隙を見逃さず煙に紛れるように矢が放たれるが

トーレはISを発動し高速機動によって避け

先程までシロウがいた場所に目を向ける。

しかしとつくに姿はない

辺りを見回す

と、トーレは自分の足元に不自然な影があるのに気づく

上を見上げるとドリル状の剣のような物を番えたシロウが跳んで
いた

「偽・螺旋剣!!」

風を裂く音を響かせながら一直線にトーレに向かう

『ガアアアアアン!!!』

轟音と爆炎にトーレが飲み込まれる

シロウは地面に降り立ち辺りを確認する

若干その様子には焦りも感じられる

瞬間、土煙の中からトーレが飛び出し、シロウに上段の蹴りを入れる

「ッ!」

シロウも咄嗟に双剣を投影し防御するが精度が低かったのか敢え無く碎け散る

蹴りををまともに受けたシロウは跳ね飛ばされ壁に激突する

あまりの衝撃に意識が飛びそうになるが何とか堪え、

構えをとる

トーレも即座に接近し足技の手刀を織り交ぜた攻撃で猛攻する

シロウは投影する暇すらなく徒手空拳で対応するが

徐々にジリ貧になる

「固有時制御……二重加速!」

ISを起動し再起を計ったが…

「遅い…」

『ゴスツ!!』

トーレの回し蹴りがシロウのこめかみにめり込み意識を奪った

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「なんだ、この様は!!!」

広い訓練室にトーレの怒声が響く

床に正座しながら聞くシロウはキーンとする耳を抑えながら 決

まり悪そうに俯いている

「攻撃のあと油断するなど言っただろう!!」

「いや、あれは怪我してたら大変だと思って…」

「あの程度の攻撃が当たるか!! せめて撃ち抜いたのを確認してから油断しろ」

「はい…おつしやる通りで…」

偽・螺旋剣を放った時の事だろう、シロウは咄嗟に反論するが一蹴されてしまった

「それと、ISを使うタイミングが悪い。私に追撃を受けた時すぐに発動すべきだったろう

いや、寧ろ常時展開出来る位にはなっておけ。」

「それは…これからの訓練で出来るようになるさ」

「私が言っているのは心持ちの問題だ。全てにおいて言える事だが、意識しなければ出来るようにはならん」

「……………」

シロウは次々とダメ出しされ改善点を言い渡され、

反論してみるも悉く撃沈した

「だが まあ、投影と防御については及第点だろう

お前はどちらかと言えば遠距離型だが、近接防御はなかなか上手く出来ていた

ISをからめてカウンターを狙えるように出来ればなお良い」

「!!」

褒められて嬉しかったのか今ままで下がっていた顔を急に上げる

。何処と無くその顔は誇らしげに見える

「あとは…。そうだな立ってみろ」

「？」

シロウはトーレの意図が読めず、よくわからない様子で立ち上がった

するとトーレはシロウの前に立ち自分の背と比べ始めた。

「やはり私よりも小さいな。もう少し体格があった方がお前の戦い方に合いそうだが…」

「それは俺もドクターに聞いたけどさ、これから伸びるって言ったから……伸びるさー!」

「……………フツ…楽しみにしておこう」

身長の方はシロウも気にしていたらしく、ドクターに聞いていたようだ。トーレはさも期待していると云った風を装っているが、実際のところは自分より小さい弟が可愛いくてしょうがないのだろう。曖昧な受け答えになってしまっている

「さて…休憩は終わりだもう一戦するぞ!」

「はい!お願いします!!」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

二つの生体ポッドが鎮座されている部屋でスカリエッティが機材を弄りながら鼻歌交じりにクアットロとチンクの調整をしている

丁度ひと段落ついたのか片手にはコーヒークップが握られていた

『カシュ』

「ドクター失礼します」

「やあいらっしやい。どうかねシロウの様子は」

ドアの開く音と共にトーレが入ってきたスカリエッティは、にこやかに応対しシロウの訓練について尋ねる

「順調です。実戦に配備しても、さして問題ないかと……………ただ」

「ただ?」

「投影を応用した戦闘は最早完成されているとさえ思います。しかしISの使用と何より…優し過ぎる…」

「……………」

トーレが懸念していたのはISの使用の拙さだけではなかった。寧ろ攻撃した相手の心配をしてしまうような弟に管理局相手に殺し合いができるかを心配していたのだ

しかし、スカリエッティはその懸念を否定した

「心配ないよ…トーレ、彼は確かに優しい……………けれどね その優し

「さは家族だからこそ与えられる物なのだよ」

「?」、ドクターそれはどういう…」

「トール、彼はね必要とあらば非情になれる人間だという事だよ」

シロウは優しい。けれどそれはごく狭い範囲でのものだ。そうスカリエツティは言う

スカリエツティにとつてこれは思いがけない幸運だった。

トールも驚きはしたものの不快には思わなかった。

寧ろ喜ばしいとさえ思えた……何故かはわからないが

「ではシロウの事は問題ないね?」

「はい」

そう締めくくったスカリエツティにトールは懸念が無くなったこととの清々しさを感じさせるような返事をした

「それでドクター、ドクターの方はどうですか?」

「クアットロとチンクのことかい?二人とも順調だよ。チンクは3日後、クアットロは5日後に目覚める予定だよ。」

「二人の訓練も私が?」

「クアットロは必要ないね。そう言う運用ではないから。チンクはシロウと一緒に頼むよ」

クアットロもチンクも順調に調整が終わってきているようであると数日らしい

シロウが甘やかしたりしないか心配だがその分自分が厳しくしよう。と、トールは思ったがシロウの時ほど頭がスッキリしているのは慣れたからだろうか

「そういえば…シロウの起源弾の成果を聞いていなかったけれどどうだったんだい?」

「シロウの起源弾と言うと新しく作ったモノですか?」

「ああ、シロウを原料にして作った方の起源弾だよ」

【起源弾】、強力な殺傷能力をもったシロウの固有武装だ。スカリエツティの実験では詳細が分からなかったのでシロウに実戦形式で使わせるよう言っていたのだ

「あれは…あまりに殺しに特化しすぎているように思います。的に

使った魔力Aの魔法生物が内部からズタズタに引き裂かれて絶命しました」

今でも鮮明に思い出すことができる――

『Unlimited lost works!!』

シロウの詠唱が終わると同時に魔獣の体から刃が飛び出す。何本も、何本も、何本も

そして魔獣を絶命させた後、塵となって消える……

「腕の良い魔導師ならある程度抑え込めるかもしれませんが、半端な魔導師であれば即死は免れないでしょう」

「通常戦闘には向かない…か。もともとシロウの武装は 劣化【起源弾】を使う予定だったし【起源弾・剣】

は奥の手、と言うことにしようか」

「その方がいいでしょう」

通常戦闘において過剰な攻撃にメリットは少ない

殺す事だけを重視するのであればそれこそアルカンシエルでもぶち込んでおけばいいのだ

「他に気になった事はあるかい？」

「いえ特には」

「そうか、ではもう戻りなさい」

「はい、失礼しました」

報告が終わりトーレは速やかに退室する

スカリエツティはトーレを見送った後

背後の生体ポッドに向き直った

「シロウも完成したし、他の娘達も着々と準備が整ってきている…まだまだ駒は足りないが

レジアスゲイズ准将の事もあるし、仕事もちゃんとしなければね」

そしてスカリエツティは生体に向き直り端末を叩きながら作業に
復帰したのだった

4 / 姉妹

クアットロとチンクが起動してから二ヶ月がたった二人とも研究所での生活にはもう慣れたようで、各々が思うままに過ごしている

もちろん訓練以外の時間は、だが…

「はあ はあ……………」

「……………」

息が上がっているのはシロウ

無言で地面に突っ伏し、身動き一つしていないのがチンクだ

二人共訓練場の中央で疲労困憊といった様子で倒れ伏している

「シロウ、チンクを起こしてやれ。流石に呼吸させないと死ぬ」

「……………俺もだいぶキツイんだけど……………」

「やれ」

「はい…」

地面に倒れる二人を見下ろすようにたつのはトーレだ

案の定、息一つ乱れていない

シロウは言われた通り、疲れた体に鞭打って

気絶し呼吸も止まっているチンクの頬を軽く叩いて起こした

「おーい、チンク起きないと死ぬぞ」『ぺちぺち』

「……………はっ、私は一体……………」

シロウに頬を叩かれチンクが目を覚ます

ガバツとと上体を起こすと辺りを見回す

「なんだ……………訓練場か。」

安心したように息をつくチンク

その様子にシロウは何となく不安を覚え 勇気を出して聞いてみる

「……………」

「……………どうか、したのか？」

「ん？。ああ言葉にするのも難しいのだがな、お花畑とでも言うのだろうか。そんな場所に一人立っていた気がしてな：見知らぬ場所だったから警戒していたのだが、夢だったようだ」

「……………」

それはあの世の入り口なのでは？ そう口にすべきなのか、それともそんな場所でも警戒を怠らなかつた事に突っ込めばいいのか、シロウには分からなかつたようで 結局、スルーする事にしたようだ

「チンク、お前はもう少し体力をつけた方が良いな

それか動きを最低限にして消耗を減らせ

幸いお前は指揮官に向いている。そちら方面で腕を磨くのもいいだろう」

「そうだな、私もそう思う。そもそも私の I S は機動力自体はあまり必要としないからな」

「ああ、あとお前は周りを見て判断する能力に長けている。他の妹を指揮するのが一番良いかもしれんな」

シロウの心情を知つてか知らずか勝手に反省会兼意見交換会を始めるトーレとチンク

シロウは二人の話に参加する事も出来ず一人溜息をついた

トーレにしてもチンクにしても軍人氣質と言うか真面目というか、どうにもお堅い雰囲気がある

シロウとしてもその事は尊敬しているが、こういう時話しに入りづらくて気まずいのだ

「——というわけで、シロウはクアットロと共にドゥーエのところに行つてこい」

「……………へ？」

話を聞いていなかったのだろう。シロウの口から間抜けな声が出る。【ドゥーエ】というのが自分の二番目の姉であり、対人訓練を指導してもらう予定であるということ思い出すのに暫く時間がかかった

「はあ…ドゥーエが昨日の夜帰還したから手解きを受けて来いと言つたんだ」

トーレに言い直されて漸く頭が回り始める。

「ええええっ?!?!ドゥーエ姉帰ってきてたの?」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

初めてシロウがドゥーエに会ったのはクアットロが目覚めて数日した日だった。

『はぁーい、初めまして。ドゥーエです』

気軽にドゥーエ姉って呼んでね』

第一印象は明るくて優しいお姉さん

能力が潜入向き、というか潜入目的で製造されたので基本研究所にはおらず 何処かしらに潜入しているらしい

『会話や仕草、態度で人の印象というものは概ね操作出来るわ。情報を引き出したい人、籠絡したい人そういう人については事前にあらゆるデータや記録を知っておかなくてはならない。』

それが出来れば平静を失わせたり、場合によっては操ることさえ出来る』

こんな事を言う人だ

クアットロはこれに大変感銘を受けたらしく

以来、ドゥーエお姉様 と呼んでいたりする

特に【操ることができる】辺りが彼女の琴線に触れたのかもしれない

そんな事を考えつつ歩いていると、もうドゥーエの部屋に着いてしまった

『コンコン』

「どうぞー」

シロウはドアをノックし中の住人の了解を得てからその部屋に入った

中に入るともうすでにクアットロは来ていたらしくドゥーエと楽

しげに話していた

「それでっ？その後はどうしたんですの？」

「その管理をしている司教さまが実はド変態でね、

シスターに破廉恥な格好をさせる趣味を持っていたの」

「そこにつけ込むんですのね」

「そう。最初は新人のシスターとして、それで司教さまに近づいて徐々に骨抜きにしていくな」

最後はスパッと始末して任務完了ってとこ」

「さっすがドゥーエお姉様ですう。」

「クアットロもこれくらいなら出来るようになるわ」

「がんばりますう」

黒い、鬼畜と形容しても生ぬるいくらいの会話をしている姉妹をなんとなく言えない気持ちでシロウは見ていた

性癖を暴露され、変態と呼ばれ、挙句殺された司祭にシロウは少し同情する。この分だと教会側にも今の内容が知れ渡っている事だろう。ドゥーエはそう言う人だ

「司教って事は今回の潜入先は聖王教会だったのか？」

「そうよ。聖王教会の聖遺物の確保とデータの頒布、思っていたより

簡単だったわ…」

「シロウお兄様あ、今良いところだったのにい」

話を中断させたシロウにクアットロが恨めしげな視線を送る。

シロウは『わるい、わるい』と謝りながらドゥーエに重ねて質問した

「じゃあ今度はどの位居られるんだ？」

「ひと月後に次の任務に就くわ。しかも管理局の中核への潜入だから年単位で戻ってこられないわね」

「そっか……………、寂しくなるな」

「ええ……。だから、このひと月でクアットロとシロウには教えられるだけのことを教えるわ

幸い二人共筋はいいからね」

笑顔でそう言うドゥーエにシロウとクアットロも頬を綻ばせてしまう。任務中は非情で容赦ない冷酷なドゥーエだが、家族に対しては

とても優しく、愛情を持って接してくれるのだ。

そもそもナンバースというのは、それぞれ形に違いこそあれど基本的に皆、家族を大切にしている性質を持っている

ウーノは厳しいが全員の事を常に気にかけているし

ドゥーエは側に居られないからこそ、他の姉妹よりも愛情過多で

トーレは愛するからこそ己にも姉妹達にもストイックで

クアットロは見下しこそすれ見捨てはしない

チンクなどまだ生まれても居ない妹の特性を考えながら編成を組み、自己鍛錬に励んでいる

程度の差こそあれど彼女たちは家族を愛している

そして、シロウも。

家族は自分が守らなければならないという強迫観念に駆られる程だ

トーレとの訓練で思わず手を出して抜きかねない程にその気持ちは強い。

(なお最近はこの全力でもトーレを殺せないと悟り、加減するどころかより苛烈になっているが)

それが、何処からきた気持ちなのかシロウには未だ分からなかったが、とても大切な物の様な気がするので

消えない記憶がある

『??ったよね、兄貴は妹を守るもんなんだって…ええ??はおお??ちゃんだもの、なら??を守らなくちゃ』

何語かも、何を言っているかも分からない言葉

けれどシロウはこの雑音にまみれた言葉が、どうしたって消えないのだ

ドクターに聞いても、曖昧に返される

ただ、それは自分自身のものなのだ、だから大切にしなさいとドクターは言う

その事にシロウは納得して居なかつたけれど、どうでもいい事だと、既に割り切っている

「……………ロウ、シロウ!!」

「はいいい?!」

「何、ぼうつとしてるの。授業、始めるわよ」

色々考えて居たせいかシロウはまたも姉に怒られる事になった。いつの間にやらメガネを掛けた（多分伊達）ドゥーエが立っている

「さて、じゃあ今日は相手を油断させる会話法ね」

「はぁーい」

先生らしく言うドゥーエにクアットロが元気に返事をしている

こんな平和な日々が続けばいい

そう シロウは思った

5 / 強襲

新暦67年

突然だが、スカリエツティは広域指名手配される次元犯罪者である。

その生体科学技術はミツドの100年先を行っているとさえ言われており、もし犯罪者で無ければ歴史に名を残したであろうとされる程の天才である

当然ながらそんな彼にはアジトであり研究所であり住処でもある場所がある

彼は日々そこで研究を重ね、違法実験を繰り返していると言うわけだ

さて、ここで話は変わるが時空管理局と言うものがある。この世に無数あるという次元世界を管理し平和を保つ正義の機関である

当然ながら次元世界を管理するというのは非常に難しく、テロリスト相手に戦ったり、内部の汚職を摘発したり、まだ見ぬ次元世界で危険な遺失物を発見し、世界が滅びるのを防いだりしなければならない
つまり、局員に求められるレベルは非常に高い。

最前線であれば尚更である

話を戻そう。

つまり、何が言いたいかと言うと、スカリエツティの研究所を発見する事もある。と言う事である

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「アルピーノ!!そちらは、無事か!？」

「ゼスト隊長!大丈夫、私含め、隊員5名 全員無事よ!」

癖のある茶色の長髪の男が問うと、紫の髪を真ん中で分けた女性が

答える

アルピーノと呼ばれた女性の側には怪我こそしているものの自力で動ける局員が4名いる

「そうか…、ナカジマはどうした？」

「部下数名を連れて奥に進んだわ。」

「そうか…：総員！聞け、怪我人の治療が終わり次第我々も、奥に向かう」

ゼストは状況を確認し、すぐさまナカジマの援護に向かう事に決める。今のところ、ガジェットしか出ていないから良いものの、魔導師が出てくればどうなるか分からないからだ

クイントはそう言う意味では抜けているところも、あるのでゼストは心配しているという側面もある

彼女はもともと母性の強い女性だったが3年前だろうか…2人の戦闘機人の子供を引き取ってから、更に強くなった様な気がする

クイントは子供が実験体にされているのが許せないのだ。その事も相まって先行してしまっただろう

「すまないが、それは許可できない」

ゼスト、メガーヌ、他隊員らは突然の声に警戒する。見ると、少女が三人立っていた

「ごめんなさい、ここで通行止めです」

甘ったるい、神経を逆なでする声が響く

その声に反応したかの様に大量のガジェットが姿を現わす、ガジェットはゼスト達の退路を断つ様に取り囲む

「我々は時空管理局だ、投降すれば釈明の余地が与えられる…：」

ゼストの言葉にも三人の少女は反応しない

「動ける者はガジェットを、動けない者は後方支援に回れ！俺とアルピーノは魔導師を捕縛する！

アルピーノ、いけるな？」

「ええ、もちろん」

ゼストはすぐさま臨戦態勢を整え、部下に指示を送る

(ナカジマ…俺が行くまで持ち堪えろよ)
ガジェットが飛び上がったのを切っ掛けに戦いが始まった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その頃、クイントは部下2名と共に通路を走っていた
(設備が整ってきた…そろそろメインプラントも近いはず)

クイントは長年の経験から此処からメインプラントがそう遠くない事に勘づいていた

だいたい違法研究所というものは、外側から見るとただの廃棄された建物や工場に見えることが多い

しかし、中を少し進むと足元が見えるぐらいの灯りがあり、更に進むと こう言っては何だが、生活感のある様子になってくるのだ

(もう少しすれば隊長たちはの増援も来るはずだし、このまま順調にいけば…)

だが現実是非情である

『ヒュツ…カ カ カ カッ!』

「ッ?!」

目の前に放たれた矢にクイントとその部下の足が止まる。矢はクイント達の足元からほんの数センチ先に正確に撃ち込まれている。

矢の飛んできた方向を見ると、1人の少年が天井のパイプの上に立っていた

「此処から先は立ち入り禁止だ……」

「……………」応聞くけど、投降の意思とかある?」

「ない!」

「そうよねっ!!」

こちらを睨む少年にクイントは管理局の義務として投降を勧めが、取りつく島もなく断られる。しかし、予想どおりだったようで、足元に三角形の魔法陣を展開し

拳を地面に打ち付けた

『ウイングロード!!』

シロウが立つパイプまで光の道が形成される

クイントはその道をローラースケートの様なデバイスで突き進む。

シロウは両手に黒白の双剣を投影し迎え撃つ

クイントはスピードに乗った拳を振りかぶり前に突き出した。

『ギイイイン』

クイントの拳とシロウの剣が交差する

「クッー」

シロウはあまりの衝撃にこらえきれず体制を崩し落下する双剣は弾き飛ばされたのか手元がない

そこにすかさず2人の局員がバインドを仕掛ける

「バインド!!」

魔力の帯がシロウを捉えようと二方向から迫り来る

シロウは手に巨大な斧剣を投影し一線する事でそれを防ぐ。

斧剣を消し地面に降り立った

「投影開始!!」

「ツツ!!」

蒼電と共にシロウよ両手にそれぞれ赤色の布が現れる

何処と無く神聖な雰囲気を感じさせるその赤い布は蛇の様に、或いは紫煙のように揺らめいている

隊員2人は警戒し、身構える

「我に―触れるな」

その言葉が合図かの様に瞬時にその布は隊員2人を拘束する。魔法を使って抜け出そうとするも魔力どころかろくに体を動かすことも出来ない

【マグダラの聖骸布】

男性を拘束し、捕縛する力がある

神の子に付き添ったとされる聖人の聖骸布である

シロウは遠心力を使って、赤布を引っ張り2人を正面から激突させ気絶させる

「その布、遺失物かしら?」

「……………」

「ダンマリか……ここは君みたいな子供が居ていい場所じゃないんだよ」

クイントは困った様な悲しい様な複雑な表情をシロウに向ける。相対して見てわかったが、目の前の少年は自分が思っていたよりもずっと幼く見えた

こんな子供を実験に使っている違法研究者への怒りとこの子供救いたいと言う気持ちが湧き起こってくる

「キミ、名前は？」

「……………」

「そう……私はクイント！。クイント・ナカジマ!!」

……………もし、私が勝ったら君の名前を教えてね」

両者共に構え直す。

ピリピリとした空気が2人の間に流れる

耳が痛いほどの沈黙の中、シロウは限界まで集中する攻撃においてシロウにアドバンテージはないからだ

彼の剣は防御主体、距離を詰められた時点で弓も使えない。ひたすら耐えてカウンターを狙う

「あつ、後ついでに私の息子にならない？」

「……………はっ？」

急に空気が弛緩する。先程までの張り詰めた空気は何だったのかという程、なんとも言えない雰囲気になっている。シロウは訳が分からないと言った風に目を白黒させている

「いやゝ。私、違法研究所で見つけた子供を2人引き取ってるんだけどさ……、どっちも女の子だから 旦那が肩身狭そうにしてるのよね

だから……こんな事やめてさ、私の息子にならない？」

「……馬鹿かお前は、俺は戦闘機人でお前は管理局だ」

「私は大人で君は子供だよ。それに戦闘機人って言うのなら私の娘達

もそうだよ」

話が噛み合わない。シロウは最早、訳が分からないとかではなく何を言っているのか分からなくなってしまった。そもそも自分は望んでこの場にいるのだ、そこをいきなり『息子にならない？』だ。思考が混乱してもしようがないだろう

……ただ、ここまで真っ直ぐな愛情を向けられたのは初めてだったからだろうか。少しだけ、ほんの少しだけむず痒い様な感じがした

「……………勝つてから言え！」

「それもそうね！」

示し合わせたかの様に同時に前に飛び出す

シロウは両手に双剣を、クイントは四肢に魔力を纏わせる。クイントはステップを踏み、鋭く、速く、重い拳を乱打する。一つ一つの一撃が並みの魔導師であればシールドごと吹き飛ばされてもおかしくないほどのものだ。

シロウは両手に持った干将・莫耶でその一つ一つをひたすら丁寧にひたすら丹念に、往なし、躲し、防御する。戦闘機人であるとは言え構造的に脆いシロウは一撃でもまともに喰らえば昏倒させられかねない。

【全て遠き理想郷】は通常時は肉体ダメージの修復しかない。それ故に非殺傷設定による気絶を防ぐ事は出来ないのだ、多少復帰が早いだろうがそれだけだ。

『ギヤイイイイイインツ!!』

クイントの拳をシロウが弾く様に上に撥ねとばし、空いた脇腹に蹴りを入れる。フィールド魔法で軽減したもののクイントは後方に後ずさった。

「――全投影連続層写」

シロウは手を振りかぶり、宙に十数本の剣を投影し射出する。丁度クイントを取り囲む様に突き刺さったそれはさながら剣の牢獄の様だ

「――壊れた幻想」

詠唱と共に劍群が爆発する。

その爆発は床を抉り、空気を裂く。本来であればその中心にいるクイントが無事であるはずがない

しかし、クイントは煙の中から前に飛び出しウイングロードを駆使してシロウの退路を塞いだ

シロウも仕留められるとまでは思っていなかったものの四肢の一つ位は潰せた筈だと思っていたせいかな反応が遅れる

(どうやって防いだ？ 普通ならただでは済まないはずだが…)

そう思った矢先クイントの背中が目に入る

火傷と酷い裂傷でボロボロになっている

「成る程。前方の劍は叩き折り左右にシールドを張ったか。」

左右のシールドで威力を軽減し後方からの爆発をモロに受ける事で前に飛び出たという訳だ

簡単に言えば火縄銃だ。

前のスペースが銃口、左右のシールドが銃身、後ろの劍が火薬と言ったところか。まともな人間であれば実行しない様な危険な戦法だ

「それにしても、よく劍が爆発すると分かったな」

「直接劍で狙ってきたなら分からなかったけどねわざわざ周りに突き刺してくれたおかげで勘付けたよ」

成る程とシロウは素直に感心する。

確かに何か狙いがなければわざわざ劍を突き刺したりはしないだろう

「さてと、もう逃がさないよ。見たところ君、近接は得意じゃないでしょ？」

ここはもう私のフィールド。私は空を飛べないけどこの道の上なら誰よりも強い自信がある！」

魔力の道が縦横無尽に展開されているせいでシロウは思ったように離脱出来ない

その気になれば固有時制御で逃げ出せるかもしれないが反動の事

を考えると安易な仕様は避けるべきだろう

(仕様がない、サンプルになるかもしれないから極力傷をつけない様にしていたがそうも言ってられないか)

シロウは両手に持っていた双剣を消し、代わりに物々しい銃を取り出した。

クイントも今までとは様相が違うと警戒心を高める

その銃は彼のが持つ双剣と似た意匠が凝らされておりけれど何処か機械的で冷たい雰囲気感ぜられた

「I am the born of my sword……」

鉄の歯車は回り出した……

6 / 強襲②

爆発音と叫び声が響き渡る。床には機械の残骸が散らばっており、所々に赤い斑点が付いているのが見られた。大量のガジェットに埋め尽くされたそこは正に地獄絵図。四方をガジェットに囲まれた管理局員は防衛線を張り、ひたすら耐久戦を強いられていた。

そんな中メガーク又はインセクトを使いガジェットを操ることでも何か持ちこたえていた。

しかし、幾ら動きが良くなったとは言え十数機のガジェットでは防衛線を全て網羅する事などできようも無い。他の局員も努力こそしているものの魔力不足もあり犠牲者が始めていた

「ぐあ!!」

「下がって!! 怪我の治療をしつつ可能なら後方支援に! 魔力がある程度回復した人は今抜けた穴を塞ぎに行きなさい! 絶対にガジェットに突破させては駄目! 重傷者はなるべく中心に。」

必死に声をかけ部下を鼓舞する、そして何より自分自身に言い聞かせる様に 声を張り上げた

(大丈夫。ゼスト隊長もいる : 救難信号も送った。耐え続ければきつと……)

ふと、娘の顔が目に見えかぶ

あどけない表情、少しわがままなそぶり、日に日に成長していく背丈。

最近 仕事が忙しくてかまってあげられなかったから、今頃拗ねているかもしれない:

ちゃんと歯磨きしているだろうか、好き嫌いして居ないだろうか、お手伝いさんを困らせてないだろうか、……さみしくて 泣いていないだろうか

早く帰って安心させてあげないと……

「フツッ！ハアア!!」

火花が散る。ゼストは槍型のアームドデバイスを振るいトーレとチンクの攻撃をいなす。

トーレは高速機動と斬撃を駆使しヒットアンドアウェイを狙うが、完全に死角の筈の攻撃も全て読まれていた。チンクも爆発を応用して進行方向の制限をしている筈なのに気づけば出し抜かれている。

2対1という状況にも関わらず戦局はゼスト有利に進んでいた。

「チンク…」

「ああ、勝てない」

「クアットロの方は？」

「まだ時間がかかる様だ」

一旦距離を取り方針を確かめあう。ゼストは空戦Sランク魔導師な上に圧倒的な経験値を持っている。長年犯罪者と戦ってきたその力量は二人掛かりでも容易には突き崩せないものだ。

勘。幾ら知識があっても経験の少ない戦闘機人では獲得し得ない物だ。

速さで優つていても、先に行動されれば追いつく事は出来ない。

幾ら罠を仕掛けても、見抜かれれば対処される。

「なら…」

「私がひたすら攻め続ける、お前は中距離からI Sで誘導しろ、決して部隊の方に近づけるな」

彼女たちにとっての勝利条件はゼストを打ち負かすことではない。時間が来るまでただ足止めする、それだけだ。

一方ゼストも嫌な予感を感じていた。時間さえ掛ければこの二人を倒す事は可能だ、部隊もあの様子ならば、自分が戻るまで持ちこたえてくれるだろう。だが見あたらぬ少女のことが気がかりだった。ガジェットを操作しているのかとも思ったが、それにしても動きが単調だ。

いや、単調すぎる。まるでビデオでも流しているかの様な……

「…ツツ!!アルピーノ!!幻術だ!!」

ずつと感じていた違和感の正体、それは…部隊の統制がとれすぎていることだ。怪我をしたものが下がり、回復したものが前線に出る。だが、普通ここまで上手くいく筈がない。何処かで無理がでてくるものだ

しかし、そういった様子はない、全員必死で、けれど単調に繰り返している。唯一不規則な動きをしているのはメガーヌくらいのものだ。

ゼストは叫びメガーヌに警告を送る…だが…

「ぞああんねん♡ちよつと遅かったかなあ…」

突如、メガーヌの背後にクアットロが現れる。メガーヌは魔法で離脱しようと試みるが、その前に胸を熱い感触が襲う。痛みは感じない。ただ熱いそしてその中に冷たいナニかがある。恐る恐る見てみるとそれは血に濡れたナイフだった。

刺された部位から熱が溢れていく様に、傷の熱さとは裏腹に指先から身体が冷えていく。

他の隊員はどうしたのかと辺りを見回すが自分以外に立っている隊員は既に居なかった…

「どう…やって…」

血を吐きながら誰にと言うわけでもなく問う

「ありがとうございますいますう、わざわざ隊員をローテーションして下さったおかげで予想より速く幻術との入れ替えができましたあ」

「ツ!!それは…どういう…」

「ですからあ貴方達在必死に守っていた重傷者の何人かは幻術でコーティングしたガジェットなんですよねえ、後はもう…分かります?」

つまりこう言うことだろう

後方支援の何人はガジェットと入れ替えられていた

いや、最悪全員ガジェットだったのかもしれない。前線から戻って

きた隊員を殺して幻術を追加するだけで　　すぐに見事入れ替わりが終了すると言うわけだ

前線で必死に戦っている間に背後に気を使うことなどありはしない。そもそも、気にしない為の後方支援だ

その前提が崩されていた時点で遅かれ早かれ負けるのは確定していたのだ

「アルピーノオオオ!!!」

ゼストが吠える様にしてメガーヌの名を呼び側に駆け寄ろうとする

しかし

ザシユ……

その隙を見逃そうとするトーレではなかった

インパルスブレードがゼストの胸に深く突き刺さる

「ぬうう!!　あああああああ!!!」

それでもゼストは前進を辞めない。

トーレを突き飛ばし全力で部下達の元へ向かう。ガジェットの残骸を踏み倒し、血を吐き意識を半ばトばしながら進む

「アルピーノ!!」

メガーヌの元まで辿り着いた時既にクアットロの姿はなくメガーヌは胸から血を流し、浅い掠れる様な呼吸を繰り返していた。

床に広がる血溜まりは一目で致死量だとわかる

ゼストはメガーヌを抱き上げると微かに声が聞こえた

気管に血が詰まっているせいだろう、蚊の鳴くような声だが、ゼストにははつきりと聞き取ることが出来た

『娘を…』

ルーテシアの事だ。メガーヌの最愛の娘、不幸なことにメガーヌは夫をはやく亡くしてしまったが

ルーテシアがいた。

その溺愛ぶりは凄まじく乳飲み子だった頃から隊舎に連れて来ては皆に自慢していたほどだ

それだけ伝えて力尽きたのだろう、微かに力の籠っていた腕が落ちる様に血溜まりを叩く

それつきり彼女は動かなかった

「おお…おおあ あああああああああああああああああ!!

キサマらああああああ!!!」

さながら獣の様にゼストは猛る。もはや魔力すら通わないデバイスを構え少女達に突貫する

「もう眠れ……」

チンクはナイフを投げゼストの額に直撃させた

額を撃ち抜かれたゼストは膝から崩れ落ち

大地に倒れ伏した

チンクは死んだことを確認すると背を向け歩き出す

回収はガジェットが勝手にするだろう

そんな事を考えつつ ……気を緩めた瞬間……

「チンク!!」

トーレが彼女を呼ぶ。何事かと後ろを振り返ると

デバイスを槍をつがえるように構えたゼストが真後ろに立っていた。その目に生氣はなく黒い穴の様にも見える。

ゼストが槍を突き出す。

突然の事だったので対処の遅れたチンクは右目を抉られる。眼孔を蹂躪する鉄の塊の痛みに顔を顰めながら

ナイフを取り出す。ゼストと自分の間に割り込ませる様にナイフを投げ爆発させる。

その衝撃でなんとか離脱したが 防御外套の甲斐もなく
自身も火傷を負う

ゼストは流石に力尽きたのかその場に倒れ込んだ
今度こそ命を燃やし切ったようだ

「チンク！無事か!？」

トーレが安否確認の為か駆け寄ってきた

「ああ、大事な右目をやられたが他はたいした事はない」

右目を抑えながらチンクは言う

その様子にトーレは一安心したと同時に怒りが沸き起こってきた。

「敵の目の前で背を向ける奴がいるか！馬鹿者め！」

「すまない、油断した……」

「今回は大事にならなかつたから良かったものの、

お前は……」

「長くなるなら後にしてもらってもいいか？　少し、やりたい事が出来た……」

トーレの説教を遮るようにチンクは顔を上げた

その様子に、ただならぬものを感じたトーレはおし黙る。

「わかった、……だがすぐに戻れ此処にいつまでも長居は出来ない」
「ありがとう……」

不承不承といった風に歩き出したトーレにチンクは礼を言う。
トーレの後ろ姿を見送った後、彼女はゼストに向き直った。

「騎士ゼスト……だったな、ここが戦場でなければ負けていたのは私だ。
その強さ、感服した……」

チンクは倒れ伏すゼストに向かって語りかける。

「死してなお、お前は立ち上がった。技量も魔法も何もかも、かなぐり
捨てて私の右目を奪った……」

その意思だけで。

私は……心から貴方を尊敬する。

この眼の痛みと共に……決して忘れはしない」

それだけ言うとチンクはトーレが向かった方に歩き出した。その顔はどこか満足げで誇らしさが滲み出していた

その頬が少し上がっている事に彼女は気づいていただろうか？

7 / 強襲③

ひとりの男の子に出会った……

ある違法研究所で、その男の子は私に剣を向けてきた
私を排除する、とその子は言う。

物騒な武器を手に、私より少し高い背の男の子は私に牙を剥いたの
だ

けれど所々おかしいところもあった、

例えば初めの矢。全ての矢が的確に私達の足元に打ち込まれた。

おかしい。普通なら的の大きい身体を狙うべきだ、足を止めさせた
いからといって態と外す意味はない

射った矢を防がれたとしても警戒の為、結局 足は止まるだろう
し、防がれなければそれだけで一人脱落させられる。

けれどその子は、それをしなかった

やさしい……子なのだと思う

それを示すかのようにその子の目には迷いが見て取れた。 戦う
事への迷いではない、そういう意味では彼に容赦は無かった。

この子の迷いは相手を傷つける事への迷いのように思える。 お
そらく自覚が無いのだろう。 けれどそれは確かに彼の根本に根付い
ているものだ……

ふと、スバルの顔が浮かぶ。

そうだ 誰かに似ていると思ったがスバルに似ているのだ。 自分
が他人と違うのを理解しているのだろう。 極端な程、傷つけるのも傷
つけられるのも嫌う傾向があった

この男の子を例えるなら、覚悟を決めて芯を持ったスバルといった

ところか…

つい頬が緩む、娘のことを思い出したかだろうか…

不意にこの男の子とギンガとスバルが仲良く遊んでいる様子がい浮かんだ。

もしかしたら、こんな未来もあつたのかもしれない

「キミ、名前は？」

—いや、今からでも遅くは無い

「—私はクイント！、クイント・ナカジマ!!」

—こないいい子がここにいて良い訳がない

「—私が勝ったら、君の名前を教えてね」

—余計なお世話かもしれない、勘違いしているのかもしれない。けど、そんな事はどうでもいい

これは私のワガママだ……

「—私の息子にならない？」

……あつ、でもこの子にも兄弟いたらどうしよ…

……まああと5、6人くらい増えても問題ないか！

◇◇◇◇◇

研究所の一角、そこでひとりの少年とひとりの女性が対峙していた。少年、シロウを取り囲むように魔力の道が縦横無尽に引かれておりその上に女性、クイントが立っている。

クイントは油断していた。無理もない、退路は断ち 自分に有利な条件に持ち込んだのだから。

だが、目の前の少年が銃型のデバイスを取り出したのを見て背筋に悪寒が走った。

物々しいデバイスだが、そこまでおかしなところは見られない。けれどその銃から発せられる殺気は、今までとは比べ物にならない程の

濃度だった

「I am the born of my sword…」
「…ツツ!!」

少年の詠唱が始まると、周囲の温度が下がったとような気がした。よく分からない、よく分からないが何か危険だ。そう直感したクイントはウインググロードを滑り少年と距離を詰める。何かかがどうにかなる前に捕縛してしまおうと思ったからだ。

「でえええりやああ!!」

ローラースケート型のデバイスを軋ませながら最大加速で風を切る。シロウとの距離2m、

魔力を込めた拳を振りかぶり勢いのまま打ち付ける。

ドゴオオオン!!!!

轟音と共に破片が散る、シロウはクイントの全力の拳を受け、床に倒れ——てはいなかった

「ッ!? 何処に——」

ダアン!!

背後から、短い発砲音が聞こえた。

鈍い痛みを背中左側に感じる

焼けた鉄が肉を焼く音がする……何処から?

クイントは自身の左脇腹をみる。貫通した様子はないどうやらこの音は自分の中から聞こえてきているようだ

「どう…やって…」

「……………」

クイントの疑問にシロウは答えない

【固有時制御・十重加速】

今現在、シロウにとって最速の移動術である

時間を制御し一瞬を多大な大きさに引き延ばすことで加速する、十重加速というのは本来戦闘機人の頑丈な肉体であっても、効果の後のリバウンドで絶命し兼ねない程の負荷がかかる

シロウは慣れない様子で口唇を読み意味を汲み取る

―か・ぞ・く・に・な・ら・な・い・？―

「ツッ！」

意味が伝わった事に気付いたのか、クイントは微笑む

身体中を壊されて今まさにその命 潰えようとしているものには似つかわしくない笑顔だった

「お前は……い……この後に及んで……！！」

怒りとも失望とも取れない声色でシロウは言う

握りしめた拳は震え、その顔は歪んでいる

（そんな戯言を……こんな状況でも、お前は言うのかッ。自分を殺した相手に、こんなになつてまで）

シロウには理解出来なかつた自分を殺す相手に向かつて家族になろうなどと、ふざけた事を言う意味が分からなかつた。

するとクイントはまた口を動かし始めた。もう意識も殆ど無いらしく弱々しい動きでシロウも口唇を完全に読む事は出来なかつた。ただ、3文字だけ読み取る事が出来た。

―な・ま・え―

名前の事を言っているのだと理解するのに少しかかった。『勝つたら名前を教えてね！』たしかそう言っていただろうか。

約束が違うじゃ無いか…

そう思ったが、何故か言いたい気持ちになつた

最後まで局員として自分を守ろうと助けようとしている彼女の姿に胸を打たれたのかもしれない

「私は…いやオレは――」

シロウだ そう続けようとした。

だが、シロウがその言葉を言おうとした時にはクイントは既に息絶えていた。

義理堅い…のだろうか。結局、彼女は約束を破らなかつた。自分の負けを認めて素直に息を引き取つた

シロウは自分の手が汚れるのも構わず微笑んだままのクイントの

瞼をなぞり目を閉じさせた

立ち上がり、背を向ける

——君は優しいね——

そんな声が、聞こえた気がした

その言葉は妙に耳に残って自分を壊していくような感覚があった

「オレは……優しくなんて……ない！」

言い聞かせるように、刻み込むように言葉を吐く

誰にも認めさせないように、誰もが認めないように、何より……自分が認めないように。

その言葉を否定する。

自分は優しくなどないのだと

『おつ兄様ああ、こちらクアットロ、敵は片付けましたあ。そちらはどうですかあ？』

クアットロから念話が来た、どうやらあちらも済んだようだ

「こつちももう終わった。すぐ戻るよ」

「はあい、引越しの準備もありますしいなるべく急いでくださいねえ」

そう言つて念話を切るクアットロ、少し機嫌が良さそうだったが、作戦がうまくいったのだろうか

後で聞いてみようとおもいつつ歩き出す

シロウは横に転がしておいた局員二人を速やかに処理し、「マグダラの聖骸布」を消しその場を後にした

8 / 猛獣

ある午後の昼下がり、シロウはいつもの様にラボの掃除をしていた。

頭には白い頭巾を被り割烹着の様なものも着ている
手にはハタキと水の入ったバケツ―雑巾がかけられている―を
持っている

基本的にはル●バのような掃除ロボが辺りを絶えず清掃している
のだが、気づいたら暇な時掃除するのが日課になっていた。何か言い
ようもない満足感と言うか妙にしっくりくると言うか、まあ そんな
訳で掃除をしていた。

因みに頭巾や割烹着、その他は全て投影品で何故か使い慣れている
様な気がする

「よしっ、これで終わりっつと。」

『シロウ、ちよっといいかい?』

掃除がひと段落ついた頃に、ドクターから通信が来た

いつも通りののにやけた笑みがやはり怪しさを醸し出している

「いいけど…何かあったのか?」

「ああ、急ぎの用という訳ではないんだが、ちよっつとみてもらいたい物
があつてね。私の部屋まで来てくれるかな?」

「了解っ、片付けが終わったらすぐいく」

「待っているよ…」

そう言う通信を切るドクター。それにしても見てももらいたい物
とは何だろうか、

一応長話になるかもしれないからお茶でも淹れて行くか。

そうしてシロウは厨房に向かい茶を淹れてからドクターの私室に
向かった

コンコン

「ドクター、入るぞ。」

『……………』

返事はなかったが、どうせ中に居るだろうと思いシロウはドアを開けた。

思った通りドクターは部屋で待っていた様で一人中央で立っていた

「やあ、よく来たね」

「呼んだのはドクターだろ」

それもそうだと笑う。ドクターは見ても見ても見たいものがあると言っていたが、それらしいものは見当たらない

「ドクター、見てもらいたい物って何だよ」

「実は、昨日また闇オークションに行ってきたね…」

ドクターは偶にオークションに行ってきた遺失物を買ってくる事がある。正規のオークションではあまり目当ての物はない事が多いらしいけど、所謂闇オークションでは本来管理局が保管していなければならぬ物が出品されたりするらしい。

「ある遺失物を買ったんだが、なかなか興味深くてね」

「どんな効果があるんだ？」

「うむ、移動速度を3割増し、反射速度を2割増しにすると言う物だよ」

それは凄くもないか、いや十分強力ではあるんだけど、ハッキリ言っても物凄い遺失物と言う訳ではない

けれどドクターがここまで注目するのだ、まだ何かあるに違いない「なんて名前かは分かったのか？」

「ああ、その名も【デンジヤラスビースト】と言う。」

第72管理外世界でかつて使われた鎧の一つだ

でんじやらすびーすと、……どう言う意味だろうか、オレも最近ではドクターの命令で色々な次元世界に渡り研究所を襲ったり、遺跡を発掘してきたりしたがまだミッド語以外の言語は習得出来ない

のだ

「【危険な獣】という意味らしいね。この鎧の前に歴戦の猛者たちが悉く敗れ去ったと言う文献が残されていたよ」

「【危険な獣】：か、さつき聞いたデータでなら大したことないと思ったけど、文献といい名前といい本当はもつと恐ろしいチカラを持っているのかもしれない」

「今何処に？」

「トーレに言っついていま着てもらっているところだよ」

「速さといえばトーレだからね、と続けるドクター。確かにその通りだ。」

プシュ

タイミングよくトーレが到着したようでドアの開く音がした

「ドクター、こー——」

紫色の線が見えた

ガシツ

シロウは後ろから万力の様な力で頭を押さえつけられる。指が頭蓋にめり込んでおりメリメリと嫌な音を立てていた。

「いだだだだだっ！、トーレ姉：痛い痛い！」

「ー振り向いたら……、コロス……」

『本気』である、本気と書いてマジだ。

「ツドクター、何故ここにシロウがいるのです。私はは聞いてない!!」
「いや、それを着たトーレが最大どの位の速度を出せるのか気になってね？シロウの全投影連続層写なら実戦に近いデータが取れるとおもってね、お願いしようと思っただけさ」

つらつらと説明するドクターだが、物凄い良い笑顔だ

しかもいつもの、ぎよろついた爬虫類めいた笑顔ではなく、爽やかな、それでいて明るい笑顔だった

——いや誰だよ

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そんなわけで訓練場。シロウは戦闘服に着替えていつでも投影できるよう準備を整える。

一方トーレも諦めたのか準備体操している。なお、あまりにもトーレが抵抗するのでクアットロにお願いしてシロウからは見えないよう幻術が掛けられている

実験が始まれば消すそうだが、トーレは

『全力で走れば見えない筈……』と呟いていた。
必死である。

『それじゃあそろそろいいかい?』

ドクターの声が響く。シロウとトーレは問題ない旨を伝えると実験は始まった

まずトーレが飛び出す。速すぎてシロウの目にはただ紫色の線が通っている様にしか見えなかった

すかさずシロウの投影がトーレを襲う。

数十本の剣がトーレに向かって放たれるがその全てをトーレは躲けていく

というよりトーレが速すぎて剣がトーレに向かって放たれた時にはトーレは既に遙か遠くに移動していた

「ッ!!」

シロウは集中しトーレの移動パターンや加速度を見極め剣を放つ。

そうすると徐々にトーレの近くに着弾するようになってきた

シロウは更に集中する。トーレの足運び、視線、体重の移動、体幹の向き。それら全てを観察し、剣の速度を調節する。あと少し、あと少しで――

『そこまでー!』

ドクターの声で我に帰った。時計を見るともう20分も連続で投影し続けていたらしい

『データはだいたい取れたからもう休んでいいよ』

ドクターが実験の終わりを告げた。

叫び声とともにトーレが拳を振る。足首から腰、背、肩、手首全ての関節の捻りを利用し、捻り叩き込む様にして前に突き出す。それは音を置いてけぼりにし、終いには光を超え、無音無色の世界で放たれた

「なんでっ！ふあああああ!!」

シロウは錐揉み回転しながら天井に突き刺さる、首から下が吊るされている様子はさながら前衛美術の様だ

ぷらんぷらんと力なくぶら下がるシロウは電球の様にも見えた

「おおお…おおおお………」

トーレは獣の様に唸りながら頭を抱え膝をつく、何故か彼女の周りからは色が消え燃えかすのように見える

その顔色は何うことはできないが死んだ目をしているに違いない
ひとしきり唸りそこに小さな水たまりを作った後、彼女はその後を後にした

ちなみにシロウは、チンクが偶々通りかかるまで四時間半ぶら下がったままであり、陰でドクターとウーノに散々観察され笑われていたそうなの……

おまけ

スカさん「シロウ！あの姿のトーレを見てどう思った？」（自白剤ブチュー）

シロウ「ううん、トーレ姉は基本スーツしか着ないから、新鮮な感じがしたかな。トーレ姉は筋肉質だけど案外肉付きはいいからあの服とマッチしていたと思うよ。訓練の時からずっと思ってたけどトーレ姉は胸が大きいから腰との対比が凄かったね少し服のサイズ

が小さいせいとか食い込み気味なのも蠱惑的だった。だけどそんなことより一番目を引くのはなんといいってもお尻だよ。あの服じゃあほとんど隠せてないんだけどさ尻尾のせいで絶対に全体を見る事は出来ないんだ。そこがまた良いと思うんだよ。不完全だからこそ無限の美。完全に見えてしまったら完璧止まりなんだよ、全部見えなからこそ無限の可能性がありそこに限りない美しさが生まれるんだ。もちろんむき出しでも全く垂れず形を保ったままのトーレ姉のお尻があつてこそだけだね。他にもトーレの恥ずかしそうな顔、見たかい？トーレ姉はいつもキリツとしてカッコいいけどこういう弱々しい姿を急に見せられると並みの男たちならコロツといつてしまうだろうね。そのくらいの威力がある。それと太もも、太腿より太ももの方がなんだか良さそうだと思うかないか？まあ良い、太ももは全体で見れば露出が少なく魅力が少なく思われるかもしれない、ちがうよ。布一枚隔てた先に理想郷があるというのがなんとも想像力を掻き立てるとおもわないか？特にトーレ姉は脚は鍛えてるだけあつて綺麗な形をしている流線型の形は最早造形美の域だろうその脚に張り付く布、曲げるたびに細かな皺が寄るんだ……良い、凄く良い。それにフアーの上にあるレース部分、あれって凄くエロくないかい？さつきも言ったけどチラ見せつて一番イヤラシイと思うんだよね。そういう意味では上半身は減点かも知れないけど張り巡らされた紐がアクセントを加えて見せすぎない印象を若干抑えてるんじゃないかな？まあ見せすぎだけど。あと話は変わるけど戦闘中のトーレ姉は凄かったよ。何処がつて？あまり言い過ぎるものではないけど我が目指すべき丘とだけ言っておくよ。つとまあだいたいこんなものかな？まだまだ語り足りないけどね!!」

トーレ「ああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

9 / 旅立

新暦69年

「シロウ、クラナガンの闇市で密売人をやってみないかい？」
「なんでさ……」

気持ちのいい朝だった、研究所内でも数少ない日の当たる場所の食堂。そこでドクターはコーヒーを飲みながら新聞を読んでいた。俺が皆んなの分の朝食を丁度作り終わった時出し抜けに言ってきたのだ。

「いや、クライアントの依頼があつてね それに一番適してそうなのがシロウなんだ」

コーヒーを啜りながら言う。因みにドクターは朝食はパンとコーヒーしか食べない。一応ハムエッグとサラダは作っているのだがドクターはいらなうと言つて誰かしらに上げている。主にトーレに

ウーノ姉によるとこれでもましになった方らしい。俺が朝食を作り始める前はドクターは昼と夜しか食べなかつたらしく、朝はコーヒーのみだったそうだ

ただ一番変わったのはトーレ姉だという。以前はレーシオンしか口にせず、せいぜい気まぐれに茶を嗜む程度だったらしい。(因みにレーシオンは無味だ、一度食べてみたが食べたものじゃなかつた)

なお、トーレ姉は今、姉妹一の大食漢でありめちやくちや食う。ウーノ姉もクアットロもチンクも見た目の割に食べる方だがトーレ姉は格が違う。多分、米換算だと一食 6合位食べてる

『シロウ！おかわりだ！』

ほら 今も聞こえてきた

流れる様に茶碗を受け取りご飯をもってシヤモジでぺちぺち叩く

そんな食事情だと大変だと思ふかもしれないが、意外とそうでもなかつたりする。

何というか、慣れているというか、大量のご飯を作るのに身体が適応している気がする。

もしかしたら前世ではトラやライオンの飼育員だったりしたのかもしれない

閑話休題

「密売人って随分 物騒な話に聞こえるけど…」

「無論物騒な話さ。ミッドの首都クラナガンは時空管理局の地上本部があるとはいえ中心部以外はかなり治安が悪いし、そこに潜入して密売人をやってこいというのだから危険極まりないね」

ニヤニヤ笑いながらスカリエッティは言う。やはりその顔はどこか楽しそうだった

「それに なんだってそんな話が出てくるだよ」

「ふむ、私のクライアントというのが、まあミッドのお偉いさんでね。テロリストを駆逐せずに、それでいて戦力を自在にコントロールできるようにしてほしいと無茶振りを言われて困っていたんだが…シロウならなんとか出来そうだからね」

「？」

話が見えずシロウは疑問を頭の上に浮かばせる

クライアントの話と自分との関連性がわからなかったからだ

「つまり…ね、シロウの投影品をテロリスト共に売りさばいて欲しいのさ」

得意げにスカリエッティはニヤリと笑った

その顔を見ながらシロウは得心がいった様に頷く

「なるほどな、投影品なら幾らでも作れて流すのが楽って事か…」

「ああ、あと自由に消せるわけだから、都合が悪くなったら消せば良いし、最悪爆発させて壊滅させるのもありだね」

武器としての信用は薄れそうだけど…と続ける

さらっとスカリエッティが恐ろしい事を言うが つまりは意図的にテロリストに投影品を普及させて戦力を持たせる。安易に力が手

に入る訳だからテロリストもわざわざ他の物に手を出さなくなる。それに、対勢力同士も同等の力を持つ訳だから牽制しあって活動も消極化する、というわけだ

だが、シロウにはまた新たな疑問が生じた

「密売人をやるのは良いけど…：戸籍とかつてどうするんだ？ 幾ら裏の仕事って言っても…」

管理局とて間抜けではない。職務質問くらいするし断ったら捕縛する権限だつてもっている筈だ。

勿論 その事はスカリエツティも先刻承知だつたらしく白衣の内側からピツと紙を取り出した

「既に偽造済みだよ、パスポートも作っておいた。」

シロウは紙を受け取ると内容の確認をする
すると、名前の欄に見慣れない文字があつた

「シロウ・エミヤ…、エミヤ？」

「苗字だよ、今日日苗字の無い人間なんてそうはいないからね。勝手につけさせてもらったよ」

「それにしたって、こんな珍しい苗字じゃ目立つだろ…」

「大丈夫さ、ミッドは多民族社会だしちよつと珍しい位が丁度良い」

ミッドチルダは次元世界の中心とも言われる場所だ。それ故に様々な世界出身の人々が生活している。そのせいか苗字が被る事はあまり無かつたりするのだ

「それに、住所？…ここって…」

「住所がないと困るだろう？」

「いや、そうじゃなくてさ…」

紙に書いてある住所は、クラナガンの地上本部にほど近い歓楽街の一角だつた

場所的に考えて局員達が日常的に使いそうな場所である。シロウの記憶でもここら辺は確か喫茶店やバー、居酒屋が立ち並ぶ区画のはずだ

「だめだろ…ここは。確かに 拠点は居るし住所も無いと不便だけださ…」

局員の闊歩する区画で、密売人が生活するのは如何なものか。と言うのがシロウの本音だ

「その事なんだけどね…シロウには情報収集と情報操作をして欲しいんだ。」

「情報操作？」

おうむ返しに繰り返すシロウ、情報収集は直ぐに思い当たったが、情報操作の意味がよく分からなかったのだ。

「ドゥーエが今、管理局に潜入しているだろう？」

彼女に内側で噂を流してもらって、その裏付けをしてもらいたいのさ」

噂というのは広がりやすいものと広がりにくいものがある。二つの違いは色々あるけれど、その違いの一つは、複数人からの信用があるか無いかだ。

知り合いから聞いた噂をその知り合いとは全く関わりのない人から聞いたりすると、『やっぱりそうなんだ』と思い込みやすくなったりするのだ

「けど、それにしたってこんなところにする事なかったろ？ もう少し目立たない所でも……」

「やはりお酒の力というのは偉大だからね、酔っている方が口も滑りやすいだろうし。それに…、料理得意だろう？」

「っ……むう」

ぐっと押し黙るシロウ。実は初めから口論では勝てない事は分かっていたのだ、シロウがシラフ相手に口を滑らせる話術があるかといえは無いのだ。ただ意固地になっただけで、結局納得することになるのは薄々勘づいていた。それに、料理が得意かどうかは置いといたとしても、好きな事は確かだった

「ーじゃあ決まりだね。他の資料は後で渡すから待ってくれたまえ。後は……そうそう、これを渡しておくよ」

ポケットからスツと取り出されたのは何やらサングラスの様な機械だ、レンズが一枚なのでバイザーと言った方がしっくりくるかもしれない

「表稼業と裏稼業をする訳だからね、変装用さ。掛けると髪を白い色素が覆って髪色を変えてくれる、同様に肌も褐色に変わるよ。魔法に拠らない、純粹科学のみで作られたものだ、多少は勘づかれ難くなるだろうさ」

シロウはバイザーを受け取り、早速つけてみる。すると髪が瞬く間に白く変わり肌も褐色に覆われた。髪型を変えれば完全に別人の様に見えるだろう

「ていうか、さつきから気になってたんだけど、これだけ拠点をしつかりさせるって事は…長期任務？」

「そうなるね。せいぜい帰ってこれて…月一って所じゃないかな？」

その言葉にシロウは少し寂しさを感じた、なんだかんで生まれてから一度も長期で家族と離れた事は無かったのだ、それも仕様が無いのかもしれない

まあドゥーエは基本、家（研究所）にいないし、こういう事もあるかと覚悟はしていたのだろうが…

「もともとシロウは、長期任務を想定して造られたのだから、心配する事はないわ…」

ウーノが空になった皿を片付けながら会話に参加してくる。

「そうなのか？」

「ええ、前 クアットロと一緒にドゥーエの訓練を受けたでしょう。あれは、今回のことを想定しての物なのよ。」

そう言えば、そんな事もあったなとシロウは思い出す。

結局、完璧に習得する事はできなかったが、あの時確かに人の籠絡の仕方や油断のさせ方も学んだのだ

あと、ついでに ちよつと危ないクスリの調合なども習ったがこういう時に使うための物だったらしい

「ーさて、私はやる事があるから研究室に戻るよ。ウーノの食器を片付けて置いてくれ。」

「はい」

スカリエツティはコーヒー飲み干した後、新聞を畳み空になったマグカップをウーノに渡す

「シロウ、キミも街についての情報を今のうちに頭に入れたり、荷物の整理をしておきなさい」

そう言うときスカリエツティは食堂を後にした。

食器がカチリと鳴る音や、コップをコンツと置く音だけが響く。元々彼らの食事風景は静かなものだ。全員、稼働からそれなりに時間が経っていて精神的に成熟しているからだろうか。

「シロウ、少しいいか?」

出し抜けにトーレが口を開く

シロウは自分の分の食事を机に並べ、『ああ』と頷きながら座る。話があるなら腰を据えた方が良いと思つたのと、そろそろ自分も空腹だったからだ

「…いや、ここでする話でもないからな、食事の後でいい…。」

私は先に行っているから落ち着いたら来てくれ。」

シロウはトーレの意図が分からず頭の上に疑問符を浮かべるが考へても無駄と判断したのか軽く頷く。

「そうか…では後でな」

トーレは手を振り、ドアを開けて食堂から出て行った

——大量の空になった食器を残して……

「俺が居なくなっても大丈夫かなあ……」

シロウは慣れた手つきで山積みになされた食器を手に取ると、流しに持って行き、スポンジで洗い始めた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

白い。何もなくなただ、ひたすら広い空間。

照明の明かりが床をハッキリと照らし、壁に敷き詰められた防音、

耐衝撃性の素材に付いた傷を強調している様にも見える。

—そこに二つ、影を落とす者がいた。

トーレとシロウだ。

「シロウ…お前も、もう単独で長期任務に就くまでになった。

お前の成長を私は嬉しく思うし、期待もしている。」

「—なっ…なにつ言っただよ…急に—」

シロウは一瞬間の抜けた表情をした後、腕を振りながら赤面する。いきなり褒められて 嬉しいやら、恥ずかしいやらで混乱してしまっただのだ。

「いや、恥ずかしがる事はない。お前はそう言われるだけの強さを持っていると思っっているよ…私は。」

トーレはシロウの様子を見て、薄く微笑みながらそう言った

そして、ほうと溜息を着くと眼に光を宿らせ、鋭い眼光を放つ

「…だからこそ、此処で試して置こうと思っただ。

お前が…どれだけ強くなったかを…」

構えを取り、殺気を放つ。空気が揺らぎ、床が軋む

身体中の人工筋肉がキリキリと音を立て、つま先から毛の一本までに気が張り巡らされる

顔は正面に向けられその眼は鷹のように鋭くシロウを射抜いている。

部屋の温度が下がり、トーレの本気がうかがえる様だった。

一方のシロウは少し安心していた。

先刻承知だったからである。自らの姉がただ自分の力量を試したいがためにこんな事をしているのではないという事を。

トーレがただ自分の身を案じてこの様な行動を起こしていると分かっていたのである

彼の姉は、トーレは、ただ一人遠方に行くシロウが心配なだけなのだ。

力量を測るなどと言っているがその実、實力を見せて安心させてほしいというのが彼女の本音だった。

シロウは両手に馴染みの双剣を投影する。

体から絞り出す様に息を吐き、緊張で中を満たす。

肌に突き刺さる殺気を己が眼光で封殺し、：構えをとった。

ギヤアアアンツ!!

突如火花が散る。

いつの間にか二人の距離は縮まり、互いに音速を超えた攻防を繰り広げていた。

シロウは【固有時制御 五重加速】で、トーレは【ライブインパルス】を常時展開しひたすらに打ち合う。

二人の武器が ちか合う度に空気が絶叫を上げ床を軋ませる。

もし其処にガラス細工があったなら容易く砕け散っていただろう。

三〇合ほど打ち合った時だろうか：シロウは一際強く、剣を振り抜いた。

両腕を交差する様にしてトーレはそれを防ぐが、衝撃を殺しきれず僅かに後退する。

シロウは双剣を投げトーレの眼前で爆発させ、視界を遮り大きく後方に跳ぶ。

突然の爆発だったがトーレは折り込み済みの様で、平然と範囲外まで離脱する。土煙のせいで悪くなった視界の中、辺りを警戒して感覚を研ぎ澄ます。

ヒュンツ

土煙を裂く様にして数本の黒い矢が放たれる。全ての矢が真っ直ぐトーレに向かっており、その技量の高さを伺わせる。

トーレは努めて平静に、一射ずつ粉碎する形で対処する。

砕け散った破片が木っ端になっている事から強烈な、それでいて素早い動作だと分かる。

しかし

全ての矢を受け切ったと思った瞬間、太ももに焼ける様な痛みが走る。見ると白い矢が深々と脚の肉を抉るようにして突き刺さっていた。薔薇の棘の様な返しが大量に付いているらしく抜く事は出来なさそうだ。

「白い……矢、ふっ成る程な……」

白いと言ったが正確には少し灰色みの入った白だ。恐らく矢の一本の影の位置と重なる様にして放たれたのだろう。

他の矢が全て黒だったのも錯覚を引き起こすための布石だったのかも知れない。

明瞭になってきた視界の奥で、油断なく士郎は矢を番えトーレの様子を伺っている。手心を加えているのではない、自身の姉が 片足を封じられた程度でどうにかなるものでは無いと信賴してこそその警戒だ。

暫しの沈黙の後、トーレの姿が一ブレた。

シロウが気づいた時には目の前にトーレは移動しており、既に間合いに入られ、突き上げる様な拳が唸りを上げている。

「ライドインパルス」トーレの IS であり高速移動に特化した能力だ。制御を考えずただ直線を移動するだけなら、一流魔導師の砲撃すらも止まって見えるほどの速度を出すことが出来る

シロウはそれを上に跳ぶ事で威力を軽減し、剣を構えた。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

落下の威力に加え、体幹を捻り回転するようにトーレに斬り込む。下で待ち受けるトーレは痛みに耐える様に顔を歪ませながら血の滴る脚で大地を掴み防御姿勢をとった

ガアアアン!!

粉塵が舞い 一帯を隠す。破片が転がる音、風が壁を叩く音。この二つ以外は全く聞こえず不自然に思える程静かだった

暫くして粉塵は散り様子が明瞭になってくる。

地面にはクレーターの様な窪みができ、辺りにはヒビが出来、床の欠片が散乱している。

そしてその中心では……

横たわるトーレと見下ろすシロウが居た。

トーレの顔の真横には剣が突き刺さっており、敗北の象徴の様にも見える。

「俺の勝ちだ……トーレ姉……」

「嗚呼……本当に強くなった」

両者の間にもはや先ほどの様なピリピリとした空気はなく、いっそ和やかささえ感じられる。

スツ とシロウは手を伸ばし、トーレが起き上がるのを助ける。

握って見ると思いの外ゴツゴツとしていて男性的な手の平に驚きながら、トーレは上体を起こしそのまま立ち上がった。

「脚……大丈夫だったか？」

「気にするな、この程度直ぐに治療できる。それにつー」

シロウが若干気にした様に尋ねるが、トーレは平然と返す。まだまだ甘い位だ！と続けようとした時、トーレは自分がシロウを見上げている事に気付いた。

「？、どうかしたか？」

「……………」

心配そうに自分を慮る弟を足先から見てみると、もう自分より頭半個ほど大きい事に気づいた。

まだまだ甘ちゃんやんで、弱くて、頼りないと思っていた弟が自分より強く、逞しくなっている事を漸く知ったのだ

「いや、なんでもないさ……」

「??？」

寂しさと嬉しさが緋い交ぜになった心を隠す様に、不器用に口角を上げ微笑む。

「シロウ、お前は……もう私よりも強い。」

——だから、もう守れない

「今回は任務は難しいものだろう。」

力だけでどうにかなるモノでもなさそうだな。」

——だから、私は力になれない

「だが、お前は勝った。少なくとも、そこらの魔導師にやられる事もないだろう」

——だから……

「だから……行ってこい……」

これは彼女のワガママだ。トーレの了承など無くてもシロウは行くだろうし、それが当然のことだ。

シロウもトーレもそれは分かっていた。

けれど、何処か納得する為の…理由付けのようなそんな『何か』なのだ……

「ああー行ってくるー！」

シロウは笑い、トーレもワラった

10 / 始動

薄暗い部屋。埃っぽく、切れかけた電球がぶら下がり、チカチカと瞬きながら其処を照らしている。

そんな場所に四人の男が立っていた。いや、三人と一人の男が立っていた、というのが正確だろう。

三人の男に一人の男が対している。

ダンツ

三人の男の一人が近くにあった小汚い机の上にアタツシケースを置く。中には何か詰まっている様で重い音がした。

「……約束の金だ…、其方もちゃんと持ってきたんだろうな…」

ガチャリと後を立てケースを開く。中には紙幣が詰まっており、その金額は数年遊んで暮らせる程のものだ。

「ああ、商談成立だ。それにしても、また随分と買い込んだな。何処かで抗争でもあるのか?」

「余計な詮索はするな『アーチャー』、……マナー違反だ。」

アーチャーと呼ばれた男は肩を竦め、息を吐く。バイザーが顔を覆っている為表情を伺う事は出来ないが、軽率な発言だったと反省している様だ。

「いや、すまない。私も自分が卸した武器で殺されては堪らないからな、つい気になってしまったんだ。ほら、これが依頼の品だ。」

アーチャーが先ほどのケースよりも更に大きく重いケースを取り出す。黒く横に長いそれからは、何処もなく冷たい空気が感じられる。

男は後ろに控えていた2人に命じ、中の確認をさせる。

ガコンツと開いたケースの中には、刀剣の類が何本も入っている。他にも銃弾が入っていると思われる箱もいくつか入れられていた。

「無銘10本、【無毀^アロン^ダイトなる湖光】一本、【劣・起源弾】15ダース…確認しました」

「そうか……アーチャー、私達はこれで失礼するよ」

男達はアーチャーに背を向け、出口に向かった。古びたドアに手を掛け開く。外から光りが漏れ、彼らを陰で隠す。

「二つ忠告だ、アーチャー。近いうちに西区で小規模だが抗争が起こる。管理局も黙認する程度のもだろうが、なるべく近づかない事だ。」

そう言ったつきり足早に出て行ってしまった。

彼らはミッドチルダの首都クラナガン近くの廃墟街を根城とする暴力団の組員だ。ヤクザと言った方が分かりやすいかも知れない。

クスリや風俗を主に収入源とする無法者達だが、管理局もある程度黙認している。

ヒトは何処かで欲を発散する場所が必要であり、管理局の人間がそう言った場所を運営出来れば一番良いのだが、既に骨子が出来上がっていたのでいっそ認めてしまおう。というのが管理局の考える所だろう。

なお、余りにも危険な薬物や劣悪な環境の風俗は取り締まられている様だ。当然と言えば当然なのだが。

なので対外的には、管理局とこういつた組織は敵対している。という事になっている。

そんな彼らだが、もちろんのこと一つに統合されているわけではない。数多くの組織が縄張り争いに明け暮れている。

男が最後に忠告してきたのもそう言ったものなのだろう。

「それにしても……中々繁盛するもんだな……」

シロウが『アーチャー』としてクラナガンで密売人を始めてから二月が経っていた。

スカリエッティが宣伝でもしてくれていたのか、飛ぶように売れている。先ほどのヤクザのような反社会团体や、反管理局団体が主な相手だ。

稀にコレクターらしき一般人や他世界の武人が買い付けに来るが、

やはり未だ少なめだ。

因みに、反管理局団体で最も利用者が多いのは聖王教会である。勿論、聖王教会自体を反管理局団体と呼ぶのは間違いだが、一部には管理局体制を快く思わない者がいる。

聖王教会の比較的緩い戒律がそうさせているのだろう。教会は内部で多くの派閥がある。その一つが「ベルカ独立派」だ、所謂タカ派に近いかも知れない。

表立って反目はしないものの、日々独立の為行動している。

他にベルカの騎士は元から砲撃主体ではなく、刀剣を使った者が多いのも利用者が多い理由の一つだ。

プルルツプルルツ

シロウの端末から着信音が鳴る。それを手に取り画面に表示されている名前を見る。

シロウにとって見慣れたその名は件の教会の者だった。まあ、『彼はタカ派でもハト派でもないのだが……』

『私だ…』

『注文はいつもと同じで、黒鍵10ダースを頼む。場所も私の教会まで来てくれればいい。今日中にな…』

一方的に話を進める男だったが、シロウは慣れているようでスムーズに商談が進んで行く。

「此処からなら二時間で着く。それまでに金は用意しておけ。」

『了解した。楽しみに待つとしよう…』

通信が切れる。

シロウは深く溜息をついた。シロウはこの男のことがどうにも苦手だったのだ。

けれどそんな事も言ってもらえず、商品を速やかに用意する。

黒鍵とは、シロウの投影できる剣でも投擲に適した物の一つだ、十字架を象っており重心が切っ先にあるので 普通の剣として使う事は難しい。

シロウは再び溜息をつく、先程より重く 深い溜息だ。彼としては

あの男に会うのは、正直嫌だったのだ。

とはいえ仕事、顔を合わせたく無いからと言ってすっぱかしているものでも無い。

シロウは重い足取りで教会に足を運んだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇

丘の上に建つそれ程大きいとは言えない古ぼけた教会、其処が男の住処だった。

男は上機嫌だった、少なくとも数少ない趣味であるワインを傾ける程度には機嫌が良かった。

グラスに注いだワインをステンドグラスに透かし揺らす。

血のように赤い其れは男の趣向を表しているようにも見える。

ギイイイイ

教会の重く大きい戸が開く。

立っていたのはバイザーを掛け、顔を隠した白髪の男であった。

「よく来たな、アーチャー……」

「来たくはなかったがね……コトミネ……」

互いに軽口を叩く。こういったやり取りは、今までに何度も交わされているようでごく自然なものだった。

シロウは肩に掛けていたバックを床に下ろす。中に入っているのはおそらく黒鍵だろう。幾ら黒鍵が刃を魔力で編めらと言っても、柄だけでかなり重量があるようだ。

10ダースも有るのだから当然である。

「それで？用はなんだ。」

「なんだとは？」

「お前みたいなのエセ神父が、用もないのにこんな所に呼び出すわけが無いだろう……」

シロウの目がバイザー越しにコトミネを刺す。

コトミネはそれを些かも気にした様子もなくグラスを傾けている。

「……………」

「……………」

「……………ときどき、……………」

「？」

「喫茶店の経営はどうだ？繁盛しているか」

「…ああ、繁盛しているとも、昼も夜もな。」

シロウは密売商の隠れ蓑として、喫茶店を経営している。殆ど取引場として使う事は無いが、ごく稀に仕方なく使う事もある。

因みに夜はバーとして経営しており、最近隠れた名店として有名になりつつある。なので正しい意味でも昼と夜、両方繁盛していると言える。

「それは何よりだ、そう言えば、最近 世間を騒がせるのにも一役買っているようだな」

「何のことだ？」

「無論、先日殉職した、若き管理局員の話だ。」

コトミネはそう言うと、側に置いてあった新聞を放り投げてくる。

「ティード・ランスター／一等空尉、無駄死にか…」と一面に取り上げられている。

彼は先日、殉職した管理局員で違法魔導師を取り逃がした挙句、亡くなった。

それについて、彼の上司が辛辣なコメントをした事が物議を醸している。

「その一等空尉を殺した武器…お前が卸した物だろう？」

コトミネは何が楽しいのか、愉悦を顔に滲ませながら嗤う。

その表情はとでもでは無いが聖職者と呼んでいい物ではなかった。

否、いつそ聖職者に徹しすぎているからこそその物でもあった。

「……………そうだが、それが何か？」

「いや何、間接的には言え、未来ある者を殺した感想はどんなものかと思っただけ……………」

「別に、何も感じはしない。間抜けな局員が一人死んだ。それだけだ。」

シロウはただ淡々と何の感慨もなく口にする。まるで些かの興味もなく、正に今知ったと言わんばかりの態度だ。

「自分のせいで人が死んでいても興味がないか」

「ああ、俺のせいで人が死んだとしても興味は無い」

ハッキリと、断言する。

「……………」

「……………」

暫しの沈黙、互いに言いたい事はいい終わったようで、もう何も言う事は無いといった風だ、

「……………成る程な参考になった。無駄話に付き合ってくれて感謝する、シロウ・エミヤ……」

「…今度からはもつと手短に頼む、キレイ・コトミネ……………」

シロウは金を受け取りさっさと出て行くこうとする。1秒でも早くここから去りたいと言う気持ちが見て取れるようだ。

「そういえばアーチャー、かの上司殿は今朝亡くなったそうだが…何か知っているか？」

「——知らないな。」

扉が閉まった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

全く面白いな、あの男は

シロウ・エミヤ。またの名をアーチャー、裏ではもつぱらアーチャーで知られている。

ここ数ヶ月で急に台頭した密売人で、その特異な武具は多くの無法者達に注目されている。

かくゆう私も彼の武器をとても気に入っている。

アーチャーはその武器だけでなく、彼自身の技量の高さも有名だ。噂によれば、彼から武器の出所を聞き出そうとした組織が数刻で壊滅したと言う。

また、情報屋としても一定の信頼を得ており、徐々に顧客を増やしつつある。情報の出所はおそらく彼が経営するバーで局員から聞き出しているのだろう。

最近局員もよく利用するようになってきている。昼の喫茶店も同様だ。

なお、シロウ・エミヤがアーチャーだと気付いているのは私ぐらいの物らしく、恙無く店を繁盛させているようだ。

強力な武器、優れた戦闘力、巧みな話術。裏でのアーチャーの評価は大体こんなものだ。

けれど、私があの方に注目するのはそんなことではない。

力、技、芸。こんなものはあの方の人側面どころか付属品に過ぎない。

真にあの男をあの方足らしめているのはその精神性だと私は考えている。

一見、あの男は冷酷で冷酷で無感情だ。

——違う……

あれは、己が業に苦悩する咎人だ。己が罪にねじ切れるほどの苦しみを感じながらも。見事に人形を演じきっている。

否、人の心を得た人形が人になりきれず、かと言って人形にも戻れず苦悩していると言った方が適切だろう。

——冷酷で無慈悲で機械的……けれど

「……………慈愛　いや、【やさしさ】……………か」

私は未だかつて、これ程までに美しくも醜悪で捻れて複雑に壊れている者を見た事がない。

……だから……

「これからも私を楽しませろ……エミヤ・シロウ……」

聖職者は神の血を口に含み、その愉悦に歓喜した。

11 / 決意

——兄が死んだ。

仕方のなかった事なのだと思う。管理局はあまり認知されていないけれど、危険の伴う仕事も多い。

管理局員は須らく自身の危険について理解しているし、その家族もいざという時の覚悟と言うものは持ち合わせている。

だから…、兄が死んだ事については 悲しかったけれど 泣いてしまったけれど——納得することが出来た。

寧ろ、最後まで戦い抜いた兄に対して誇りすら持てた。けれど

『——犯罪者を追い詰めたにも関わらず、取り逃がした?! 一般市民に被害が出ていないから良かったものの…とんだ役立たずだ!』

しかも…そのまま野垂れ死んだだど?

死ぬのなら、せめて役に立ってからにして欲しかったものだ、こんな者が局内に居るからいつまで経っても地上は安定しないのだ。』

これは、兄の上司にあたる人のコメントだ。

——正論……なのだろう。兄が管理局員としての責務を果たせなかった事も、なんの手掛かりも得られなかった事も何も間違っていない。

間違っていない。

間違っていないと思ってしまうからこそ……私はこんなにも悔しいのだ。

そう、悔しい。兄の尊厳を踏みにじられた事が、兄が誰にも認められなかった事が。

あれ程努力し、才能に溢れ、夢を追いかけていた兄が、少しも報われずに本当の姿を忘れられていくのが……

そして…何より……

——憎い

兄を罵倒したあの男が、それに同調する世間が……。

彼らが兄を殺したのでは無い。彼らは兄の死に何ら関わりはない。その筈なのに、私は兄を殺した違法魔導師よりも彼らの方が憎かった。

『——とんだ役立たずだ！』

何度も何度も頭の中で繰り返される。その度に、指先は震え 鼓動は速くなり 歯は軋み 視界はぶれ 呼吸は浅く重くなり 酷い耳鳴りが脳を揺らす。

全身の血が沸騰した様に熱くなり、胃に鉛を流し込まれた様な不快感と耐え難い焦燥感に酷くもだえる。

朝起きて、食事を取り、家事をして、学校に行き、帰ってきて、また食事を取り、夜眠る。

そんな日々の中で絶え間なく言い表せない感情を募らせ、苦しんでいた。

そんな時だった。

私が、【正義の味方】に出会ったのは。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

早朝、まだ日が昇りきっておらず季節のこともあつてか息は白く、吹く風は少し冷たかった。

こんな時間にも関わらず、道にはそれなりの数の車が走っており道を歩く人も少なからずいた。

私が立っているのは、クラナガンにある道路の歩道橋の上だ。気晴らしにでもなるかと朝早く街に来てみたものの、結局何をすることもなくそこに佇んでいた。

道路に視線を落とすと車が流れていく。気分は晴れなかったが、車の流れる様子を見ているのは飽きなかった。と言うより何も考えないでくれたのだ。

ふと、一つの車が目に留まった。黒塗りの大きな車で何処と無く高

価値物と分かる。道路の脇に止まり、人が出てこようとしているのが分かった。

車の流れの中で一台だけ止まっているのが目立ったのかその様子をぼうつと眺めていた。

けれど、出てきた男を見て呼吸が止まりそうになる。

管理局の制服に身を包んだ男、面識はなかったけれどその顔は嫌という程に見知っていた。

兄を罵倒したあの男だ。

この辺りは管理局の駐屯所などもあるし、その視察にでもきているのだろう。ともあれあの男がこの場所に来ていて不自然という事はない。

視界がジクジクと赤く染まる。心臓は痛いほどに鼓動して、握る掌に力が籠る。

気分転換のために態々、街まで出て来たのに完全に逆効果だったなと思う。家に居ても酷かったけれど、直に顔を見るのはもっと酷かった。

男は車から降りると 運転して居たであろう部下に労いの言葉も掛けずスタスタと歩いて行ってしまふ。

部下もいつもの事なのか気にした様子もなく、開いたままのドアを閉め車を走らせて行ってしまった。

私は、拳を握りしめながら、歩いていく男の背中をただ見ていた。

兄の死を貶めた男は、のうのうと生活している。兄の事など覚えて居ないかの様に。いや、実際覚えてなど居ないのだろう。それ程までにあの言葉は軽く 無価値だったのだ。少なくとも、あの男にとつては。

『死んでしまえばいいのに』

風に紛れて聞こえない程、小さな声が響いた。

はじめ、それが自分の物だと言うことにも気づかない程自然に紡がれたものだった。

幾ら何でも、罵倒されただけで人に殺意を抱くとは思っていないから、自分でも直ぐには信じられなかった。

『ああ、こんなにも人の心は思い通りにならないのかあ』

そんな事を思った。平和を守る管理局員の兄に憧れる自分が人の死を願うとは何とも皮肉なものだ。

その時だった。

突然、男の頭が弾けた。

脳漿と血が飛び散り辺りに濁った水溜りをつくる。朝方とは言え人通りは決して少なくない。運悪く近くに居た人に少し赤いモノが飛び散っている。

一瞬の静寂の後、辺りは阿鼻叫喚の地獄と化した。

逃げ惑う人々、震える指で管理局に連絡するもの、恐怖のあまり立ちすくむもの。反応は色々だったが、平和な朝はもう其処には無かった。

そんな中私は、柘榴は人の血だとよく言うけれど本当にそうなんだな…と呑気な事を考えていた。

だからかもしれない、ビルの屋上に立つ「ヒト」にたった一人気づくことができたのは。

私は目が良い自信があつたけれど、今でもなぜあの時気づくことができたのか分からない。けれどそれを見間違いないなどとは決して思わなかった。

気がつくとき、私は走り出していた。

ビルの屋上への階段を駆け上がる。エレベーターを待つ気にもなれなかった、ひたすら登り続けて屋上にたどり着いた時には息も絶え絶えで、心臓は爆発しそうになっていた。

屋上のドアを開く。

あんまり勢いよく開けたものだから、前のめりに突っ込んで転ぶ。直ぐに立ち上がって周りを見ると…

その人は…其処に立っていた。

兄より大きな背中、白い髪、褐色の肌、顔を覆い隠す様なバイザー。私が歩道橋からみた【ヒト】そのものだ。

「なにか用かね?」

しばらく無言で見つめていたせいだろう。いきなり声をかけられる、少し皮肉げで、何もかもを見通されているかの様な錯覚に陥る。

「……………貴方、ですよね…さつき人を撃つたのは……………」

「ああ、そうだが?」

平然と何の感慨もなく、その男は私の言葉を肯定する。あまりにも呆気なかつたので、暫く閉口してしまつたほどだ。

「人を……………殺すのは、いけない事じゃ…無いんですか?」

「勿論、悪い事だ。だが、私も仕事でね クライアントには逆らえないんだよ」

「……………仕事?…クライ…アント?」

人を殺す仕事があるだなんて思わなかつた。人を殺すなんて事はとても悪い事だし、それが常識だ。少なくともミッドではそう考えられている筈だ。

「……………そう、仕事だ。何でもあの男は裏で相当悪い事をしていたらしくてね、とは言え表の地位のある人間だから私の様な者が片付けなければならぬのさ……………世間の裏で平和を守る【正義の味方】と言うわけだ……………どうだ?格好いいだろう?」

口を歪ませながら彼は言う、バイザーが顔を殆ど覆い隠しているせいで正確な表情は読み取れなかつた。

けれど、どうしても本心の様には感じられない。そう…思った。

「……………貴方がしている事は…犯罪ですよ?」

「…そうだな」

「…人を……………人を殺したんですよ?」

「今までそうしてきたし、これからもそうだ」

何を言っても、仕様がな。けれど…、分かっているも止められなかつた。

『死んでしまえばいいのに』

自分の「コレ」を認めてしまう様で、ただ怖かった。認めてしまつたら……何かがどうにかなつてしまう。……そんな気がしたのだ。

「人殺しは……やっちゃダメな事です……」

「……なら、私を捕まえてみるか？」

バカにした様な笑みを浮かべながら、その男は挑発するように此方を向き、頭を後ろに傾ける。

丁度相手を見下すような体制に見える。まるで私が突つかかつて来るのを待っているかのように、わざとらしいほどに私を挑発する。だからかもしれない。

「はい」

静かで、けれど力強い声が出た。自分でも驚くほどはつきりと出たその声は、私の心を形あるものに固めたようだった。

「私が……貴方を捕まえます。管理局に入つて……実力をつけて、そうすれば貴方はもう二度と人殺しは出来ません！」

「……フツ、そうか……それなら精々頑張るといいさ。」

先ほどとは打つて変わつて、自然な笑みで男は笑つた。この笑顔が本当の笑顔なのだろう。

そんな顔を隠すように、男は背を向け立ち去ろうとする。

「まっ……」

反射的にそれを呼び止めてしまう。何の意味も無かつたけれど不思議と後悔は無かつた。

「……なにかね？」

此方を振り返り、私の返答を待つ。私は呼び止めておいてなんでもないなどとはとても言えず、出し抜けに言う。

「名前……」

「……？」

「……貴方の名前は何ですか？」

それが精一杯だった。咄嗟に思いついたのは、それだけだったのだ。

男は少し驚いたような顔をし、少し沈黙した後こう答えた。

「…アーチャー、それが私の名だ。」
それだけ言うと、ビルから飛び降り気がつけば姿も見えなくなっ
ていた。

これが、私とアーチャーの出会いだ。

私の殺意を肩代わりして、その罪を一人で背負った寂しい【正義の
味方】とそんな彼に????した…わたし、ティアナ・ランスターとの邂逅
だった。

12 / 鉄の輪

AM4:00

朝露が芝生を濡らし、登り始めた陽が其れをキラキラと輝かせている。

小鳥の囀りがまばらに聞こえ始め、街に活力が満ちてくるのが分かる。

ある喫茶店の前でも、一人の青年が箒とチリトリをもって早朝の気持ち良さを感じながら忙しく動き回っていた。

シロウの朝は早い。喫茶店としての開業は午前11時からなのだが、一人で店を回しているため仕込みなどはこの時間帯から始めなければ間に合わない。

BARとしての閉店が夜中12時なのもあって時間があまり無いのだ。

「——つよし、掃除完了っ」

ポンっと手に持っていた布巾を置く。机も椅子も磨き上げられていて埃一つ付いていない。

どれも顔が反射しそうな程ピカピカで、店の雰囲気をよくしている。

カランカラン

シロウが満足そうに辺りを見回し、一息つこうと茶を入れようとした時、急に店のドアが開いた。

「シロウ兄く、居るっスか〜?」

「シロウ兄ー！来たよー!!」

元気そうな女の子の声が2つ響き、人が入って来た。

先に声をかけた方は、赤い髪を後ろで纏め活発な印象がする女の子で何処と無く軽い感じがする。服装は肩の開いたカジユアルな服で

少しボーイッシュな、動きやすいものだ。

もう一方は、対照的に水色の髪を肩口で切り揃えており、愛嬌のある可愛らしい顔のせいかわいらしい印象を受ける。

此方もやはり何処か軽い感じ……というかわ抜けてそうな性格に見える。

服装は白いフリルの付いたワンピースにジーンズ生地の上着を着ている。

「ウエンデイにセインか、元気にしてたか？」

「元気いっぱいっス!!」

「元気でーす!!」

二人して両手を上に広げ元気をアピールする。その様子はよくある児童番組のお兄さんと子供達のやりとりの様に見える。

言うまでも無いが、シロウが体操のお兄さんでウエンデイとセインが元気いっぱい返事する児童だ。

「五月蠅いぞ…二人とも」

ウエンデイとセインの背後に一つの影が現れる。

底冷えする声と共に姿を現したのは、長い銀髪に黒い眼帯ピシッと伸びた背筋…あと低い背。チンクだ。

「一般人の格好をしているからと言って、あまり目立つような行動はするな。特にこんな街中ではどこで誰が見ているかなどわからん。店内でも油断するな。そもそもお前達は……」

教え諭すように淡々と説教するチンク。ウエンデイとセインは反省したように首を垂れて黙って聞いている。

見た目だけで見れば誰よりも幼く見えるが、チンクはこの場の誰よりも姉らしく思えた。

「あ〜、久しぶり……チンク。ところで、もうその辺にしないか？用があつて来たんだろ？」

話が長くなりそうだと思ったのか、単純に妹を助けてあげようと思ったのか、若くはその両方が、シロウはチンクに声をかけ説教を中断させる。

チンクもあまり長々と説教するつもりは無かったのか、少しため息をついた後シロウに向き直った。

「久しいなシロウ。元気だったか？」

「なんとか上手くやってるよ、そっちはどうだ？皆んなちゃんと生活出来てるか？」

「姉妹も増えて来たが今のところ問題はないな。この二人が少しヤンチャして困る程度だ。」

ただ……そうだな、トーレが最近寂しがついていたぞ。前、研究所に戻ってきた時は丁度トーレも任務で出ていたからな、また今度会いに行ってやれ」

シロウの頭は無表情なのに明らかに不機嫌な雰囲気を漂わせるトーレが浮かぶ。近くにトーレが居るわけでもないのに、シロウは背中に冷たいものが流れ 鳥肌が立った。

「あゝ、うん 分かった今度は先に確認を入れてから帰ることにするよ。」

何の確認かは言うまでもないだろう。

「セイン」

「はいはいサー!!」

チンクがセインに合図すると、セインはズルりと地面から一抱えある箱を取り出した。

箱は目立ちにくい紐でセインの足に結ばれており今まで地面に沈んでいたようだった。

「【起源弾・劣】配達に参りましたツ!!」

ピシッと軍隊の様にセインが敬礼する。本人は至って真面目なのだろうが、童顔のせいかわいさが足りない。

「先日ドクターにそろそろ補充が必要だと言っていたらどう？、セインのI Sの訓練も兼ねて持ってきたんだ。」

「本当は私とセインの二人で来る予定だったんっすけど、チンク姉が心配だからってついてきたんっすよ」

ウエンデイがブーたれながら説明を捕捉する。チンクが付いてき

たことは本人にとっては不服な様だ。

一方チンクは『この二人を放っておいたら何が起こるか分かったものではない』とでも言いたげな目でウエンデイもセインを睨んでいる、と言うよりは呆れている様にも見える。

「ま、まあ取り敢えずありがとう。剣は投影で幾らでも造れるけど、【起源弾】はそうはいかないからな…。そのくせ最近だと【起源弾】の需要が増えてるから足りなくてさ。」

ミッドの魔導師は砲撃型が多い、それ故に投影品の剣よりもカートリッジと同じ要領で使える【起源弾】の方が人気だったりする。

シロウも工夫して剣の形を弄って砲撃魔導師でも使える形にしているが、いかんせん売れ行きは良くない。その分ベルカ式魔導師が大量の刀剣類を購入していくので困っていると言うわけでもないのだが…

それと余談だが最近だとシロウの剣を更に加工してデバイスの部品として使っている魔導師もいるそうだ。これまたベルカ式に多いのだが、一部の管理局員が局に黙って自分のデバイスを改造していると言う噂さえある。

「それにしても、いつも思うけど便利なISだよな…セインのやつは」「ドクターも予期してなかった突然変異らしいからね、扱いは難しいけどもう大分自由に使えるようになってきたよ」

【無機物潜行^{デバイス}】セインのISでありその名の通り無機物内を泳ぐ様にして移動することができる能力だ。

自分だけでなく自分の持っているもの 触れている物も自由に運ぶことができる。

先程のは更にそれを応用して自分自身は地上にいるまま、自分に触れているものだけを地中で潜行させると言う訓練を兼ねていた様だ。

非常に強力…というか便利な能力なので主におつかいや侵入などの雑用を任される事が多かったりする。

「いや〜それにしてもカッコいいっすよね〜」

突然ウエンデイが辺りを見回しながらウンウンと頷く。

「何が？」

受け取った起爆弾を店の目立たない所に収納しながらシロウはきく。箱を丁寧に並べる手を休めることは無かったが意識は完全に会話の方に向いている。

「こういうお店つスよ。なんかこう…大人って言うか渋いつて言うか、夜のBARでカッコよくお酒とか作ってみたいっス。」

「カクテルか？」

お酒を造ると聞いて一瞬、密造酒のことが頭に浮かんだシロウだったがそんな筈ないと考えを消し去りまともな答えを返した。

「そうそう！それっスよ！カシヤカシヤってやるんスよね、いつか…こんなトコでバイトでもしてみたいなうなんて…ハハハ…」

言うにつれて語尾が弱くなる。笑い声もとってつけた様で不自然だ。

普通にしていれば分からないが彼女達は戦闘機人だ。その事を自覚しているからこそ、何でもない事をまるで夢でも語る様に言うのだろう。

「…それにしても、まだお客さんってこないの？どんな感じなのか見てみたかったんだけど。」

セインが雰囲気を変える様に明るい声で話題を変える。

「営業開始までにまだ時間があるからな、一応席がすぐ埋まるくらいには人気があるつもりだけど…今日はどうだろうなあ。」

茶でも淹れるからゆっくりしてっくれ。」

シロウはカウンターの裏に回り茶筒とポットを取り出す。

ポットに水を入れ火にかける。

ブーブー

しばらく沈黙が続いたがそれを破るかの様にシロウのポケットからバイブ音がした。

『仕事』用の携帯電話だ。

シロウは火を止め届いたメールを確認する。内容を把握するとシロウはチンク達の方を向いた。

「悪い、今日は臨時休業だ。店は閉めるから帰ってくれ。」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

パキツパキツ

一歩進むごとに床が軋む音がする嫌な音のする床は今にも抜けそうだ。更に割れたガラスが辺りに散らばり足音を消す事を許さない。ミッド郊外、打ち捨てられた研究所。研究所の周りには雑草が茂り元々の地形の事もあったのだろうがその存在を知る者はほとんどいない。

昔は局が進めていた魔法生物の実験施設だったそうだが、とうに撤退し今では違法取引の場として使われている。

シロウも取引場所としてここを指定されたのだった。

シロウは指定された研究所の一番大きな部屋にたどり着いた。老朽化が激しいのか床の所々が崩落しかけている。

そこに一人の少女がいた。

歳は14、5といった所だろうか。

ボロ切れの様なものを纏い、頭をそれでスツポリと覆っている。顔はよく見えないが金髪がチラリとのぞいていた。

「お前が取引相手か？」

「……………」

スツ

シロウの質問に答える代わりに少女は懐から紙を一枚取り出した。それを見てシロウは合点が行く。

こういう違法取引では自分が直接赴くのではなく、金で雇った第三

者を立てる事も多い。それに浮浪児を使う事もしばしばありシロウも何度か経験のある事だった。

とはいえこんな子供を一人でこんな所に行かせる事に何も感じない訳ではなかったが：

シロウは少女の差し出した紙を受け取ろうとする。必然的に二人の距離は1mも離れておらず手を伸ばせば首を絞める事も可能だろう。

カシヤンツ

「うん？」

右腕に冷たい感触を感じる。

シロウが自分の右腕を見てみると、無骨なけれど頑丈そうな鉄の輪がそこにはまっていた。

カシヤンツ

少女は自分の左腕に反対側に付いた輪を嵌めるとフードをとり、シロウの眼を真っ直ぐ見据える

「時空管理局、執務官フェイト・T・ハラオウンです。

違法魔導師アーチャー、遺失物の密輸及び密売の容疑で逮捕します。」

13 / 崩落

sideフェイト

三年前、なのはが墜落^{おち}た。

異世界からの帰還中、油断もあつたのだろう。

予期せぬ攻撃に遭い高高度から落下した。

幸い地面には雪が積もっており、命を落とすことはなかった。しかし、『ある理由』からプロテクションも張る事も出来なかったせいで大な怪我を負う事となった。

主な負傷内容は、『右手首の骨折』『肋骨数本に罅』『複数個の内臓の損傷』『両足の複雑骨折』そして……『脊椎の重度の損傷』だ。

脊椎の損傷以外はミッドの技術をもつてすれば完治はそう難しいものではない。

脊椎の損傷も厳しいリハビリを必要とするだろうが、なのはであれば立ち上がれるだろう。

だが、どうしようもない後遺症が一つだけ残った。

『リンカーコアの変質』

なのはに撃ち込まれた『ソレ』は、なのはのリンカーコアを喰い荒らし、全く別の物に変えてしまった。

リンカーコアとは魔力で出来た内臓の様なものだ。それを掻き回され蹂躪されたのだ、本来であれば即死でもおかしくは無かったと言う。

それでも、なのはが生き残ったのは偏にその技量の高さ故だろう。『変質』という風に言ったが、その実、魔力の質が変わったとかそういう訳ではない。

そして魔力量に変動があつた訳でもない。

では何が変わったのか。

……それは、魔力の許容量と出力の低下だ。

分かりやすく言うならば、一度に扱える魔力の量が激減したのだ。

なのはのリンカーコアは変形し最大でもCランク相当の威力の魔法しか放つ事は出来なくなってしまった。

魔力量こそ減っていないものの瞬間威力を出す事は出来なくなってしまうのだ。

それは、なのはの代名詞『スターライトブレイカー』も放てなくなった事を意味する。

なのはは、レアスキル『収束』によって自身の持つ以上の魔力を扱い砲撃を撃つことができた。

しかし、今のなのはが其れをしようとするとも魔力を制御出来ず暴走してしまう。

しかも暴走した魔力は外ではなく、内に向かう（なのはのレアスキル故だろう）。非殺傷化されていない純粹魔力が直接体内に取り込まれるのだ、体への負担は凄まじい物になるだろう。

なのはから全てを奪い去った『ソレ』はとある遺失物から作り出されたと推測されている。

未確認物体から発射され、なのはを撃ち抜いたもの。

全ての魔導師の天敵であり、純粹に人の命を刈り取るために作り出された兵器。

私はソレをずっと追い求めて来た。

執務官になったのも、最重要資料を閲覧するのと独自捜査を行うためだ。

正規の方法から、違法すれすれの方法でも情報を集め続けた。上層部の資料部にハッキングを掛けさえした。

そしてついに、手掛かりを掴んだ。

近年問題になっている質量武器の密売。ソレ自体はそう珍しい物でも無かった。……しかし、その中に一つだけ気になるものがあったの

だ。

【起源弾】と呼称されるソレはなのはを襲ったものと酷似した効果を持っていた。多少違う点と言えば、なのはに使われたものよりも若干効果が低くなっていることだろうか。けれど、なのはを襲った物と関係がある事は明らかだった。

そして…それを密売している犯罪者の名前も浮かび上がって来た。

通称【アーチャー】、弓兵の名を冠する次元世界最大の裏武器商人であり、次元世界最大の違法研究者スカリエツテイとも繋がりがあるとされる危険人物だ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「時空管理局、執務官フェイト・T・ハラオウンです。違法魔導師アーチャー、遺失物の密輸及び密売の容疑で逮捕します。」

静かな、けれど力強い声が響いた。

そこには金属の鎖で繋がれたシロウとフェイトがおり、正面から睨み合っている。

「まさか、執務官殿がこんな手を使ってくるとはな…正義の管理局ともあろう者が堕ちたものだ…」

「戯言に付き合う気はありません。……速やかに投降するのであれば貴方には弁明の余地が与えられます。武装を解除し私の指示に従ってください。」

「……………」

出し抜けにシロウが皮肉げな顔でフェイトを挑発する。

アーチャーに連絡を取ると言うのは正直なところそこまで難しい事ではない。しかし、違法魔導師に連絡を取ると言うのはやはりまともな方法では不可能で、少なからず違法行為に手を染めることになる。その点についてシロウは皮肉っているのである。

しかし、フェイトは少しも気にした様子はなく管理局員としての義

務である投降勧告をした。

成熟した精神を持っているのか、それとも最早この程度の事では動かない程の事をしてきたのか、それは分からないが一筋縄ではいかないう事をシロウは感じ取っていた。

チラリとシロウは自分の手首にはまった手錠を見る。

対魔導師用に製造されている物で魔法は勿論、生半可な質量武器でも破壊する事は難しい。手首を切断すれば直ぐにでも取り外せるだろうが、それは出来ない。

切断した後接合出来ないという事ではない。スカリエツティに頼めば直ぐにでも治療可能だろうしそう難しい事でもない。

物理的に切断出来ないかと言えばそういう訳でもない。シロウのもつ投影品ならばいくら戦闘機人の強化された肉体とはいえ切断する事は可能だ。

ならば何故、出来ないのか。
管理局員の目の前で投影を見せる訳にはいかないからだ。

シロウが商品として扱っている武器はほぼ全て、シロウの投影によつて製造されている。もしその事が露呈すれば武器としての信用を落としかねない。個人のレアスキルによつて作られた武器など信用に足る物ではないからだ。

ならいつそ目の前の少女を殺してしまう、という手も思いつくがすぐさま消し去る。

いくら少女とはいえ執務官だ、完全に逃げに徹せられればいくらシロウでも捕まえられる保証はない。

また、伏兵がいる可能性があるというのもある。

「黙っていないで何か反応してください。このまま沈黙を保つというのなら、反抗とみなし即座に攻撃に移ります」

考えを巡らしていたシロウは意識を上層に戻した。沈黙は僅か十

数秒だった筈だがこの状況では長すぎたらしい。

(仕方ない…幸いなことに此処は市街地だ、ある程度壊しても問題ないだろう)

シロウは研究所の床を見る。見るからにボロボロで音からも中のコンクリートが劣化しているのが分かった。

そして幸運な事に水の音が聞こえてきている。

(…やるしかないか)

覚悟を決め目の前の少女に全神経を集中させる。

「いや、すまない…私も管理局員に捕まったのは初めてなものでね、少々困惑していた。そら、これでいいのだろうか?」

そう言い両手を前に突き出す。手錠をはめろと言っているかのようだ。

「賢明な判断です。動かないで下さいね。」

フェイトは少し安心したようでバインドを掛けようとする。

こうした所を見ると矢張り優しい人物なのだという事が窺える。

「…………それが命取りなのだがな…」

ダンツ!!ピシピシピシッ!!!

「ツツ!!?!?!」

!!!!!!

突如地面が揺れ床に大きなヒビがはいる。

フェイトは足元を見るとシロウの足が地面にめり込んでいるのが見える。しかもただ踏み込んでいるのではなく、大きな衝撃がそこから放たれているようだ。

震脚、シロウが似非神父から学んだ技術の一つだ。正確には学んだというよりは直接撃ち込まれたと言った方が正確だが、そこは今言及すべきではないだろう。

震脚とは気を練りこんだ脚で大地を踏み鳴らし遠距離に衝撃を与える技だ。鍛錬を積みめばこのように広範囲に渡って衝撃を伝える事ができる。

因みに更に鍛錬を重ねる事で超遠距離からピンポイントで衝撃を与えられるようになるとも言おう。

床は崩壊し、次々と落ちていく。地下に空洞があったのだろう、穴が大きく黒い口を開ける。

フェイトは飛行魔法で離脱しようとするが、シロウと鎖で繋がっていることもあり、バランスを崩され上手くいかない。

何とか体制を整えようとデバイス バルディッシュを構えるも、後ろから掴み掛かられる。

「悪いが付き合ってもらうぞ、後々邪魔されても面倒だ」

後ろから伸びたシロウの手がフェイトの首を絞め上げる。血が頭に回らなくなり、意識が遠のく。

最後の力を振り絞り絞りを懸命に喉を動かすがフェイトが何か言う前に崩れた天井の瓦礫が二人を襲い暗闇に飲み込まれた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

ピチヨン……

水の跳ねる音が響く。小さくもはっきりした音でフェイトは目を覚ました。

白い天井と体に掛かった毛布が目に入る。ぼうとする頭でしばらく宙を眺めていたが、さっきまで自分が何をしていたか思い出し飛び跳ねるように上体を起こした。

辺りを見回すとそこは殺風景な部屋であり、自分はその部屋にある数少ない調度品のベットに寝かされていたのだと分かった。

ふと、首回りが寂しい事に気づく。何時もならあるべきものが無いような、そんな感じだ。不思議に思い、首に手を当てると何時もなら返ってくるはずの硬い感触がなかった。

つまり、デバイスを取り上げられていた。

嫌な汗が噴き出し、直ぐさま辺りを警戒する。

デバイスを取り上げられている、ということは自衛の手段が限られるという事だ。ほぼ皆無と言ってもいい。デバイス無しで使える魔法ではそうそう戦いになったりはしない。

ガチャ

そうフェイトが神経をすり減らしていると、突然ドアが開く。

アーチャーが出てくるかもしれないと最大限警戒するが、予想に反して姿を見せたのは人の良さそうな青年だった。

「よう、目が覚めたか？」

赤毛に優しい風貌、筋肉質だが細身の青年が声を掛ける。人型のザフィーラより少し小さい位の背を見上げながらフェイトは自体の把握を急いでいた。

「…えっと、その……ああ……」

「ああ、大丈夫。説明はゆっくりするから落ち着いてくれ。それよりお粥作ったから食べないか？」

聞きたいことが多過ぎて上手く言葉にできないフェイトに青年はトレイに乗せたお粥を差し出す。

蓋がされているにも関わらず良い香りが漂ってくる。

「いや、でも……『キューー』」

断ろうとしたフェイトだったがタイミング良く、或いは悪く可愛い腹の虫の音が響く。

青年は再度トレイを差し出す。

「……ありがとうございます……ごいいます……ええっと……」

フェイトは笑顔でお粥を差し出す青年から顔を真っ赤にさせながらトレイを受け取りお礼を言おうとしたが、名前を聞いていなかった

事に気づく。

「そう言えば…お名前をお聞きしてませんでした…宜しければ伺つても?。」

フェイトはトレイを膝の上に乗せつつ言う。青年の方もつい忘れていたという感じで ああと息を漏らした。

「俺の名前はシロウ。シロウ・エミヤだ。よろしくな」

ザブツ ザブツ
ザブツザブツ

水の流れる狭い空間をシロウが歩いている。彼の背中には気絶した金髪の少女が乗せられており、その腕には切れた鎖がぶら下がっていた。一歩歩くたび、重い水の音が響くが少女に目覚める様子はなく意識は深く沈んでいることがわかる。

「それにしても……参ったな……」

シロウが背中をチラリと見やる。

シロウは背後からフェイトを絞め落とし下水道に逃げ込んだ後、鎖を切ってフェイトを置いていき、早々に退散するつもりだった。

しかし、思いの外崩落が激しく放置していれば彼女は生き埋めにされかねない状況だった。

デバイスも既に起動しておらずバリアジャケットも纏っていない状態の彼女放っておけば死は免れなかっただろう。正直なところ殺しておいた方が後々楽かとも思ったのだが、何となく気が引けてこうして背負って歩いているという訳だ。

が、結局のところシロウはフェイトを持て余していた。執務官と言えば管理局のエリートだ、持っている情報も有用なものが多いだろうが当然対尋問の訓練もつんでいるだろう。

デバイスから情報を抜き出すことも考えたが、そんな技術はシロウには無いし、あつたとしても生半可な技量ではプロテクトを破る事は出来ないだろう。

そんな訳で色々と頭を悩ませながらフェイトを背負って下水道を歩いているのだった。

(取り敢えず…一般人になりすまして助けた感じにすれば良いか、
………信じてくれそうな言い訳を考えなきやな。)

重い水を掻き分けるようにして歩き出口を目指した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

調度品があまりなくござっぱりした部屋、その部屋のベッドにフェイトは座り目の前の男性の話に耳を傾けていた。

「………では、下水道の排出口に引つかかっていた私をシロウさんが助けてくれた………と言うことですか？」

「………あ、ああ そうなるな………」

お粥を綺麗に食べ終えたフェイトに嘘の説明をしたシロウだが、案の定、内心冷や汗をかきまくっていた。

正直、下水道の排出口に引つかかっていたなんて嘘はバレない無いわけがなさそうだったし、かと言って上手い言い訳が思いつくのかと言えばそう簡単なものでもなかったのだ。

フェイトは一旦目を閉じて、頷くようにしてから口を開いた。

「そうですか………助けて頂きありがとうございます。」

一瞬の静寂。フェイトが何か粗相をしたのかと困惑の表情を浮かべ始めた頃ようやくシロウは反応した。

「えっ?、ああ、どう 致しまして………」

まさか本当に信じるとは思っていなかったからか、反応するまでに少し間が空いた。お粥に入れた自白剤の効果かとも思ったが、それではあまりに効果が現れるのが早いので、これはこの少女生来の素直さなのだろう。

と、シロウが安心し肩の力を抜いた頃 急にフェイトの顔色が険しくなる。口元に手をやり眉間にしわを寄せ何か考え事をしているようだ。

「………それにしても………」

ビクッ!!

「わざわざ……クラナガンまで私を連れてきた理由は何だったんでしよう……情報を得に？でも開放する理由が……」

嘘がバレたのかとシロウは冷や汗をかくが、どうやら違ったようでシロウがアーチャーだとは未だ気づいていなかった。

考えが口から出ているのは流石に自白剤のせいだろうか……意識を朦朧とさせ考えを纏まらせなくする程度の効果しか無いはずなのに、まさか考え事を素で口に出すほどドジっ子ではないだろう。

「……考えてもしようがない……か、……あの、シロウさんっ」

「どうした？」

「バルディツシュ……ええと私のデバイス知りませんか？首元に掛かっていたはずなんですけど……」

一旦落ち着いて他の事から片付けることにしたのか自身の相棒の所在を尋ねる。

やはり武器が手元に無いのは落ち着かないし、単純に相棒を心配しての事もあった。

「あの黄色い三角のやつか？あれなら俺が持つてるよ……ほら」

「あつバルディツシュツ……」

「けど、どっか故障してるのかもしれない……一応手入れはしたけど、ウンともスンとも言わなくてさ」

「大丈夫……みたいです。見たところ自己防衛モードに入ってるだけみたいですから」

シロウが取り出したデバイスを受け取り確認する。いつも以上に綺麗に磨かれているのは、シロウがやったのだろう。下水道を通ってきたにしては汚れない。

「それ……ちゃんと動くのか？」

「はい、特定のコードを言えば直ぐに……で……も、あれ……？」

デバイスを手に持ったままフェイトの体がぐらりと傾く。

ベッドに手をつき体を支えるも目の焦点はあつておらず不規則に揺らいでいる。

(やっと本格的に効果がではじめたか……)

その様子を見つつシロウはベッドの脇に椅子を置きフェイトの姿

勢を正させる。フェイトは一切抵抗せず、なすがままになっている。シロウがフェイトに飲ませた薬は一般に自白剤と呼ばれるものだ。勿論スカリエツテイ印の特別製で、通常の物よりも強力かつ後遺症が残りなく使用の痕跡もほぼ残らない優れ物だ。

一定時間、対象を茫然自失させ尋問出来る。複雑な質問は難しいが簡単なものなら大抵の事は吐かせる事可能だ。

シロウも姿勢を直し、険しい顔を作ってフェイトに向き直る。

「…次元犯罪者アーチャーとのコンタクトのとり方は? ……」

「…クラナガン…郊外にある地下街の…掲示板から ……」

「何処でそれを?」

「……………裏町の…情報屋 ……」

主に今回の囮捜査に関する事を聞いていく。直近の情報の方が正確に引き出せるし、何より今後の商売方法の見直しについて考える為だ。

「捜査は何人で行った?」

「…単独 ……で」

「……………何故?」

囮捜査は非常にリスクな方法だ。一人でこなすには危険すぎる、例えば法に触れるものだったとしても信用できる人間の一人や二人連れて行くべき作戦だ。

「……………な ……」

「な?」

「……………なのは…が、心…配する…、なの…はかわ ……いそう。ダメ…危けん ……」

「ツ…おいつ! どうした」

徐々に言葉が崩れて行くフェイトの肩を掴み揺する。どうやら地雷を踏んだようだ。

「……………起…源弾、なの、は殺なな…の、痛い……見つけ……た…聞かなく、ちゃ滅だ i じよう。ぶ? また氏が助けて? アーチャー…憎い管理、局規則なで ……」

タンツ、とフェイトの顎を揺らし意識を刈り取る。

正気が壊れる前に意識を殺した。これなら起きた頃にはほぼ普段通りに戻っているだろう。

(壊しかけるなんて……まだまだ未熟だな……)

自嘲するように笑おうとするが戯ける事も出来ず沈黙する。

一通り自己嫌悪した後、フェイトの発言に何度も出てきた『なのは』と言う単語を思い返す。

『なのは』、と言う名前には聞き覚えがあった。

『高町なのは』、エースオブエースと名高い管理局のエリート局員だ。その活躍はめざましく局内はおろか、ミッドチルダ全域にその名は知れ渡っている。

確か数年前事故に遭い、魔導師生命を絶たれたかに思われたが僅か一年で前線に復帰したと言う伝説を持つ。

後遺症のせいで武器であった極大砲撃が失われたにも関わらず、未知の古流武術を新たに体得し日夜犯罪者と戦っていると言う。

(……………復讐……か……)

一般には事故として知らされているが、実はなのはの撃墜は事故ではなく故意に引き起こされた事だ。

その事はシロウも知りすぎるほどに知っていた。

あの事件はスカリエッティの、ガジェットに起源弾を搭載すると言う計画の最終テストとして起こったものだった。

起源弾を使用する実験という事で、当然シロウもその場にいた。シロウにとって魔力なしの肉眼で目視できるギリギリの距離、約3km先から観察していた為 探知はされなかったが確かにシロウはその場にいた。

ドクターが実験結果に喜びの声を上げる中、なんとも言い難い嫌な感触が胸に残ったのを未だに覚えている。

雪の中、小さく赤く広がるシミに感じもしないはずの生臭さを覚えた。

雪、というのがいけなかったのかも知れない。もう欠片しか残っていない遥か遠い記憶にいつかの誰かを重ね見たのだろう。

酷く残酷でけれど大切なものを踏みにじった様な気がして、ただ気分が悪かった。

目を落とすと、フェイトが穏やかな顔で眠っている。胸の内に狂気を孕ませていながら、可愛らしい寝顔を見せる彼女にシロウは肺を潰されるような感覚に襲われた。

何という感情なのかは知らなかったが、無性に誰かの声を聞きたくなるそんな何かだ。

乱れたフェイトの髪を梳く。くすぐったそうに表情を変える様子を見ていると、ほんの少し呼吸が楽になる。

しばらくするとフェイトが一層安心したような顔で一定のリズムで呼吸を刻むようになった。

その傍でシロウはいつかの様にただ座り、ただそこに居続けた。

自分でも気づかない自責の念に駆られながら。少女に闇を植え付けた自身を罰する様に。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

目を覚ます。

陽光が部屋を照らし、鳥の鳴き声が聞こえる。考えの纏まらない頭で、辺りを見回すと見知らぬ部屋に居ることがわかる。

『おはようございます、マスター』

バルディツシュの声で本格的に目が覚めた聞き慣れた声に地に足がついた様な安心感を得る。と、同時に自分がシロウに助けられお世話になっていることを思い出す。

「ッ今日何日？」

『新暦七十年の五月四日です。アーチャーへの捜査から丸二日経っています。』

サツと顔が青くなる。なのはも、はやても忙しいとは言え丸二日も連絡が途絶えていれば心配するだろう。

そう考え直ぐに連絡を入れようとするがバルディツシュは先刻承

知だった様で。

『既に無事との旨は伝えてあります。』とのことだ。

コンコン

安心し脱力したところでドアがノックされた。入ってきたのはシロウだ。シツクなエプロンを身につけておりなかなか似合っ居る。

「どこが悪いところとかないか？」

「はい、おかげさまで。……昨日は済みませんでした。急に意識を失うなんて。」

「……：気にするなよ、目が覚めたのも夜だったし疲れてたんだろ。大事なくて何よりだ。」

本当に心配してくれていたのだろう。心から気にかけてくれる彼の優しさが素直に嬉しかった。

「管理局には俺から連絡を入れといた。迎えが来るらしいからそれまでゆっくりしていつてくれ。」

「……何から何までありがとうございます。お礼はまた、落ち着いた時に……」

「いいって、気にするなよ。こういう時は助け合うのが当たり前だ。まあもし本当に恩義を感じてくれてるなら、俺 喫茶店やってるからさ、今度は客として来てくれよ。」

喫茶店、と言うのを聞き翠屋を思い出す。なのはと一緒に来てみるのもいいかもしれない。

「はい、じゃあまた友達と一緒に来ますから待ってて下さいね。」

妙にスッキリした朝、忙しいスケジュール帳にまた一つ項目が追加された。

目が覚める、場所は自宅のベッドの上。

まだ陽は昇りきつておらず、外も薄暗い。

『なのは、行こう。今日も大忙しだよ。』

見てみるとフェイトちゃんが立っていた。薄く微笑んだ顔に何処か安心させられる。何故かバリアジャケットを着ており、バルディッシュを携えていた。

『ほんまお寝坊さんやなあ、早くせんと置いてくで〜』

その隣にいたのははやてちゃんだった。いたずらっ子の様な愛嬌のある声が響く。同じくバリアジャケットを着ており、後ろの方にシグナムやヴィータを控えさせている。

返事をして起き上がり、ベッドから降りようとする。

けれど、床に足を付けようとした瞬間、

『ダンッ!!』

体が地面に叩きつけられた。

訳もわからず自分の足を見てみると……そこには何もなかった。

そこにあるはずの脚が、そこには無かった。

それでも挫けず腕で上体を起こすと、また体が倒れた。

腕だ。

今度は腕が無くなっていた。

『カッン、カッン』

皆んなが歩いていく。

皆んなが遠くなっていく。

地虫の様に這いずって何とか付いて行こうとするが、距離は縮まるどころかどんどん開いていく。

『――』

いくら叫ぼうとしても声が出ない。出るのは壊れたオモチャの笛の様な、空気の擦れる音だけだ。

「背中はもう消え入りそうな程遠い。」

「這う。」

「這う。」

「這う。」

「気が付けば……一人になっていた。」

「ツ~~~~ツ~~~~ツ~~~~。」

「今度こそ目が覚める。痛い程に心臓は鼓動し、パジャマは汗でぐっしよりと湿っており気持ちが悪い。」

「はぁ……はぁ……」

「吐く息は熱く、荒い。」

「息を少し落ち着けた後、恐る恐る布団をめくる。ある。」

「そこにははっきりと脚が付いていて、恐怖に震えている膝が見える。」

「膝を抱き寄せ震える肩と合わせる様に、腕で自分を抱きしめる。」

そうして自分を確かめた。自分がまだそこにあるのだと、自分を自分を安心させた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

降りしきる雪。

奪われていく体温。

動かない体。

今でも、鮮明に思い出す。

突然、激痛が全身を襲い、空に投げ出された。

風に卷かれる感触を感じることもできない程の痛みだったせい、落下の恐怖は無かった。

地面に叩きつけられた痛みはそれほどでもなかったけれど、身体から何かが抜け出て行って、ゆっくり意識が閉じていく恐怖は忘れられない。

近くにいるのに、遠く感じる声が必死に自分の名を呼んでいたのを覚えてる。

その声を頼りに、私は生きるのを諦めなかった。自分が必要とされている。それだけで、どんな痛みにも どんな苦しみに耐えられる。そう…信じていた。

医師に宣告されたのは、魔導師生命の断絶。

たとえ復帰できたとしても、第一線には戻れないだろうとの事だった。

呆然とする私に渡されたのは管理局の事務に関する資料、医師なり

の励ましだったのだろう。魔導師として闘う事はできなくてもやれる事が有るのだと。

『君はもう、十分に活躍した。もう休んでもいいんじゃないか?』

初老の医師の言葉に、私はどうしても頷くことができなかった。

リハビリは過酷だった。

不随となった下半身にミッドの医療で擬似神経を形成し、動かせる様に訓練した。

立てるようになるまで半月、歩けるようになるまで一月、走れるようになるまで三月、戦闘訓練ができるようになるまでに五月掛かった。

擬似神経は基本的に人体と馴染まない。その為、初めは動かすだけでも激痛が走る。一步進むたびに、ナイフで刺し貫かれる様な痛みが脚を襲う。

まるで人魚姫のようだ…と自嘲する。

『——人魚のひいさまは言いました。人の脚が欲しいのだと。』

海の魔女は言いました。いいとも、人間になったお前は美しかろう。それで王子を拐かすが良いさ。けれど忘れてはいけない、その脚は鋭い刃物を踏むかのようで、今にも血が溢れるかと思うほどだろうよ。

構いません。おひいさまは声を震わせて言いました。

ところでお前さん、お礼もたつぷりいただきだかなきゃならないねえ。魔女は言った。私が望むはそう軽なものではないよ、お前の声を頂こう。なあに心配するでないよ、お前の浮くような美貌があればたえ声がなくとも王子を惑わすことは難しくなからうさ。——』

この場合、私が支払ったのは魔法だろうか。

別に何かの対価というわけでは無かったが、どうしても私の姿にダブって見えた。

魔力の許容量の低下。何よりもそれが私にとって重い後遺症だった。

飛行魔法に関して言えば、元々高速機動をするようなタイプでは無かったので、さして問題にはならなかった。

けれど、砲撃魔法が殆ど使えなくなったのは、私にとって最大の武器を奪われたに等しかった。

Cランク相当の魔法では時空犯罪者と渡り合うのは難しい、少なくとも第一線で闘う事は出来ない。

それでも…それでも夢を諦めきれず、ただ訓練に明け暮れていた頃、医師に貰った資料が目に入った。

大きな封筒にまとめて入れられており、それなりの厚さがある。

結局捨てる事も読む事も出来ず机の上に放っていたそれを、何となく手に取り開く。

すると、大きな文字が目に入った。

【魔法が使えなくても――】

『魔法が使えなくても』闘う事は出来る。私はその事を忘れていた、勿論その冊子には『後方支援も立派な闘いだ。』という旨が書かれていたのだが、私が思い出したのはその事では無かった。

いる。魔法が使えなくても、強い人は。それも身近に、身近すぎて気がつかなかった程に。

【地球…高町家】

「私に………剣を教えてください。」

なのはは三つ指をつき、深く頭を下げる。

正面からは顔色を伺う事は出来ないが、冗談などではなく真剣な心持ちだという事がその雰囲気から察せられる。

対するは、父 士郎。 兄 恭也。 姉 美由希。

三者三様の反応を見せている。

士郎はただ哀しそうになのはの双眸を見つめ、
恭也は眉間に皺を寄せなのはを威圧し、
美由希はそんな二人をオロオロしながら見ている。

なのはの発言から数秒。しん、と辺りは静まり返り美由希が沈黙に耐えきれず何か場を和ませようか真剣に考え始めた頃、ゆっくりとそして重々しく、士郎が口を開いた。

「父さんは……正直安心して……。なのはがもう戦わなくて良いかも知れないと聞いて、安心していったんだ。」

「……………」

「けど……それじゃダメなんだな？」

「……………」
「うん、私を待っていてくれる人がいて私もここに居たいの……だから……………」

なのはの言葉に恭也は目を伏せ美由希も顔を沈ませる。

大きな声ではない、力強い声でもない、はつきりした物言いでも無ければ、説得力のある言葉でも無かった。

けれど、そこには決して曲がらない何かが有った。

「……恭也、なのはに稽古を付けてやれ。」

「ッ父さんー！」

士郎の言葉に恭也が怒気を露わにするが士郎は眼光だけでそれを封殺する。双眸に睨まれた恭也は悔しげに唇を噛んだ。

「……魔法の事が無ければどちらにせよ決めなければならなかった事だ、なのはが必要だと言うのなら俺はこうすべきだと思う。」

その言葉になのはは喜色を浮かばせる。場の空気はほんの少し軽くなったような気がした。

恭也はまだ何か言いたげだったが、何とか納得したようだ。

「なのは、これから俺たちが教えるのは【御神流】、人を守り人を殺す為の技術だ。本来お前が触れる必要のない、触れてはならない技術だ。その事を決して忘れず胸に留めておきなさい。」

そう士郎が締めくくると、なのはは静かに再度頭を下げた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

新暦71年

クラナガンの都市部で二人の少女が歩いていた。

白を基調にした服を着た栗毛色の髪の少女と落ち着いた色の服とは対照的な煌びやかな金髪の少女だ。

むろん、なのはとフェイトである。

「なんだか、二人でこうして歩くのは久しぶりだね」

「私もフェイトちゃんも休日が被るのは珍しいから…はやてちゃんも一緒なら良かったんだけど…」

「実習なら仕方ないよ…はやては今大事な時期だし。」

はやてだけは地上で司令官としての実習訓練で休みが取れなかったのだ、と言うより最近のはやては ほぼ休みなしなのだが…

「今日はどこ行くの？」

「今日はシロウさんの所の喫茶店に行こうかなって」

「フェイトちゃん…本当にシロウさんのトコ好きだね」

「すつ、好きって！そんなのじゃないよ…だだ…その…」

「うんうん、分かってるよシロウさんのケーキ、美味しいもんね」

「…そ、そうだよね」

ニヨニヨとしながらフェイトに笑いかけるのはと顔を赤らめるフェイト、多分なのは分かってやっているのだろう。何が言えばおしまいなのだが。

けれど、なのはもシロウに感謝の様なものは抱いていた。一時期不安定だったフェイトがシロウの店に通う様になってから落ち着きを見せたからだ。

なお最近では週一のペースで通っており、昼食のテイクアウトも頻繁に頼む様になっているらしい。

そうしてちよっぴり緊張しながら歓楽街に入り、シロウの店まで辿り着いた。

落ち着いた雰囲気の喫茶店でしつかり手入れされているのが一目でわかる。地下一階と地上一階の二階建てで地下は主にバーとして表は喫茶店として経営しているらしい。

けれど二人の表情は残念そうなものだった。

【臨時休業】

と言う立て札が掛かっており、いつもなら少なからず人のいる店内は閑散としていた。

「今日についてないね」

「仕方ないよ、シロウさんにも事情があるんだろうし、それなりの頻度で臨時休業してるのは有名だから」

シロウの店は大体二週間に一度のペースで臨時休業する。行きつけの客は大体この事を知っているし、勿論フェイトも知っていた。

何故、臨時休業しているのかはよく分からなかったが、前にフェイトがシロウに聞いた時は「副業」とだけこっそり教えてくれた。

フェイトはため息をつき心底残念そうにしているとクイクイツとなのはがフェイトの裾を引っ張った。

その顔は、どこか焦っている様でいて恥ずかしげでもある。フェイトもなのはの意図を察すると顔を赤らめた。

二人がどこに居るのか、『歓楽街』だ。

要するに大人なお店があったりする。二人が微妙なお年頃というものもあっただろうが、前に訪れた時知り合いの局員の男性が○館から出てきたのを目撃した以来、あまり外で長居はしないように心がけていたというわけだ。

二人はそそくさとその場を後にし都市部に戻った。

二人はこれからの予定を立てるために適当なお店にでも入ろうかと喫茶店を探していた。

そんな時だった、二人の端末に通信が入った。

『至急！応答願います。近隣の臨海空港で火災が発生しました。』

増援願います!!」

余程、事態が切迫しているのだろう。オペレーターの声に余裕は無かった。

「フェイトちゃん!!」

「うん、行こう」

二人はすぐさまバリアジャケットを纏い飛翔する。

流星とも見紛う速度で二つの光が宙を流れた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

そこには地獄があつた。

燃える火、焼ける壁。倒れた柱、割れた床。黒煙が上がり、逆巻く火の風が肌を炙った。

そんな地獄を一人の少女が歩いている。まだ幼い弱々しい女の子だ。煙を随分吸い込んだのだろう、足元はおぼつかず意識も半ば朦朧としている。

「あつい…あついよお、…お姉ちゃん…どこお…」

今にも消え入りそうな意識で必死に助けを求める。けれどそんな彼女を更なる災禍が襲う。

背後の石像、と呼ぶには巨大過ぎる石柱が傾き始めたのだ、無論少女はその事に気付いていない。

ただひたすらに助けを求める。

そんな少女に石像は無慈悲に倒れ——無かった。

石像は中心で真つ二つに分かたれ少女には倒れなかった。

そのはるか背後、一人の女性が立っていた。

剣の一振りです像を割り、その余波で少女の周りの炎も消しとばした。

炎を物ともせず、剣を片手に佇む姿は一種の神々しささえ感じられる。

すぐさま女性は少女にかけより抱き上げた。

「もう大丈夫、助けに来たよ」

彼女は管理局のエースオブエース。
白き法の使者、高町なのはだ。

「なんだよ……これ」

シロウは目を見開き、言葉を零した。

逃げ惑う人々、助けを求め声。

ほんの少し前までは極々平和な場所だったそこは、今や見る影もなく火の手が上がり、シロウの肌を炙っている。

炎が壁を這い黒い跡をつけていく様子は、シロウのナニかを想起させる様で、胸に石を置かれた気がする程だった。

『地獄』

自然と、この言葉が思い出された。

(俺は……知っている)

赤く焼けた大地、立ち昇る黒煙、溶けた柱、漂う脂の匂い、ヒトガタの黒い炭、この身を呪う怨嗟の声。

そして、黒い太陽。

背中が粟立つ。

これ程鮮明に思い出せる記憶が今までにあっただろうか、我に帰り記憶から意識が浮上してもまだはつきりと映像は目の奥に張り付いている。

前に向き直ると、記憶にほど近い惨状が広がっている。

唯一の違いは死の気配がまだ希薄なことだろうか、その事に少し安堵した。

そんな時、声が聞こえた。

助けを呼ぶ声では無い。誰かを呼ぶ声だ。誰かを探す声だ、しかもその声はよりにもよって逃げようとしていない。美しい物だ、誰か大切な人を思いやつてのことなのだろう。

だが……悪い事に、この声は炎の奥から聞こえる。

正確には、炎で遮られ奥の空間だろう。まだそのあたりまでは火の手が回っていないのかもしれない。

シロウは辺りを見回す。先程より人の数は減り、残っていたとしても自分や家族の手当てで人の事に構っていられそうな者は誰一人居なかった。

シロウを除いて。

髪を掻きあげ、バイザーを着ける。

褐色白髪青年は藍の外套を身に纏い、炎に一步踏み出した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

フェイトの囹捜査を何とか切り抜けてから数週間経ち、表の仕事も裏の仕事も今まで通りに運営できる様になった。日々の生活に（忙しいとは言え）余裕が出来、今も早朝の仕込を終え緑茶を片手に寛いでいた。

だがシロウは分かっていた。というよりいい加減学んでいた、こう言う日に限って面倒ごとは舞い込んでくるのだと。

『やあ、シロウ。少し仕事を頼みたいんだが、少しいいかな？』

突然シロウの目の前にウィンドウが開き見慣れた顔が映し出される。ニヤニヤと粘着質な笑みを浮かべ、何気にいい声をしている男。無論、スカリエツティだ。

シロウは辺りを見回すが近くに端末らしきものは無い。自分の端末も今は少し遠いカウンターに放り出されている。

『ああ、これは新型の通信機でね、ナノサイズの粒子状の機体な上に一切魔法を使っていないから見つけるのはまず無理だよ。』

風で簡単に飛ばされるのが利点であり欠点だがこれから改善するつもりさ。』

どうやらドクターの仕業らしく、お披露目も兼ねていた様だ。この分だと既に管理局にも散布済みなんだろうな、などとシロウは適当なことを考えたが、仕事の話だと思出し顔を引き締める。

『そう難しい任務ではないから気負う事はないよ、前に話したレリッ

クは覚えているかい？ その在処が分かったからあの娘達から誰か派遣するつもりなんだが、なにぶん不安でね。

なにしろ、あまり人気の多い場所での活動はさせていないものだから目立ってしまうかもしれない。」

「人気の多いって事は街中とかか？」

「いや、場合によってはもつと多い、空港だよ。それもミッドだけでなく他世界からの交易船も停泊する大型のね。レリックも発掘品として他世界から時空航行艦で運ばれて来る予定だ。」

成る程、空港というのは広くて複雑に見えるが、その実何処にでも人がいて隠れる場所が少なく大概開けている。ドクターが不安がるのも無理はない。という事は近くで騒ぎを起こして陽動でもすればいいのだろうか？。

「シロウに頼むのは任務のフォローだよ。と言つても何か明確な指示がある訳じゃない、もし何か問題が起こった時收拾をつけて欲しいのさ。」

敢えて言うなら管理局の動向を知らせてくれるぐらいかな、それ以外はすぐ動ける位置で待機していてくれればいいよ。」

その後ドクターは、場所や日時のデータを粗方シロウに送りつけさつさと通信を切つてしまった。

毎度のことながら、嵐の様な人だと思いつつシロウは嘆息する。

(それにしても……フォローか、何も起こらないといいんだけどなあ) そう思いつつも、何かが起こると言う確信の様なものシロウにはあった。大抵ドクターからの依頼は碌な事にならない上に、レリックは前回のこともある。

と言うのも、前回レリックを発見した時に小規模ながら次元震が起こつたのだ。シロウは直接関わっていなかったが、ある世界の違法研究所が一つ壊滅したらしい。

幸い人的被害はほぼゼロな上に管理局にもそこまで認知はされていないと言う。前者はともかく、後者はドゥーエとクアットロの情報

操作によるものだが。

レリックは莫大な量の魔力を内包した遺失物だ。何かの拍子に暴発なんて事に成りかねない。もう相当な数を集めているとは言え気の抜けない事には変わらない。

シロウは飲みかけた緑茶を一気に飲み干し、軽くため息をついた後その日の営業のため立ち上がった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

臨海空港は人で溢れており、予想以上に賑わっていた。休日ということもあるのだろう、家族連れの姿が多く見られる。

シロウはそんな中一人寂しく、空港の入り口付近にあるカフェで時間を潰していた。

『シロウ兄、もうちよつとでポイントに到着するんだけど大丈夫…だよね?』

不意に声が届く、セインのものだ。丁度壁か床かを潜行中なのだろう水中にも似た音も一緒に聞こえてくる。

結局、今回の任務はセインの単独との事だった。厳密にはシロウがいるので単独では無いのだが、基本何もしない予定なので単独といっても差し支えない。

正直シロウも能力的にセインが選ばれると予想していたので驚きは無かった。因みに次点でチンク、或いはトーレが候補に挙がっていたが面倒臭いので結局セインになった。

『一応、センサーとか罫には気をつけてな。警備員が巡回してるかも知れないから頭出す前に、指でちゃんと確認しろよ』

『りようかい!』

指で確認、と言うのはセインの固有武装〔ペリスコープ・アイ〕の事だ。セインの両手の指先に付いており普通の眼と同じくらい正確な性能を持つ。また、魔法的電子的ピッキング機能もあり今回のような任務にぴったりの武装だ。

セインの能力もあいまって雑用を押し付けられる要因にもなっ

いる。

シロウはコーヒーを手に持ちゆっくりと味わう。意外にも何事もなく任務が進行しているからだろう、少し気が抜けているように見える。

ふと、店外に目を向けると仲の良さそうな姉妹が空港内に走っているのが見えた。姉と思しき方が妹の手を引いている。和やかな風景は晴天ということもあって平和を象徴しているようだ。

そうして外を眺めながら寛ぐこと十数分、セインからの連絡が無いことを訝しんでいると…

空気が震えた。

突風が窓ガラスを割り、椅子やテーブルを吹き飛ばす。外を歩いていた人々も地に伏し悲鳴を上げている。

そして遅れて熱波がシロウ達を襲った。見ると既に空港内には炎が上がっており、助けを呼ぶ声が聞こえてくる。

サイレンが鳴り響き避難誘導のアナウンスが流れる。半狂乱になりつつも多くの人が逃げていくのを尻目にシロウはセインに通信を繋げていた。

「セイン無事か！」

最優先で妹の安否を確認する。

『…………ごめん！、シロウ兄！失敗しちゃった』

ノイズ混じりだが元気そうな声にシロウは少し安心する。セインは落ち込んでいるようだが取り敢えず命に別状は無さそうだ。

「何があった？」

『レリックはすぐ見つかったんだけど、鍵がかかって…しかも前時代的なアナログなやつ。無理やりこじ開けようとしたらすっぽ抜けて他の遺失物にぶつかっちゃって…』

語尾が小さくなっていくセインの説明を聞き、シロウは大体の経緯を悟った。大方他の遺失物と共鳴して爆発したとかそんなところだろう。

「レリックは？」

『たった今回収めたよ。それで……どうしたらいいかな？』

恐る恐るといった様子でセインが訊く。

「セインはレリックを持ってラボに帰れ。説教は後でたっぷりするから、覚悟しておくように」

『……はい……』

落ち込んだ顔が眼に浮かぶようだったが、怒る時にはしっかりと怒る。正直自分が怒らなくても姉組がこつてり絞るだろうなとも思ったが甘やかしてばかりでは兄失格だ。

『シロウ兄は？』

「俺は少し様子を見てくる、流石にこのままじゃ寝覚めが悪いしな」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……スバル……!!何処……!!スバル……!!」

半ば瓦礫と化した建物の中を少女が歩いていた。怯えながらも気丈な態度を崩さずに懸命に妹を探している。

「大丈夫……私はお姉ちゃんだもの、私が……私がスバルを守らなきゃ……」

目に涙を浮かべながら妹の名を呼ぶ。しかし辺りに人影は見えず、虚しく声は木霊するだけだった。

近くにはいないと悟ったのか、他の場所に移動しようとした時だった。

体から重量が消えた。

丁度少女が立っていた位置の周辺が崩れ下に落下し始めたのだ。

辺りにばかり気を取られていたからだろう、彼女は初め自分が落ちている事にさえ気が付かなかった。

けれど、漠然と死を予感していたのかただ胸に穴が空いたような虚無感を感じていた。

「……………おかあさん」

その一言にどれだけの意味が込められているのだろうか。他人には：否、少女自身にさえも推し量ることはできないだろう。

突如、閃光が奔る。

少女は気がつけば抱きかかえられていて、安全な場所に運ばれていて、命を救われていた。

「大丈夫か？」

訊いてくるのは白髪の男、藍の外套を纏い優しげな笑みを浮かべている。実はバイザーの所為でちゃんと表情を読み取れないので少女の想像ではあるのだが。

急な事で声を出せなかったのか、頷く事で肯定する。

その時になって初めて男は少女の顔を見たのか驚いたような、それでいて悲痛な顔をした。

何か粗相をしたのかと不安になったが、どうやらそうではないようで男は『気にするな』と頭を撫でた。

「君の妹も既に保護されている、だから…もう我慢する事はない」
不意にかけられた言葉で緊張が解ける。嗚咽が漏れ、涙がとめどなく溢れてくる。

抱きかかえられたまま、少女は男の胸に顔を埋めて泣きじやくつた。いくら聡いと言ってもまだ子供、本来なら甘えるはずの立場だ。無理もない事だろう。

暫く泣いていた少女だったが、やがて安心したのかそのまま眠ってしまった。

男は黙って通路を歩く、優しく、少女を抱きかかえ起こさないようにゆっくりと。傍からみると兄妹のようにも写っただろう。

少なくとも男が少女を見る顔は兄妹のそれであった。

そこに、また一人少女が現れた。黒衣を纏い、金の髪を靡かせた少女、フェイト・T・ハラオウンだ。災害地の真っ只中でありながら、煤すら付いていない事からもその力量が伺える。

その目は明らかに敵意を示しており、手に持つデバイスは油断なく男に向けられている。

おそらく、男の腕に眠る少女がいなければ警告すらせず戦闘を開始していただろう。

対する男は無反応だった、さしたる敵意もなければ警戒心も無い。数秒の間こそあったが、男は何でもないかのように近づいていった。フェイトは警戒するように構えを取るが、男はゆったりとした動きで両腕で抱きかかえた少女を彼女に差し出した。保護しろ、という意味だろう。

「何のつもりですか……アーチャー……」

思いもしなかった行動に困惑したように訊ねるフェイトだが、アーチャーはその疑問に答える事は無かった。受け渡すと同時にさっさと背を向け、歩き出す。まるで警戒していないかのように、事実警戒していないのだろうが無防備に背中を晒して姿を消した。

フェイトも少女の保護を優先と考えたのか追撃はしなかったが、アーチャー対し複雑な気持ちを抱かずにはいられなかった。

ただ、今自身の腕の中で眠る少女の綻んだ顔だけは決して頭から離れる事はなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ミッド クラナガン近郊、

臨海空港にて発生した大規模火災

軽傷者114名

重傷者22名

死者0名

なお、管理局も知り得ない事だが約1名の女性が臀部に重傷を負った模様。一時、重体となったが回復し、現在は自宅療養中である。

17 / 天獄

形容し難い混沌、冒瀆的な無秩序が空間を埋め尽くさんと蠢いている。その様相はあらゆる物を飲み込み、犯し、陵辱し尽くすものだった。恐らく、この世の誰も目を背けずにはいられない、それ程までに超次元的、惨憺たる有様であった。

否、その唾棄すべき地獄からは寧ろ誰しもが目を奪われ、見入ることしかできないかもしれない。

「…んだよこれ………なんだよこれ!!」

シロウの怒号が響く。それは、目の前の情景が信じられないと、信じまいとする狂气的で支離滅裂な思考回路から放たれた、かろうじて絞り出されたものだ。

険しい顔で眼光を光らせる、そのカオスに対するように真っ直ぐに深淵を見つめている。

その、視線の先には――

不定形の生物ナマモノに都合よく服だけを溶かされているナンバーズが居た。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「シロウ、付き合って欲しい実験があるんだが…」

「断る」

久しぶりに研究所実家に帰り妹たちの相手でもしてやろうかと思っていた矢先にこれである。

ニヤニヤと怪しい笑みを浮かべ、あからさまに何か良からぬことを考えている、…と思う。

そもそもドクターの『実験』に付き合っても良いことはない、と言うか碌な目に遭ったことがない。

いつだったか、気がつけば天井にシャンデリアの如く打ち付けられブラ下がるはめになったこともあった。『ノツブ!!』と叫ぶ謎生物が

研究所を埋め尽くし、なんだかんだで研究所ごと消し飛びそうになった事もあった。

そういう訳でシロウは『実験』に過剰すぎるほどの警戒心を抱いていた。

ところで、言い忘れていたが…新装備の調整やら、ガジェットの耐久テストならばドクターは『実験』という単語を使わない。

普段はわざわざ『実験』などと銘打つ事は無く、アレしてコレしてと案外具体的に言ってくる。

ならいつ使うのか、それは……

「いや〜面白そうな遺失物を見つけてね、シロウに効果を確かめてもらいたいんだ。」

そう、よく分からない遺失物を見つけて来た時だ。

ドクターも天才科学者を自称するだけあつて大抵のことであれば推論だけで真実に辿り着けるほどの観察力、分析力をもっている。けれど、遺失物だけはそうはいかない。未知の技術の塊である遺失物は検証と実験と解析を繰り返さなければその真髓を知ることが出来ない。

「大丈夫！シロウなら多分死なないさー！」

そして、いつも実験の被害者になるのがオレ　と言うわけだ。

因みに速攻で断つたが結局断りきれない、というか実は選択肢などない。ドクターに命令されたのなら実行せねばならないのだ、例えどんな無茶振りでも。

———という風にいつそ諦めの境地で半ば白く燃え尽きているシロウの前に古ぼけた茶色い瓶が置かれる。

表面には饜飴紋にも似た文様が描かれており、おどろおどろしい雰囲気や滲み出ている。また、その瓶には蓋がされていたが蓋には強力な封印魔法が掛けられおり中身にこそ意味があるのだと主張している。

「これはフ○ニヤルドという世界の逸品だね。かつてその世界を恐怖のどん底に陥れた魔王が残した魔物が封印されている…らしい」

「…っしっしっし」

スカリエツテイらしくない、曖昧な返事にシロウは困惑する。

「ああ、実はもう封印は一度解いて中身は確かめたんだがね『オイ』：そう怒らないでくれたまえ、特に何もなくてね……ただ無限にピンク色の液体が流れるばかりで肝心の魔法生物が出てこなかったのだよ。」

無限に湧き出るピンクの液体：

シロウの背中に冷たいものが流れる。嫌な予感、虫の知らせ、第六感、言い方は何でも良いが兎に角シロウの何かは警鐘を鳴らしている。

まるでこれから起こる悲劇を予見しているかのよう。

「仕様がなからシロウに解析を頼みたいのだが……どうだろう?」

ふいっと向けられた視線にシロウは何とか平静を保ちつつ、一歩に近づいていゝことをきいた。

「…………その水は何処に?」

「流しに捨てたよ?」

「チツツツクショオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

シロウは全速力で研究所内を駆けた。それはもう駆けた、全力で己の全てを出し尽くして駆けた。!!!!!!

固有時制御十重速と自前の体術をフル活用して駆けた。あと風圧で窓ガラスが割れないように衝撃を殺しつつ駆けたせいで体への負担は多大なものとなっている。

シロウがようやく足を止めた時には身体の至る所が紫色に変色しており、体表面に近くの毛細血管が千切れ飛んでいるのが分かる。

よく見てみると身体から湯気が上がっており、幾分か血液も蒸発しているようだ。

シロウは辺りを見回し誰も居ないことを確認する。基本的に誰も立ち寄らない研究所内でも端っこの方にある場所だが注意しておいて損はない。

シロウがそこまでしてたどり着いた場所、それは研究所に備え付けられている下水濾過装置だ。

スカリエツテイの研究所では基本的に水は循環させて再利用する

様にしている。水を一々供給するのは案外手間が掛かる上に汚水をながすと管理局に勘づかれる恐れもある、というのが理由だ。

そういうわけで汚水は全て一度タンクに貯められ、ここにある濾過装置で再度利用出来るように浄化されるのだ。

閑話休題

シロウが真つ先にここに来たのにも理由がある。スカリエツティの『流しに捨てた』という発言だ。

もし、もしもだが、その捨てた水が魔法生物だったら？

スカリエツティに湧き出る水自体が魔法生物だという事がなぜ想像できなかったのかは分からない、……事もない。

粗方、魔王が残した魔物と聞いてレッド○イズブラックドラゴンみたいなのを想像していたのだろう。或いはラ○ユタのロボみたいなのを期待して居たのかも知れない。

スカリエツティは基本中身は子供だし、馬鹿と天才は紙一重とも言う。ワクワクしながら蓋を開ければ水しか出なかったためがっかりし過ぎて碌に確認もしなかったのだろう。

とは言え、そんな事はどうでもいい。

起ってしまったことを一々気にして居ても始まらないし、シロウ自身の違いなら御の字だ。

そんな淡い期待を抱きつつシロウは濾過装置にある内部確認用スコープを覗く。

『ぷるんぷるん』

シロウは一度スコープから目を離し、目をこすり深呼吸して再度スコープを覗く。

『ぷるんぷるん』

巨大な不定形の生物がいた。

『ぷるんぷるん』

貯水槽を埋め尽くすほどの量、15万ℓぐらいだろうか、蠢くその物体は薄いピンク色をしており、ドクターの言っていた液体の色と一致する。

だが、…多い。ドクターは流しに捨てたと言っていた。つまり無限

に湧き出るとは言ってもそう大した量では無かったはずなのだ。

なのに……

「……………どうしてこうなった」

力なく項垂れるシロウ、その顔には影が落ち、心なしか周囲の背景は煤けていて物寂しい雰囲気醸し出している。

『キヤアアアアアアア』

シロウが地面に半ば突っ伏しながらこれからどうするか思案していたところ誰かの悲鳴が聞こえてきた。

「しまった!!」

悲鳴のした場所まで急いで向かう。

くだいようだがもう一度言う、この研究所はほぼ全ての生活用水を再循環させて使っている。

つまり…

「無事か!!」

「シ、シロウ兄!…たす、…ひあやん♡だ、めえ…そんな、そんなとこ…いじつちや…んんっ／＼／＼／＼／＼」

被害者はセイン、スライムの触手?の様なもので逆さ宙吊りにされ、

身体中を締め付ける様にスライムに覆われている。

そしてスライムは蛇口から今なおとめどなく流れ出ている。

：

つまり水場は全て危険地帯というわけだ。

◇◇

『ジユウウ…』

セインに触れている触手の周辺から突如煙と共に嫌な音が響く。

「ヒツ…」

セインは泡立つスライムの接触部を見て、ウツボカズラに溶かされる小動物を想起する。

ぐずぐずに溶けて骨だけになった無残な死骸を思い出し、背筋を凍らせる。

「セインツ!!」

シロウもすぐさま双剣を投影しスライムに斬りかかる。目にも留まらぬ斬撃がセインを縛り上げていた触手を切断する。宙に投げ出されたセインだが、疑うことなく自然落下に身を任せる。すடன்、と衝撃を感じさせない様シロウは柔らかくセインの体を受け止めた。

所謂お姫様抱っこの格好だ。

もう既に辺りにスライムの姿はなく逃げたか、シロウの干将・莫耶で滅殺されたかのどちらかといったところだ。

「無事か?・セイ…ツ」

「…う、うん大丈夫…だけど?…ひゃあ!!」

脅威が去って漸く落ち着いたのか互いの無事を確認しあつたが途端、シロウは首を明後日の方向に曲げ、セインも顔を真っ赤にしてわたわたと震えている。

溶かされていた。

Q. 何が? A. 服が。

しかもご丁寧局部を重点的に溶かされている。普段から身体に張り付く様なスーツなだけにある種の色気の様なものがあつたが、中途半端に溶かされることで比べ物にならないエロティックさを醸し出していた。

しかも、それなりの時間弄ばれていたためか、肌は熱く上気し流れる汗と健康的な赤みがより一層、蠱惑的な魅力を引き出している。

潤んだ瞳に見つめられ、熱い吐息が肩にかかるたび、背徳的なエロスをシロウは感じずにはいられなかった。

抱きかかえる様な格好のこともあつたのだろう、丁度腕を回している肋骨のあたりと太ももの辺りはスーツが溶けていて直に触れる形になっている。

セインは涙を溜めた瞳で兄の双眸を見つめる

、シロウも妹の上気した顔を見つめ顔を近づける。

「……シロウ…兄……」

「セイン………もう大丈夫か？」
「へ？」

セインはひよいと脇で持ち上げられ、すくと地面に立たされる。素っ頓狂な声がつい出てしまったが、あつけにとられていたせいか気づいていないようだ。

「ほら、取り敢えずこれ着とけ流石にそのままじゃまずいだろ」

「ああ、えつと…うん」

シロウは投影した服をセインに渡し、何事も無かったかのように振る舞う。

否、シロウにとって先程の事は本当の意味で何事でもなかったのだろう。

そもそも、シロウはもう大人だ。妹相手に変な気持ちを抱くほど歪んだ性癖を持っている訳でもない。それに、開発中のマツパの姿をシロウとて何度も見ているので、今更ある程度扇情的な格好をされたところで『だから？』ぐらいの反応しかできないのだ。

顔を背けたのも婦女子に対する気遣いでしかなく全くもって他意はなかった。

そんなシロウの様子をみて、一方的に意識していたのが急に恥ずかしくなったのかセインはますます顔を赤くした。

「本当に大丈夫か？……顔赤いぞ？」

「わ、私は大丈夫だからっ！それより他のみんなも助けに行かないと」
一時的に脅威は去ったとはいえまだあのスライムは全て駆逐された訳ではない。

それに被害が出ているのがここだけでも限らない。

蛇口なんてそこら中にある上にトイレや風呂、シャワールームなど水が出てくる場所は案外多い。

シロウは領き気を引き締める。

「それじゃあ俺はシヤ『無事か!!シロウ!!』」

怒号が響き渡りシロウとセインの鼓膜を揺らす。

こころなしに廊下も軋んでいる様な気がする。

声の主は三女トーレだ、ウィンドウが開きトーレと他数名の姉妹の顔を映し出す。

「トーレ姉！、無事だったのか」

『無論だ、そちらも大丈夫そうだな』

「ああ、セインの服をやられたぐらいで他は何も」

『そっちなもか……』

「も？」

急に思案顔になったトーレを疑問に思い聞き返す。

『ああ、こちらも服をやられた、クアットロとセツテがな。二人とも怪我はないが若干の体温の上昇と発汗が見られるな』

「これは……」

『ああ、服だけ溶かしていると見て間違いないだろう。』

『その事についてえ、わたくしからお話がございませう。』

割り込む様に出てきたのはクアットロ、彼女もセインと同じようにスーツを殆ど溶かされたようで半裸だ。

なお、シルバーカーテンを使って光を屈折させ、擬似モザイクをかけている。何故完全に隠さないかは分からないが、おそらく彼女の趣味だろう。

『あの、下等原始生物なんですけどお、どうやら服そのものというより服に染み込んだ体液を摂取しているみたいなんです』

その言葉にその場の全員の肌が粟立った。

特にシロウは貯水槽で大量繁殖した理由に得心がいつてしまったせいも更に顔色が悪い。

『この発汗作用もお、それを狙ったのこことみたいですねえ』

それは、案外まずいのではないだろうか。いくら汗とは言っても流し続ければ脱水症状を起こしやがて死に至る。

不定形という事もあり相性次第では中々の強敵にもなりある

『いえ、それはなさそうですねえ』

思わず口からこぼれていたシロウの言葉をクアットロが否定する。

『体液を摂取するといいましたけど、正確には体外に排出された老廃物を摂取しているようですねえ』

成る程、ドクターフィッシュの様なものか。

『まあ、その辺はどうでもいいのだが…、それより他の姉妹達の救援に向かうぞ、チンクは多少マシだろうが他は対処できんだろう。』

トーレの言う通り年長組でなければ対処するのは難しいだろう。半液状なので、打撃、斬撃はほぼ効かない上に見た目よりも動きが早く触手での拘束はリーチが予想以上に長い。

冷静に対処出来ればまだ芽はあるかもしれないが、年少組にそこまで要求するのも酷と言うものだ。

「わかった、こっちも見つけ次第救助する。けどトーレ姉達もあんまり無理するなよ？危なくなつた呼んでくれ」

『了解した。シロウも助けが必要なら言え、可能な限り救助に向かう』

通信を終え、シロウは向き直る。

そこにはいつの間にもやら廊下を埋め尽くすスライムの群れ。ぬちゃぬちゃと音を立てながら這い寄ってくる。

「悪いが、お前らの相手を一々するのは面倒だな 一撃で決めさせてもらう!!」

回路を戦闘に切り替え、矢を番える。

「――我が骨子は捻れ狂う……………カラドボルグ【偽・螺旋剣】」

!!!!!!

空間を削り抉る螺旋の矢がスライムを引き裂き奔る。

空気を震わせ大地を軋ませる。

研究所の一角が消し飛んだわけだが気にはいけない。

シロウはできた道を掛け妹らの下まで駆けた。

「あのく私もいるんですけど……………」

セインの声が廊下に響くが気にする者はいなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ぬりゆぬりゆ：ズリユウウウウ！

グチユウウウウウウヌ口く

水つぽい音が木霊する

訓練場とおぼしきここでは既に複数の少女が宙吊りにされており最後の一人が丁度スライムに捕まったところだった。

「くっ、離せ！つつつうう！やめ、ろおお！おおおお♪そ…それ以上はあ♪だめだああああ!!」

「チンク姉！」

銀糸を乱れさせチンクは身をよじる。それを楽しむかの様にスライムも服を溶かす触手の数を増やしていく。

既にトーレは疲れ切っており自身を呼ぶウエンデイの声のに構う事もできないのか視線すら向けることはない。

「ディエチー！なんとかできないっすか？」

「無理だよこいつら掴めないし脱出もおおつふううひっ♪無理だよおお♪」

粗方溶かされ切った二人はあまり触手が動かなくなっていたのか普通に会話できていたが、脱出の計画を練ろうとした瞬間触手が蠢き四肢をより一層強く拘束する。

ギリギリギリ

「…もう、げん…：かいつすううう♪あああああつ♪」

少女たちの苦悶の声が辺りに響く

もういつそこで意識を手放した方が楽なのではないか、そう思い始める。

ウエンデイは目を閉じ、このまま身を任せようと意識を闇に沈め始める。深い海に潜る様に、徐々に徐々に暗い闇にその身を沈めていく。

暗い

暗い

暗い

：

ちなみに彼女は二人とは違い自力で着地した。これができるか否かが年長組と年少組を分けているのかもしれない。

「ともあれシロウ、助かった。私達では対処しきれなかった。」

「気にするな、これは俺でも手に余る」

冗談の様に口にするが、実際非常に厄介なのは事実だ。今もドクター主導で封印の準備が進んでいるが時間がかかりそうだ。

「これではノーヴェだけなんだが……」

「ノーヴェは途中まで一緒にいたんだが……」

「……また単独行動か……」

「………すまない」

妹を一人にしてしまった自責の念からか、チンクは俯き唇を噛む。

「いや、チンクの謝る事じゃない、わかった…俺がなんとかするからお前達は避難してろ。もう少しでセインが迎えに来るから待つていれ
ばいい」

「悪いな、世話を掛ける」

「兄貴だからな」

チンクの言葉に笑顔で返し、歩を進める。

「はあ…世話焼ける妹だよお前は」

◇ ◇

「はあはあ、クソがああああああああ」

ドパンツツ!!!

重い蹴りがスライムを散らす。風穴を開けられたスライムは一時蠢き何度か融合するとまた同じように立ち上がる。

もう幾度となく繰り返し返された行為だが、ノーヴェはひたすら繰り返す。

ドパンツツ!!

ドパンツツ!!

ドパンツツ!!

「あああああああああ!!」

拳を振り下ろし、蹴りを放つ。何十回も繰り返す。

当然だが戦闘機人とはいえ、疲れがないわけではない。だが、ひたすらに繰り返す。繰り返す。繰り返す。

何が彼女をそこまで駆り立てるのか、本当のところは彼女自身にもわかってはいない。けれど、言いようのない焦燥感がただ前へ前へと進ませるのだ。

「あああああああああああああああああああああ!!!」

ドパンツツ!!

渾身の一撃を放ち倒れる。

もう指一本さえも動かすことは出来ない。身体は石で出来ているかのように重く、感覚が無かった。

ずるずる　ズリユズリユ

スライムがたかるようにノーヴエを取り囲む。

胸の中で悪態を吐きつつ、ノーヴエは意識を閉じた。

「本当、無茶するなお前は」

予想もしていなかった声に急に目が覚める

「すぐ助けるから、待ってろ」

目を閉じていても感じられる剣戟

(おせえよクソ兄貴)

温かく包み込むような安心感。誰に言われるでもなく、もう大丈夫なんだと直感する。

幾度かの音が響いたあと、身体を持ち上げられる。身体に力は入らず目も開けられないがなんとか強がってみせる。

18 / 仮面

エメラルドグリーンの海。

白く輝く砂浜。

透き通るような青い空。

地球で言うところのエーゲ海のビーチを思わせるその海は、老若男女様々の観光客で賑わっており、白い砂浜にカラフルなパラソルを突き刺すことで一層楽しげな雰囲気醸し出している。

そんな風景の中に1組の男女が居た。

煌びやかな金の髪を靡かせ、白い肢体をビーチチェアに横たわらせる十人中六人が美人だと言いそうな容貌の女性と、

黒髪で、黒いブーメランパンツを履いた全体的に引き締まった印象の筋肉をした偉丈夫の男だ。

女性は双眼鏡を片手に持っており傍の男性と談笑しているように見える。

その様子には少しの違和感もなく、近くを歩く人がいてもバードウォッチングでもしていると当たりを付けるだろう

だが、二人の会話は平和なビーチに似つかわしくない、物騒極まらない内容だった。

「シロウ、あのベンチに腰掛けている女性、わかる？」

「ああ、あの綺麗な緑色の髪の人だよな？」

何でも無いように返事をするシロウだがシロウから見てその女性は約1キロは離れている。

ビーチ近くのホテルにあるオープンカフェで寛いでいるようだが、普通の人間なら見ることはかなわないだろう。

普通の人間ならだが。

「元時空管理局提督にして次元航行艦アースラの艦長だった女性よ、現在は時空管理局内勤で総務統括官を務めているわ。

管理局の内情にも詳しいはずよ。」

「盗聴器バグでも仕込むか？」

淡々と説明するドゥーエに情報収集が目的だと悟ったシロウは、スタンダードかつ古典的方法を提案する。

「スマートじゃないわね」

ばつさり切り捨てられたが……

「シロウ。」

「ん？」

「ちよつと貴方、彼女をナンパして来てくれないかしら？」

「……………え、？」

固まるシロウ。

笑いかけるドゥーエ。

実際は数秒の事だったのだろうが、シロウにはとてつもなく長い沈黙に思えた。

二人の間に喧騒と波の音だけが響く。

「ナンパしてきてくれない？」

「いや、無理だつて」

即答した。

何気に実はもう、童貞を捨てている（仕事の関係で仕方なかったからだが…）シロウだが、ナンパなんてした事がないし基本ヘタレだったりするので自分から女性を誘う根性などカケラもない。

「大丈夫！、セッティングは全部お姉さんがやってあげるから」

そういう問題じゃない。

「いや、無理だつて!!、俺そういうのは全くやった事ないし、そもそもなんでドゥーエ姉がやらないんだよ！」

ドゥーエは諜報のプロだ、巧みな会話術と観察力、そしてその美貌（変装込み）で多くの人間を籠絡してきた。

勿論、男性だけというわけではなく女性もその中に含まれる。

「それはっ！………色々…あるのよ」

何か言いたげなドゥーエだったが、押し留め誤魔化する。

「……………」

シロウも何か察するものがあつたのかそれ以上追求しなかった。

「……………それで？俺は何をすればいいんだ？」

諦めたようにシロウが口を開く。

結局のところシロウはドゥーエの弟であり、弟が姉に逆らうことは出来ないのだ。

「第一目標は顔見知りになる事ね、継続して情報を入手できるように関係を築く事。

第二に端末のデータのコピーね。これは優先度こそあまり高くはないけど出来れば後々楽よ。」

「楽つてのは？」

「端末には彼女の個人情報満載だもの、好みや行動パターン、友人関

係やその連絡先……脅すも拐かすも思いのままよ」

割とえげつない事を平然と微笑を湛えながらいうドウエ。

残酷なようだが、これが彼女のやり方だ。

クアットロが最高の戦闘機人だと賞賛する所以でもある。

成る程とシロウも頷き、一息つこうと傍らのテーブルに置いたトロピカルジュースのストローを啜る。

「あつ、だからベッドの上では頑張ってね♡」

ブフオツ!!

ドウエの言葉にシロウは飲み込みかけたジュースを嘔き出す。

横目でシロウがストローを啜えて飲み込みかけたところを見ながら言っていたあたり狙っていたようだ。

「ゲホツ、ゲホツ……どう、どうゆう事だよ。」

「関係を結ぶって言ったでしょ?」

あれはそういう意味だったのか。てつきり友人関係を結んで仲良くなれ、ぐらいの意味かと

「けど、結婚……とかしてないのか?」

流石にドウエがそこら辺の調査を疎かにしているとは思わなかったが管理局員は既婚者率が高い。

それにも理由があり管理局が局員同士の結婚を推奨していたり、婚活パーティーの様なものを頻繁に催すからだ。

局員同士の子供は9割局員を志すというから、管理局の狙いもわからないではない。

「そこは大丈夫、彼女は既婚者だけでもう未亡人、義理を守る相手はない」

「いや、そうでもないだろ、亡くなった夫のことを忘れられない未亡人なんて珍しくもないぞ」

事実、シロウの知り得ないことだがリンディは夫であるクライド・ハラオウンが殉職して以来、男性との関係を持つことは一切なかった。残された息子のため仕事に全てを捧げていたからだ。

だがそれも過去の話。

つい先日アースラから降り、息子も独り立ちした今となっては仕事に人生をかける熱意もとうとう冷めてしまっている。

現在、保養地にいるのも無聊を慰めるためだ。

「——それに今の貴方の格好なら彼女は拒まない。断言できるわ」

シロウはその言葉に自身の前髪を摘み見る。

青みがかった黒い髪だ。

普段より若干長めに調整されており前髪が少し目にかかる。

スカリエッティ製の高性能カツラでそれこそ頭皮ごと剥がす勢いで調べられなければ気づかれることはない。

顔も同じように普段とは似ても懐かない様相をしており、彫りが深く目つきが鋭く見える。

これは単純にドゥーエによるメイクの賜物だ。

彼女によれば、ファンデーションをうまく使って陰影を加えればどんな顔にでも成れるそうだ。

「心配せずに私に任せなさい。日付も丁度いいし今夜決行するからそのつもりでね。」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

♪♪♪

妙に安っぽいジャズの流れるBARで私、リンディ・ハラオウンは一人寂しくお酒を煽っていた。

ここはホテルの上層にある店で、時間も深夜に差し掛かっているためか人気はあまりなかった。

本当は今回のバカンスにはクロノやエイミー、フェイトも来る予定

だったのだが、結局 全員仕事が入り私一人で来ることになってしまった。

ぐいっとキャロルを煽る。

軽く喉を焼く感覚が心地いい。

普段はあまり強いお酒は飲まないのだが、今日に限ってはなるべく酔えるように敢えて強いものばかり飲んでいいる。

一人の寂しさを紛らわせるためだ。

ぐいっと、また酒を煽る。

この時期になるといつもそうだ。無性に寂しくなつて夜一人肩を震わせ枕を濡らしたことも一度や二度ではなかった。

数年前まではまだマシだった。

仕事に没頭し、頭から嫌なこと全てを追い出して気がつけばこの日を過ぎる事が出来た。

——けれど

頭にあの人の顔がよぎる。

懐かしい、愛おしい、恋しい、今は亡き夫の顔が頭をよぎる。

——何故、彼だったのか。

——何故、他の何処かの誰かでは無かったのか。

そんな、嫌な考えを紛らわすようにまた、酒を煽る。

ふと、気がつくくと手元のグラスは既にカラになっていた。

思案に耽っていたせいも全く気がつかなかった。

また何か頼もうかと思案していると、目の前にグラスが置かれた。

顔を上げると、マスターが私に笑いかけている。

白髪混じりの黒髪をオールバックにした人の良さそうなオジ様だ。

「隣のお客様からです」

マスターの視線の先には一人の男性がいた。

年の頃はクロノより少し上にくらিদらうか。

黒髪にももの憂うげな表情をした、けれど何処か温かみを感じさせる人だった。

目の前に置かれたカクテルグラスを見る。

淡い緑色をした透明なカクテルだ。ライムの刺激的な香りが漂っている。

「……ナンパだとしたら落第ね」

ギムレットを初対面で贈るのは流石に無神経に過ぎるだろう。

「そうですね、ただ………想いを共有したかったです。オレみたいな若造に何がわかるでもないですけどね」

苦笑して、彼もグラスを傾けた。それも私に贈ったものと同じギムレットだ。

「そんなに………酷い顔してたかしら?………」

「……ええ、少なくともオレには………そう思えたんです。」

♪〜♪〜

「どなたか………亡くされたのですか?」

「もう随分と昔のことよ………吹っ切れたと思っただけ………ダメね」

◇◇

「——それでね!クロノもフェイトちゃんも忙しいからってキャンセルしちやったのよ!!!」

『母さんはしっかり休んで』って。そんなこと言われたら一人でも行くしかないじゃない!!」

私は夫のこと、後悔していること、子供が独り立ちしてしまった虚無感について、気がつけば話してしまっていた。

頼りになる感じがどこかあの人に似ていて、甘えていたのだろう。

まあ酔いが回って考えが纏まらなくなってきたただけかもしれないが。

「……そりゃあ、嬉しいけど、もっと甘えてほしいって言うか、私そん

なに頼りないかしら？

もつと頼つてくれても「オレは」――
ずつと黙って聞いていてくれた彼が私の声を遮る。

「……リンデイさん、オレは……貴方こそ、もつと甘えていいと思いま
すよ」

右手に温かい感触を感じる。

カウンターに置かれた私の手に彼の手が重ねられている。
顔を上げると、目が合う。

私を真つ直ぐ見つめるその目はその顔は少し赤くなっていて、熱を
帯びているようだ。

初めて彼と行ったデートを思い出した。

あの時、私はどんな顔をしていたのだろう。

今みたいに、耳まで真つ赤にして俯いていたかもしれない。

私はそつと、その手を退ける。目の前の彼は少し傷ついた顔をした
けれど、それは杞憂だ。

「マスター……グラッドアイを一つ」

マスターは黙って頷くと速やかに用意してくれた。

私はそれを一口飲むと、カウンターに置く。

胸元からカードキーを抜き出すとグラスの横に添える。

最後に彼の耳元で一言。

「……待ってるわ」

それだけ言つて私はBARを出た。

出る瞬間、私の目に映つたのは、わたしの髪と同じ翠色のグラスを
傾げる彼の姿だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

白いベッドの上で目を覚ます。

横に目をやると一糸まとわぬ姿で、翠の彼女は寝息を立てている。なんの不安もなく安らかに眠る彼女は起きる様子は無い。

ゆっくりとベッドから降りる。

彼女は少し身じろぎしただけで、起きるには至らなかった。

彼女の荷物を漁り、端末を見つけた。

速やかに、予め用意して置いた機材に繋ぎ、中のデータをコピーする。

数分後、コピーを終えたオレは何事もなかったかのように、ベッドに戻り彼女の髪を撫でた。

罪悪感のようなものが内からこみ上げたが、すぐに薄れて消えてしまい、そのまま泥のように眠った。

◇◇

「ね？簡単だったでしょう」

目の前であくどい笑顔を浮かべるドゥーエ姉。

因みに、リンデイ・ハラオウンのBARへの誘導、BARの人払い、舞台設営、バーテンダーは全てドゥーエ姉がやった。

あの渋いマスターもドゥーエ姉の変装によるものだ。

「まあ、簡単だったけどさ…あれなら、わざわざ寝なくても良かったんじゃないか？」

リンデイのガードは思った以上に緩く、おそらくデータのコピーくらいならちよつと仲良くなるだけでも出来ただろう。

「……………言つたでしょう、継続して情報を得るためだつて。まだ何か隠している可能性もあるの、手を抜いてはいけないわ」

「もつともな事で……………」

「けどね、シロウ。情は捨てては駄目よ？」

戦闘機人らしくない、ドゥーエ姉らしくない発言に、思わず驚き目を見開いてしまう。

今までドゥーエ姉は徹底して情を捨てるようオレに教えてきた。

(家族への情は別だが)

余りにも、今までの彼女とは食い違っている。

ドゥーエ姉も失言だと思っただのか、苦々しげな顔をしていた。

「さっ、任務も終わったしもう帰りなさい。明日も早いでしょ？」

「ああ、そうだな。ってドゥーエ姉もやる事いっぱいあるだろう？」

早めに帰れよ。」

「……………ええ、そうね」

見間違いだっただかもしれない。

けど、ドゥーエ姉は酷く哀しそうな顔をしていて、今にも泣き出しそうだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ブー、ブー、ブー

朝、まだ日も登っていないほど早い時刻。

携帯のバイブが響いた。

オレは昨日ロクに寝れていない事もあって不機嫌目にそれを開く。

『……………シロウ、いるかい?』

声の主はドクターだ、またロクでもないことを引き起こしたのだからか?もしそうなら切つてやろう。

「なんだよ、下らない用なら切るぞ?」

『……………一応聞いておくが、そこにドゥーエはいるかい?』

「?、いないけど…」

『そうか……………シロウ、どうか落ち着いて聞いてほしい。』

『ドゥーエが行方を晦ませた。』

19 / 追憶

ある男の話しよう。

孤独に、愚直に、その手を汚してでも信念を貫き通した男の話だ。

男は誰よりも地上を愛し、平和を愛し、その維持に心血を注いだ人間だった。

◇◇◇◇◇

新暦55年

「どう考えても、理に合わん!!」

ダンッ!!と男の拳が机に叩きつけられる。

年の頃は三十代半ばといったところだろうか、後ろに撫で付けた焦げ茶の髪が特徴的だ。

中肉中背といった体型だが、広い肩幅からそれなりに鍛えているのが分かる。しかし、首から足までピツシリとお手本のように管理局の制服を着ているせいか、全体像は知ることができない。

「落ち着け、レジアス。今更そんなこと言っても仕方がないだろう。」

落ち着いた様子で応対するのは同じ年頃の偉丈夫。

同じく管理局の制服に身を包んでいるが肩や肘の張り具合から、余程鍛えており、一流の魔導師であり戦士であることが分かる。

「……分かっている。分かっているともさ」

レジアスは力なく、だらりと腕を垂らす。自分の無力を呪うかのように、その瞳には深い悲しみの念が滲み出ている。

その男、レジアス・ゲイズ三佐はつい先ほどまで、直属の上司に直談判しに行っていた、地上戦力の増強を図るためだ。

しかし、現在 管理局は未開拓の時空世界の発見に力を注いでおり、優れた魔導師はどうしても海にとられがちだ。

本人の意思で所属は変更できるが、高待遇、高収入な上に市民からの人気も高いとあって『海』に所属希望するものが多い。

それ故に無理な勧誘は『陸』と『海』との間に軋轢を生みかねない

として、レジアスの上司は戦力増強を諦めたのだ。

「もう、いつそのこと独自の部隊でも作って好き勝手出来ればいいのだがな」

「まず無理だろうな。新部隊の申請くらいならお前の階級でも可能だろうが、ある程度の後ろ盾が必要だろう。」

「三提督…か」

「とまでは言わずとも、黎明期に活躍した名のある提督か、若くとも実績ある提督数名の後ろ盾があつてなんとか…と行った具合か、まあそれでも厳しいと思うが」

廊下を歩きながら代案について考えるが、そう簡単に良い案が浮かぶはずもなかった。

そもそもレジアスは30台というその若さで三佐という高い階級を持っているが、決して後ろ盾や強力な後見がいるわけではない。

管理局からある程度、独立している地上本部は査察官の目が届きにくい故に汚職も多い。それをレジアスは利用し、汚職事件の告発で手柄を立てると同時に、上の席を空けることによつて今の地位に登りつめたのだ。

一応言つておくが、レジアス本人は清廉潔白、質実剛健であり汚職事件には一切関与していない。

基本的には自身の有能さで今の地位にいるという事だ。

「だがな、ゼスト。俺はまだ、諦めるつもりはないぞ。ここは俺が生まれ、俺が育つた地だ。そのミッドが日に日に荒れていくのを見るのは我慢ならない。」

レジアスはぐつと拳を握りしめ、窓の外を見る。

地上本部から見下ろすクラナガンの町は一見平和なように見える。しかし、少し郊外に出てみれば、スラム街が列挙として並び、危険薬物、違法遺失物、窃盗、暴行、殺人。

あらゆる犯罪が蔓延っている。

「……そうだな、取り敢えずは、今いる人員で何が出来るかの洗い出しか。……実働は俺がやる、だからお前は偉そうに踏ん返り返つて指示

でもしてろ」

「ほう、言ったな？……ならボロ雑巾のようになるまで使い倒してやろう。後悔するなよ？俺はやると言ったらやる男だ」

「……………」

暫し、黙り合う二人。

辺りに耳が痛いほどの沈黙が蔓延し、コツコツと靴が床を叩く音だけが響く。

「……………」

「……………」

同時に吹き出す二人。

既に空気は弛緩しており、和やかな空気が流れている。

「クックック、お前に冗談は似合わんな、まったく」

「それはお前の事だろう？レジアス。お前はいつも通りの堅物の方がお似合いだ」

「まったくだな、慣れないことをするもんじやない」

レジアスは肩をすくめると、面白そうに肩を震わせるゼストの方を見やる。

「ところでどうだ？今夜辺り（ドンツ）『キャツ、!!』」

前を見ずに歩いていたためか、丁度曲がり角から歩いてきた女性局員とぶつかる。体格差があるためぶつかられたレジアスではなく、ぶつかってきた局員だけが転んでいる。

「……………」

「……………」

「気にするな、不注意だったこちらも悪い」

「はい！ありがとうございます。」

言うや早いか、局員はトテトテと走り去って行く。

レジアスとゼストはその後ろ姿を見つめる。

「若いな。」

「ああ、まだ二十かそこらかだろうに、陸曹ということは余程優秀な魔

導師か技師なのだろう」

「ああゆう若く有望な局員が、ウチに来てくれればいいのだがな」
「まったくだ……」

◇◇

「ねえねえ!!今日めつちやイケメンの佐官がいたんだけど!」

「……どんな人よ」

管理局の宿舎にて姦しい、いや二人しかいないのだが、とある女性局員が恋バナに華を咲かせていた。

「なんか、こうキリツとした目でいかにも質実剛健って感じの人だったよ」

「………もしかしても思うけど、レジアス三佐?」
「?」

「質実剛健の三佐といえばレジアス三佐官ぐらいしか思い浮かばないかな、なんか強そうな人近くに居なかった?」

「………ツいた!」

側と一緒に歩いていた如何にも武人と言った人物を思い出す。

因みにだか、レジアスが本部にいる時はゼストと一緒に居ることが多い。そのせいか二人をセットだと考えている局員も多い。

実際、本人達も名コンビだと自負している。

「………あんた、趣味わるいつて」

「そんな事ないよ〜!!絶対いい人だもん」

「えー」

レジアスのあまりの堅物さに辟易する局員は多い。勿論、有能だという事もあり一定の支持を集めてはいるが、恋愛の対象として見ると有り無しでいうと無しという意見が圧倒的多数だろう。

「決めた!私レジアス三佐の部隊に行く!!」
「」

◇◇◇◇◇◇◇◇

「恐れながら、申し上げます!!三佐!いくら地上が人手不足だからと言つて、休暇返上はやり過ぎだと思えます!!」

「貴官の言い分も分からないではないが、だからといって何故俺が貴官と休日を通ごさねばならない」

「愛です!!」

「愛など要らぬ!!」

「ぎゃあぎゃあと言ひ争う二人を尻目に局員達はあくせく働いている。時間帯も夜に差し掛かっているためか殆どがデスクワークだ。」

「あのお、ゼストさんあの二人止めなくていいんですか?」

「遠慮がちに口を開くのはクイントだ、つい最近ゼスト隊に配属されたためにまだ勝手がよくわかっていなかったのだ。」

「放っておけ、じき収まる。」

「ゼストはクイントの方を見向きもせず高速でタイピングしている。レジアスがあのような様子なので書類が溜まっているのだ。」

「にしても、大変ですね。レジアス三佐、あそこまで付き纏われると」

「横から口を挟むのはメガーヌだ。クイントと同期だが既に仕事を終えたのかゼストの分の書類に目を通し始めている。」

「いや、実際逆だろうさ」

「逆?」

「いつてる言葉はわかるが、言ってる意味が分からない二人が同じ言葉と同時に返す。」

「ああ、レジアスはその実やつをそう嫌ってはいないさ、寧ろ救われているのだろうな、あの明るさに」

「ああ、とクイントとメガーヌも納得する。確かにあれだけ底抜けな明るさを見せつけられたら嫌でも元気になるだろう。」

「男なんて単純なものだからな、純粋な好意を突っぱねるものなどそうはいない」

「そんなものですか……」

「そんなものだ」

タンツと小気味いい音と共にゼストがタイピングをやめる。どうやら書類仕事も片付いたようだ。

「ところでクイント、ノルマは終わったのか？」

「あゝっ！メガーヌ!!手伝って〜」

「…はあしようがないわねえ」

——ていうか三佐!!デートって言ってくださいよ!!何故俺が貴官に付き合う必要があるのだ！愛です!!!まだ言うか!!!

◇◇

自然豊かな公園で一組の男女が並ぶように座っている。

女性は終始機嫌良さそうに、男性は眉間に皺を寄せてこそいたが肩に寄りかかってくる女性を邪険にする事もなかった。

「レジアス三佐、今日はありがとうございます、わざわざ付き合ってもらっちゃって」

「…まったくだ、大事な用だと言うから何かと思えば日光浴とはな」
温かな日差しが二人を包む。柔らかいかぜ頬を撫ぜるとくすぐったそうに目を細める、

「俺がこうしてゆっくりするのは随分久しぶりだ。」

「三佐は働き過ぎです、たまにはゆっくりするのも大切ですよ」

「……ああ、そうかもしれないな……」

風が吹く。

草木が揺れ、流れる雲が筋となって空に広がって行く。清涼な植物の呼吸が肌を感じ、肩の重みも抜け去って行くようだ。

「……レジアスでいい」

「……はい？」

「今日はプライベートルだろう階級を気にすることはない……」

「………はい」

彼女からレジアスの顔は何い知ることにはできなかつた。背けるように空を見上げるその顔は光に照らされ見えなかつたのだ。

「レジアス……私、『海』に誘われてるんだ。」

「……ああ」

レジアスも勿論その事は知っていた。

そもそも上官であるレジアスに了解が取られない筈がない。その事に思い至らなかつたのかどうかは定かではないが、彼女はそれをレジアスに打ち明けた。

レジアスには行くな、とは言えなかつた。

行つて欲しくはない、だが、陸よりも空に上がることが彼女の為になると確信していたからこそ、その言葉を口に出さなかつた。

「……まあ、蹴つちやつたんだけどね!!」

「………はあ?」

予想もしなかつた言葉に、つい素つ頓狂な声を上げてしまう。もしここにゼスト隊の隊員が一人でもいれば『じつ自分は何も聞いてません、聞いてませんからあああああ』と言つてた全力で逃げるくらい間抜けな声だ。

未だ状況の飲み込めないレジアスに彼女は続けた。

「で、まあ考えたんだけど、海に行くのとレジアスの部下じゃ無くなるじゃない?それはなんかやだなあゝつて。だってもう私を守つてくれないわけでしょう?」

上司なんだし、とつらつらと続けて言の葉を並べる彼女、頭痛がすると言う風にレジアスは溜息をついたがその口元は優しげに微笑んでいる

「馬鹿者が、おれたち管理局員の仕事は地上と市民の平和を守る事だろうが。お前が守られてどうする」

レジアスにとって精一杯の照れ隠しだったが、彼女は心底嬉しそうに微笑んでいる。

「………じゃあ、私が結婚して寿退職したら私の幸せとレジアスの仕事が両立するわけでして、そしたら………」

——私を一生、守ってくださいますか？

風が風ぐ。

「……………はっ、不本意だが……………それが仕事だからな」

風が鳴り、日差しが差す。

二つ並んだ黒い影は一瞬、大きな一つになって、小さな二つに再びなった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そこそこに豪華な邸宅。

慌ただしく動き回る彼女とレジアスは話をしていた。

「おい、無理して行く必要はないと思うぞ？」

「しょうがないよ、これで最後って言うんだから手伝って上げないと可哀想でしょ」

彼女は優秀な魔導師だったが、近頃寿退職するという噂が立っており本局は使えるうちに使い倒してやろうと言う魂胆なのか、陸どころか海でも増援として呼び出される日々が続いていた。

「本当に大丈夫か？俺が言えば流石に海まで駆り出されることもなくなると思うが……………」

「ダイジョーブ!!やれる事はやっておきたいからさ少しでも戦うよ、そんな事よりレジアスこそオーリスの事宜しくね、その為に有給取ってもらってるんだから」

レジアスの腕にはひとりの赤ん坊が抱かれている。

母親に似た顔立ちでもう既に美人さの片鱗を見せている。かと思

えば、目元の鋭さは父親譲りで如何にも実直そうな雰囲気が出している。

「じゃあ、私は行ってくるから、家のことはよろしく！」

シユバつと音がしそうなほど軽やかにカバンを手に持つと、彼女は元氣よく玄関を飛び出し局に急いだ。

その背中を半ばレジアスは呆れるように見つめ最後は諦めた風に顔を綻ばせた。

——行つてらっしゃい、……………なんてな

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

『残念ですが、奥様は殉職なさいました』

「は?..」

僅か6時間後の事だった。

海が取り逃がした时空犯罪者を捉える為フォローに回っていた彼女は未知の遺失物の攻撃が市街地に向くのを防ぐ為犠牲になったと言ふ。

強力な熱線を放つ遺失物だったせいか、遺体すら残らなかった。

『それで、賠償についてなのですが…………』

「……………賠償?..」

こんな時になんの話かと、レジアスの声は震えるが局員の模範たるものとして怒りを理性で押し伏せた。

『はい、奥様が遺失物を逸らしたお陰で市民に被害は無かったです。が、なにぶん場所が悪いくつか建築物が損壊しまして、管理者から賠償請求をされたのですが、その一部を負担して頂ければと』

「……………お前、本気で言っているのか?..」

賠償請求された事にはない、局員が殉職した事よりも賠償こそが本当の用事だと言う風な態度にこそ、怒りを覚えた。

しかし、電話口の男は勘違いしたようであからさまに不快感を表している。

『あのですねえ、そもそも貴方の奥様がもう少し使い物になればこんな事にはならなかったんですよ？そこをわかってもらわないと此方としては』
「……………はい?」

「……………それは、管理局の総意かと聴いている」

静かに、しかして重く。

底冷えするような声でレジアスは問う、辺りからは音が消え、時空が歪んだように揺らめいた怒気が溢れて出す。

『……………』

「……………そうか」

グシャッ!!

物言わぬ男に大した感慨も覚えず、携帯を耳から離し握りつぶす。

破片が指に突き刺さり、裂けた肉から鮮血が溢れ出るが気にもならなかった。

「これが、優秀な魔導師とやらの末路か……………」

散々利用され、良心を踏みにじられ、その尊厳さえも貶められ、誰の記憶にも残らず消されて行く。

「フツ、クツクツ、クツクツク、ハアツハツハツハツハツハツハツハツ
ハツハツハツハ。クハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

—ふ ぎ ける な!!!」

拳は壁に叩きつける。

血の滲んだ手から壁に赤いシミがつく。いく筋か流れた血は涙の様
に止め処なく溢れてくる。

「殺す、腐った上を、殺す、汚れた犯罪者どもを……………」

だから、待っていてくれ、お前が守った地上は俺が必ず、

——私を一生守ってね

ああ、守ってみせる。どんな手を使っても。」

◇◇◇◇◇◇◇◇

「……………じょう、……………う将、中将。お客様がお見えです。」

目を覚ますと、オーリスが目の前に立っていた。

頭を振り、脳に血を巡らせる。

「わかった、通してくれ、お前は席を外している」

「はい」

オーリスは返事をする、いつものようにツカツカ出ていった。

見ると、執務室の椅子で眠っていたらしく、机にまだ資料が広げられていた。

バラけると後々面倒なので、さっさと整理し片付けはじめた。

ただその一つに気になるものがあつた。

新聞だ。

一面に『高町なのは、復帰後またしてもお手柄か!!』と大きく書かれている。他の面も八神はやてやその他の若手魔導師の記事で埋め尽くされていた。

不愉快になったので、グシャグシャと丸めゴミ箱に捨てる。

どうも彼女たちは好きになれない。

資料を整理し終え、棚に運ぶ。途中、ゴミ箱にある新聞の写真が目に入る。まだ成人していないような年若い魔導師が笑顔でインタビューを受けている。

——お前らは生き急ぐなよ

その言葉は誰にかけられたものだったのか。
聞き手のいないその言葉は、静かに響いてやがて消えた。

20 / 穴埋

「お前がアーチャーとか言う奴か」

「ああ、お初にお目にかかる中将閣下」

鋭い視線が交差する。

事務的ながら高級品である事がわかる革張りのソファアームに腰掛けるのは恰幅のいい、濃い髭をたくわえた鋭い眼光の男、実質的地上の指導者、レジアス・ゲイズ中将だ。

対するは、体に張り付く様な紺色のスーツに、同色の外套と武装に身を包んだ白髪、褐色の男。

オレンジ色のバイザーに隠されているためその瞳は何えないが、射抜く様な視線を目の前に向けていることはわかる。

外套の男はアーチャー、今やミッドどころか全次元世界でも有数の武器商人である。

「上から話は聞いている、今後はお前がパイプになると言うことだな？」

「その認識で間違いない、前任者は別の任務に就くことになった。これからの計画を考えるとその方が都合がいいのでね」

実際のところは違う、前任者——つまりドゥーエの事だが失踪してしまいその穴埋めにアーチャーが割り当てられただけだ。

とは言えレジアスも不穏な空気こそ感じつつも、余計な藪は突かない地上の守護者を名乗るだけの慎重さと知性は持ち合わせていると言う事だ。

「計画の事だがアーチャー、此方の準備はあと少しで完了する、そちらも準備を進めておいてくれ」

「……ほう、『海』の反発が強そうだったが、よく抑え込めたな」

「地上は『陸』の領分だ『海』に文句は言わせん」

計画、というのはレジアスがかねてより画策してきた、地上の治安を守るためのものである。

違法すれすれと言うより、『海』からすれば考えられない様なもので

はあるが、そこは地上の領分だと押し通した。

「いくら無銘の遺失物とはいえ、もう少し時間がかかると思っていたのだがな」

「それだけ最高評議員の権力は強大だということだ、事実彼らの後押しがなければ難しかっただろう。」

そう、彼らの言う計画とは地上の治安部隊に無銘の遺失物を配備する、と言うものだ。

アーチャーが取り扱う商品として既に裏では広く普及しているのだが、投影で幾らでも創り出せるため数を揃えるのは容易い。

しかし、そのまま管理局に納品するわけではない。流石にそれは違法性が高すぎる。ならばどうするか…

「……それで？、生贄に使えるような組織は見たかったか？」

「ああ、ベルカの過激独立派のグループが良さそうだ。熱狂的な独立心を持ちながら年若いせい、練度の大きしたことのない一派があった。」

「……革新派か、下らんな」

そう、反社会団体に横流しした遺失物を管理局が合法的に回収すればいい。

世間の意見として、いくら遺失物と言えども、ただ倉庫に眠らせておくのは惜しいと思う者は少なくない。

実際、安全性が確認された遺失物で公的に使用されているものもある。

「とは言え、一派につき100本が限界だろうな、彼らの行動次第では更に数を絞る必要がある。」

「妥当…な数か、最終的には一部隊につき2本、ないし3本の導入を考えている。早急に準備を進めてくれ」

「了解した、ドクターにもそう伝えよう。」

アーチャーはもう用はないとばかりに踵を返し出口へ急ぐ。

レジアスもそれを止めることなく、ただその背中を見送った。

短い邂逅のあと、レジアスは深くため息をついた。

胸にどろどろと溜まっていく形容し難い、不快な重みが渦巻いていくのを感じる。

これまで自分が死なせてきた、これから自分の計画で死なせることになるであろう部下達の怨念だ。

窓の外を見ると、美しい地上が広がっている。しかしその裏には薄暗い闇が広がっていると言うことも彼は知っていた。

「……………もう少し、もう少しだ。」

誰に投げかけられたわけでもない言葉が口から溢れる。

ぐずぐずに濁ったその双眸にかけて輝いた光は今もなお色褪せながらも鈍く光っていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

オレ、シロウ・エミヤは今、大変困っている。

「シロウ！あつちのアトラクション、たのしそうだよ」

それはもう、本当に困っている。昔、トーレ姉に無茶苦茶な訓練で無茶苦茶な要求をされた時より困ってる。

「シロウさん！こつちにも屋台があります、一緒に行きませんか？」

たぶん、ドクターの持つてくる厄介ごとの三倍は困ったことになっているのではないだろうか

「シロウ（さん）!!!」

目の前には金の髪をなびかせた、一見大人しい（いつもなら大人しい）少女と燃える様な赤い髪に澆刺とした笑顔を見せる、実直そうな少年の姿があった。

それぞれオレの手を引き、遊園地という普段のオレには似つかわしくない場所に連れてこられている。

なんでさ…どうしてこうなった。

◇◇

数日前

「だめ…かな？」

オレの目の前で両手を合わせ、申し訳なきように、少し照れ臭そうに頭を下げるフェイトの姿がある。

黒で統一された格好は、一見仕事着に見えるが実はプライベート用の服らしく個人的なお願いだということを表していた。

そしてそのお願いの内容なのだが……

「遊園地って言ってもなあ、オレもあんまり行つたことないし案内とかも出来ないぞ？」

そう遊園地に一緒に来て欲しいという事だった。

より正確に言うならば、本来なら三人で行くつもりだった遊園地なのだが、1人急用でキャンセルとなったためその穴埋めをして欲しいとの事だ。………最近何かしらの穴ばっか埋めてる気がする。

「私も、そう詳しいわけじゃないから大丈夫だよ。このままだとチケット代無駄になっちゃうし、勿体無いから…」

そう言われると行かなくては悪い気もしてくる、わざわざ自分に言ってくる位なのだから、なのはちゃんや他の知り合いの都合も付かなかったのだろう。

「わかった、一緒に行くか」

「本当!？」

フェイトにしては珍しく飛び上がる様に喜んだ。むしろ文字通り飛び上がった。ガタリとイスが音を立て辺りの客が奇異の目を向けてくる。

少し恥ずかしそうに、頬を染め軽く頭を下げながら座り直す。

「………じゃあ、チケットは先に渡しておくから駅で待ち合わせ……で良いよね？」

もじもじと指を絡ませながら、上目遣いで聞いてくる。

フェイトみたいな可愛い娘にこういうポーズを取られるとなんというか、保護欲が湧くな、母性ではないが父性ともいうか？守って

やりたい妹を相手にしているみたいだ。

なお、妹であるクアットロもよくこういったポーズを取ることもあがるがろくな目に合わないので、鋼の精神力で断ろうとしては結局いつも押し切られていたりする。

「うん、それでいい。……あつ、あともう一人来るっていう人について聞いておきたいんだけど……」

「あつ、ごめん。会ったこと無かったよね、今 私が保護責任者って事で世話してる子なんだけど、エリオ君っていうんだ。優しいとっても良いことだよ」

エリオ……か、フェイトが色んな子供を世話してるって話は聞いていたけど直接会うのは初めてだな、情報を集めておいた方がいいかもしれない。

「そっか、楽しみにしてるよ」

「うん♪私も」

フェイトが保護した子供は何かしら奇異な出自の個体が多いと聞く、ドクターの実験に使えるようなサンプルもあるかも知れないし入念に準備して行くでしょう。

にしてもフェイト………なんかやけに機嫌いいな、いい事でもあったのだろうか。

◇

駅前、なんだかよくわからないオブジェの前で二人を待っていた。いつも思うのだが、よく駅前にあるこの謎のオブジェは何の狙いがあるんだろう。

ここにあるものも、ビビッドの赤い立方体と真鍮製と思われる輪っかが組み合わされた摩訶不思議な物体だ。

ドゥーエ姉あたりに聞けば、何処何処のお偉い芸術家がこれこれな理由で制作したものだ、なんてウンチクを垂れてきそうである。

ドゥーエ姉といえは本当に何処に行ったのだろうか、ドクターを裏切るとは考えづらいし………

「シロウ」

「うおっ！」

急に視界に入ってきた金髪にギョツとする。

あんまり考え事に集中していたせいで、接近に気がつかなかった。フェイトも不思議そうに首を傾げている。

「あつと、悪い考え事しててさ」

「？、まあいいかな。」

それよりシロウ紹介するね、ほら挨拶して」

フェイトが腕を引いていた男の子をオレの前に立たせる。とうの男の子はあまりの子供扱い加減に嬉しい様な、恥ずかしいような微妙な表情を浮かべている。おそらく、本当は自分から挨拶したかったのだろうがフェイトのお節介を断りきれず、このような状態なのだろう。

「エリオ・モンディアルです！はじめまして、シロウさん！噂はかねがね聞いています。今日はよろしくお願いします。」

ピシッと敬礼するように挨拶するエリオ・モンディアル、真面目な性格がよく表れている。ハキハキした話し方と目上に対する礼儀がしっかりしている子供だ。

「ああオレも話は聞いている、オレはシロウ、シロウ・エミヤだ。珍しいから覚えやすいと思う。こちらこそよろしくエリオ」

エリオ・モンディアル。

この男の子についても情報は調べ終わっていた。なんでもフェイトと同じプロジェクトFに関係のある少年との事で、ドクターが興味を示していた。Fの遺産と呼ばれていたが、正直サンプルとしての優先度はあまり高くなさそうだった。

「じゃあ…、そろそろ行くっか。電車も着く頃だし早めに着いて悪い事無いだろうから」

そう言い、エリオの手を引くフェイト。エリオはやはり恥ずかしいのか先程から助けを求めるように此方を見ている。

耐えろ、保護者に甘やかされるのは庇護者の義務だ。声に出さずサ
ムズアツプするとエリオは観念したように渋々手を握り返した。

案外、まだ甘えたかったりするのかも知れない。

しかし、こうして後ろから見るとフェイトがちゃんと保護者してる
のがわかる。未だ幼い面影を残しつつもエリオを先導する姿は実の
親子のようだ。

エリオの隣を並んで歩く。手こそ握らないが側から見れば家族の
ように見えるかも知れない。丁度エリオとの髪色も似てないことも
ないしな。

◇

電車に乗り目的地を目指す、祝日ということもあり中の人口密度は
かなり高くぎゅうぎゅうに押し込まれていて身じろぎするのにも苦
労するだろう、所謂、満員電車というやつだ。

そんな中でもフェイトはエリオの手を離さず、しっかりと握ってい
る。逸れないため当然といえば当然だがこの満員電車のなかでは些
か大変そうだ。

と、その時 満員電車ではお馴染みの犯罪者を発見した。しかもそ
いつはよりにもよってフェイトに手を出そうとしている。

フェイトも先程から臀部に感じる硬いものに気がついていたらよう
で、焦ったような恐怖に戦慄く様な表情を浮かべている。

フェイトが声を上げないのをいい事にその男は益々臀部に触れる
回数を増やしていった。まあ電車の揺れに合わせて押し付けている
だけの様なのでただの愉快犯とも取れるが。

そしてフェイトだが、なぜ抵抗しないのかと訝しんでいるとその視
線の先にあるもので気が付いた。

エリオだ。エリオのはじめての遊園地との事で良い思い出を残し
てあげようと耐えているのだ。

フェイトはあまり、人に頼る事をしない。自分一人が我慢すればな
にもかも丸く収まるも考えている節がある。

ため息をつき、決心を決める。人混みのせいでロクに動くことは出来ないが、痴漢を止めるくらいは出来るだろう。

電車の揺れに合わせ身体を移動させる。何人かの乗客に睨まれたが、そんな事を気にしていても始まらない。

男の背後に立つとフェイトの身体に触れていた方の腕を捻りあげる。同時に顎の骨を叩いて外し口を開かなくする。

「……………ここを手を引け、今なら通報はしない」

ありつたけの殺意を込めて男を睨むとコクコクと震えながらもうなづいた。

男が懲りたのを察すると、顎をもう一度叩いてはめ直してやりフェイトの間に割り込んだ後腕を放してやった。

フェイトは恥ずかしそうにキウウとオレの服の裾を掴む。

辺りの乗客から嫉妬の視線が飛んできたが逆に睨み返して黙殺する。

すると、一箇所からキラキラと輝いた視線が飛んでくるのがわかった。エリオだ。たぶん今の状況をうまく飲み込めていないのだろうがフェイトを守ったということだけは理解しているようだった。

◇

「シロウさん!!かっこよかったです!!」

心苦しくなるぐらいキラキラの純粋な視線を向けられむず痒いような照れ臭い様な変な気持ちになる。

電車を降りて遊園地に着いたのだが、フェイトが御手洗いに行きたいとの事だったのでこうして男二人気兼ねなく話し込んでいたのだ。

さて、エリオの目にはオレがフェイトを護ったように見えるのかも知れないが、そもそもちゃんと側にいらればあんな自体にはならなかったのだから、結局オレの責任なのだ。

「そんな事ないです、僕 フェイトさんが何か困ってるのは気づいてたんです。けど、どうすればいいかわからなくて……でもシロウさんは違ったじゃないですか、すぐフェイトさんを助けて、解決しちゃったじゃないですか。」

本当にヒーローみたいですよ！困っている人を助ける正義の味方みたいでした!!」

年齢を考えればエリオの言葉は年相応のなんの変哲も無いものなのだろう。しかしエミヤシロウにとってその言葉何よりも深く己の心に突き刺さった。

『僕はね、?????になりたかったんだ』

掠れた?????イズ混じりの映像が脳を擦る。

消し去られた筈の過去が自分を追いかけて追い詰めている。頭痛と共にノイズは収まったが胸に穴が空いたような虚無感はどうしても消えてくれなかった。

横を見ると、純真な目で自分を見つめる少年がいる。

なんでもないと苦笑した後、オレは立ち上がってこちらに駆け寄ってくるフェイトに手を振った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「シロウ、今日はありがとう。楽しかったよ」

「オレも楽しませて貰ったから、おあいこだな。また機会があったら誘ってくれ、エリオもありがとう、楽しかった」

「はい！僕も楽しかったです。今度シロウさんのお店に遊びに行きますね」

「ああ、いつでも待ってるから好きな時に来るといいよ」

日も傾きすっかり黄昏時だ。

エリオもフェイトも、遊園地であれだけはしやぎまわったのに意外と元気で自分の足で帰れそうだ。

「それじゃあ」

「シロウさん、また今度」

エリオとフェイトが手を振りながら歩いていく。

勿論手は繋がれたままだ、エリオももう諦めたのかそれとも気がついていないのかあまり意識していない自然な様子だ。

「まあ、たまにはこういうのも良かった……のかな」

遊園地で二人に振り回されるのは案外楽しかった。

最近、家族ナンバーズに会えて居なかつたから、余計に楽しく感じた。
鳥が鳴くのを眺めながら夕日に黄昏れる。
それにしても何か忘れていているような……………

「あつ、BARのこと忘れてた」

シロウ・エミヤ。何気にほぼ24時間働いている男だ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「なあなあ、今日てフェイトちゃん来とらんのか？」

「フェイトさんは今日遊園地だそ〜ですよ、あの保護したって子と噂のシロウさんと一緒に」

「なん……………やて」

どこぞの死神のようなりアクションを取るはやてだが、その顔は驚愕というより何かよからぬことを思いついた様な顔をしている。

「シロウさんて、フェイトちゃんのコレって噂のある人やんなあ？」

小指を立てながらニマニマと笑うはやて。この娘、半分くらいおっさん成分で構成されているのではないだろうか。

「それはよくわからないですけどお、フェイトさんの意中の相手だつてなのはさんは言っていましたよ〜」

妖精サイズのラインがはやての周りを飛び回りながら悪ノリする。

普段なら諫める所なのだろうがラインもやはり色恋沙汰には興味があるらしい。

「よっしやあ!!ほな、全権力を乱用してシロウさんのプロフィールを丸裸にしたるで!!!」

「は、はやてちゃん!!!流石それは、!!」

「うははははは!!うちにかかればミッド市民の情報なんて筒抜けなんやで〜!!!」

カタカタとタブレットを操作するはやてと止めることもできず、アワアワと飛び回るライン。

他に人が居ないためか、はやての暴走は加速する。

「ほうほう、結局イケメンやん、フェイトちゃんも案外面喰いやなあ、あつ、バーテンやつとるやなオ・ト・ナの男の人つか!!それでそれで〜、……………は?」

楽しそうにデータを漁っていたはやてだが急に静かになり、ただキー叩く音だけが響く。

その様子を不審に思ったリインが恐る恐るはやてに声をかけた。

「あの〜、はやてちゃん?どうかしたのですか?」

「……………ないんや」

「……………え?」

険しい顔を上げるはやてに、リインは若干後ずさる。

はやて自身も、深く思考の渦に巻き込まれている様で呻くように声を絞り出した。

「………………………………………シロウ・エミヤなんて人間が産まれた痕跡は何処にも無い。」

21 / 追跡

暗闇の中、静かに走る男の姿があつた。

闇に紛れるような真っ黒いコートに身を包み、大きなトランクを脇に抱えている。

目深に被られた帽子のせいか、その表情は何い知る事は出来ない。雲の切れ間から漏れる月の明かりに、時折その姿を映し出されるが人気の無い路地なせいとかその男は誰にも見られる事なく歩みを進める。

不意に、男は立ち止まった。

随分な速度で走っていたはずだが、汗をかくどころか息切れ一つ起こしていない。

深くため息をついた後、トランクを路地の脇に置く。

——と同時に弾かれたように跳び上がる。

あまりの膂力に経年劣化したコンクリートの地面が砕け、粉塵を巻き上げる。

常人では考えられない高さまで跳んだ男は空中で体勢を整えつつ、先程まで自分がいた場所を凝視する。

暫くすると、男が地面を蹴った時に巻き起こった土煙の中から、紫電する黄色い帯のような物が瓦礫に巻きついていてる。

猫のように軽やかに地面に着地すると、ひと息つく間もなく魔力の散弾が闇の中から放たれる。

雨のように黄色い閃光が男に降り注ぐが、体捌きだけで全ての散弾を避け脇に置いておいたトランクを回収し、全速力で散弾が飛んできた方向とは逆向きに走り出す。

——と男の脇を閃光が通り抜け、一人の少女が道を塞ぐように

躍り出た。

あまりの速さに狭い路地は暴風が吹き荒れ、その風圧で男の帽子は飛ばされる。両の腕を交差させ、風から身を守っていた男がその腕を下ろすと、その素顔が明らかになる。

煤けた赤い髪に、黄土色の瞳。

おもむろに、男は口を開いた。

「……最近店に来ないと思ったら、こんな所で夜遊びしてたのか……」

「……………シロウ」

金の少女は呟いた。

◇◇◇

「それで、話って何かな？」

目の前に居るのは、八神はやて。

いつもの人懐っこい笑みは影を潜め、いつになく真剣な眼差しを向けながら両肘を机に着き重い空気を漂わせている。

昨日、遊園地で遊びすぎたせいか疲れて眠ってしまったのだが、気がつけば朝になっていて急いで身支度を整えていた時、急にはやての執務室に来るよう連絡が届いたのだ。

「……………フェイトちゃんに、頼みたいことがあるん……」

重々しく言葉を発する はやてからは普段のちゃらんぽらんな空気は感じられず、これからの話は真面目な物なのだと分かる。

管理局員的に、不真面目なのがデフォルトなのはあまりよろしくないような気がするが、そこは能力の高さで許されている部分が多いのだろう。

パサリ、とはやてが机に広げたのは十数枚からなる資料だった。

手に取り、はやてに向き直ると頷き了解の意が示される。頷き返し

その資料に目を通す、それはある人物についての資料だった。

フェイトもよく知る、ある男性の物だ。

名前を確認したところで、困惑しながらもはやての冗談では無さそうな目を思い出し、一枚一枚細部まで確認する。

フェイト自身も気がつかない程自然に口角が上がり、少し頬を染めながら資料を読む。

その資料に書かれていることの多くはフェイトの知っている事であったが、時折知らなかったことが書かれておりその部分は食い入るように読み込んでいた。

特に流石のフェイトも正確な身長、体重は知らなかったようで、どうやって調べたのかは分からないが（おそらく法的にグレーな方法だろうが…）はやてに感謝しつつ、暗記していった。

ところが暫く読むうち、フェイトは眉を顰め始める。

困惑、というよりは違和感だろうか。楽しげだった表情は翳り、さつき読んだ筈のページを何度も見直し、見比べ更に顔を曇らせていく。

何度も何度もページが捲られ、紙の擦る音だけが執務室に響く。

はやては真剣な眼差しをフェイトに向け、フェイトは一心不乱に頁を捲る。

長いようで短い時間が過ぎた後、フェイトは資料を机に置いた。

「……………これ、どういふこと？」

声が震える。

思考がまとまらずうまく言葉を紡ぐことも出来ない。

だが、いま目の前にある資料がそれが真実であることを示していた。

「シロウ・エミヤには、次元犯罪者の疑いがある。それも、小悪党なんかじゃなく……余程深部に関わってるような人物である可能性があるんねん」

はやてはフェイトを真正面に見据えながら、それを言葉にし形を与える。言ってみれば簡単なものだ。

知り合いが犯罪者である可能性がある。ただそれだけの言葉にどれ程深く胸を引き裂かれるのだろう。

もしこれが、フェイトでなかったなら、そう例えば高町なのであれば、冷静に受け止めることができたかもしれない。

冷静に受け止め、なおかつ最適解を選んで見せただろう。高町なのはなら。

なのはでなくともクロノ・ハラオウンでも、迷わず判断する事が出来ただろう。

けれど、フェイト・T・ハラオウンにはそれが出来ない。

自身も次元犯罪者であった事も理由の一つではあるが、出生の関係でもそも自分というものの存在自体があやふやなフェイトには大切な人を、家族であつても友人であつても、割り切る事など出来ないのだ。

「勿論、それ以外の可能性もあんで？、けど、ひとまずのところは調査せな始まらへんゆう事や」

はやての言葉に何故自分が呼ばれたのかを理解する。

と同時に、僅かに残った希望を自分に掴ませてくれたのだと、はやてに感謝した。

「私に、身辺調査をして欲しいって事だよね」

「せや、執務官のフェイトなら独断の調査も許可されるし、ある程度無理な事も可能や。最悪の場合、現行犯で、ってゆうのも出来るしな」

現行犯逮捕自体は局員どころか一般市民にも可能ではあるのだが、この場合は能力的なことを言っているのだろう、

「分かった、取り敢えずは一週間様子を見て、その後は行動次第で決めるって事でどうかな」

「十分や、こつちでも協力できる事あつたらいつでも連絡してな」

◇◇

1日目、特に何もなかった。

いつも通り、お店の仕事で忙しくしてたみたいで、文字通り一日中働いてた。

ちよつとくらいなら、遊びに行ってもいいかな、と思っただけど我慢して監視を続けた。

2日目、シロウには兄妹がいるらしい。お客さんとそういう話で盛り上がったた。

正確には姉と妹みたいだけど、そんな事はどうでもよかつたちよつともシロウの事が知れた。けどおかしいな、戸籍上は一人っ子の筈なのに。

3日目、偶にシロウはお店をお休みにする。

今日もそういう日みたいで、シロウは朝早くから市場に出かけていた。材料の買い込みなのかな？人が多すぎて途中でシロウを見失ってしまった。

夜中に帰ってきたけど、ちゃんと食材らしきものを抱えていた、よかつたやつぱり食材の買い込みだったみたい。

でもあのトランクみたいなのなんだろう。ちよつと重そうだけど、大丈夫かな。

4日目、シロウっていっぱい携帯持つてるんだ。

仕事とプライベートで使い分けてるのかな？それにしても多いけど、前に言つた秘密のアルバイトと関係あるのかな、でも電話で話してるシロウはなんかやだな……ちよつとだけ怖い。

5日目、シロウが家を出た。あのトランクを持って……

大丈夫、そんな筈ない。ほんの少し話を聞けば……誤解だったってわかるよね……

◇◇

「…………シロウ…………」

シロウの動きを見た。

どう考えても普通の人間が出来る動きじゃない。魔法を使えば別だけど、そんな様子は微塵もなかった。

つまり、それは……………

「…………騙してたの？」

シロウは普通の人間ではない。

その事実だけが重く横たわる。覚悟していた筈なのに、その事実が鮮明になった途端、全てが崩れ落ちてしまいうるようになる。

それでも、私は管理局員だ。法を守る義務があり、犯罪者を裁く責務がある。

「…………いや、騙してたわけじゃない、ただ仕様がないう事なんだ。」

寂しそうに、本当に寂しそうにシロウは笑った。

いつもの温かな、包み込んでくれるような笑顔じゃない、冬の荒れ野を思わせる冷たく暗いでも、何処か悲しみに満ちた笑みだ。

どうして、そんな風に笑うんだろう。

いつそのこと、全部嘘で、私は騙されてて、シロウが血も涙もないような極悪人だったら、私はこんなに苦しくなかったんだろうか。

シロウがおもむろに構えを取る。

ケースを片手に持ち、四肢に力が込められているのが分かる。心な

しか辺りの空気もピリピリとした緊張感に満ちているようだ。

「……………悪いが、ここは通らせてもらう。」

突如、シロウの体がブレる。

「バルディッシュュ!!!」

『——ja!』

ソニックブームを発動し、高速で走り去ろうとするシロウを捕捉する。

既に私の横を通り過ぎ遙か遠くに移動していた。

魔法で強化した速度で一息に追いつき、背後から魔力刃で斬りかかるも、予測していたように身を屈めて避けられる。

シロウは人体の構造的にあり得ない角度で腕を伸ばし、路地のパイプを掴んで無理やり、方向転換する。

普通この速度でこんな挙動をすればタダでは済まない。

いや、実際にタダでは済んでいない。衝撃をもちろに受けた腕は自然な方向に折れ曲り、移動のたびにぶらぶらと不規則に揺れている。

魔力弾で牽制しつつシロウを追いながら、考えを巡らせる。

やはり、見たところ魔力の様なものは感知できず、これまでの挙動は全て純粋な身体能力によるものだと考えられる。

となると……………

(人造魔導師……………ううん、改造兵士……………)

そう考えるのが妥当だろう。

腕にあれだけの重傷を追いながら、眉ひとつ動かさないのでその証拠だ。

(……………私と、同じ)

同じように、普通でない方法で造られた。

実際のところは違いかもしれない。シロウが望んで改造を受け入れたのかもしれない。けど、もし、私と同じなら……………

(救ってあげられるかもしれない。なのはが私にしてくれたように)

夜の街を疾走する。

シロウも流石に疲弊したのか、先程のような速度はない。

息も絶え絶え、と言うほどでは無いにしろシロウの顔には疲れが見えた。

「シロウ、投降して欲しい。今ならまだ間に合う……………」

わかっている、シロウはきつと投降しない。

そんなにすぐ諦めてくれるならあんなに必死で逃げ出したりしない。これはただの自己満足だ。

それでも、投降してくれたらと願わずにはいられなかった。

「ハア、ハア、ハア……………そうしたいのは山々なんだがな……………俺にも、意地があるんだよ」

呼吸を整えつつ、私に視線を向ける。

観念したわけでは無さそうだけど、逃げ回るのはやめたみたいだ。

「……………そっか、じゃあ、ちよつとだけ我慢してね……………」

——紫電が走り、シロウの体を切り裂いた。

シロウも、何が起こったのか分からないと言ったように、驚愕の表情を浮かべている。

シロウは小さく呻き声を上げ地に伏した。

魔力ダメージで身動きの取れなくなったシロウに用心のためバインドを掛ける。

全力で飛び出し、ブリッツ・アクションとソニックブームを併用して、シロウに斬りかかった。

それだけだ。

それだけで、シロウを拘束した。

いくら身体能力が優れているとは言っても全力の魔法で強化され

た魔導師に敵うはずはない。

そんな事、シロウもわかっていたはずなのに。

なのに……どうして。

頭を振り、余計な思考を追い出す。兎に角今は状況の整理をすべきだ。他の事は後から考えればいい。

シロウが運んでいたスーツケースを見やる。

先ず、あれを確認するべきだろう。

「シロウ、これ何が入ってるの？」

バインドに拘束されたシロウを見る。

流石に観念したようで、抵抗するそぶりは見られない。ただ決まり悪そうに座っていた。

「オレは運んでいただけだからな、中身は知らない。と言うか、知っちゃ駄目なんだよ」

その言葉に、ほんの少しだけ気持ちが軽くなる。

もしシロウの言葉が本当なら、運んでいたものによっては嚴重注意のみ、最悪でも罰金と数ヶ月の社会奉仕で済むだろう。

ミッドは基本的にそこまで重い刑罰を課したりしない。

犯罪者であっても、社会復帰を一番に考えられるようになっていく。そして、これは聞いて見なければ分からないが、シロウの生い立ちの事もあれば、減刑も考えられるだろう。

一応罨などが無いから調べてからスーツケースを開く。

見た目の通り重いスーツケースだが、シロウはこれを持ってあれだけ走り回っていたのだから驚かされる。

中に入っていたのは、白い粉だった。

バルデイツシュに鑑識に掛けてもらうと、麻薬の一種である事が判明した。ミッドでも裏ではごく普通に流通しているようなありふれた違法薬物だ。

「……………シロウはなんでこんな事したの？」

自然に言葉が溢れた。

お店の繁盛具合を見れば、お金に困っていると言うわけではないと言
う事は分かる。けれど他の理由はどうしても思いつかなかった。

シロウを見る。

また、シロウは笑っていた。

あの悲しげな笑みだ。困ったような、寂しいような、どうしようも
なくなったような笑みだ。

風が凧ぐ。

真夜中という事もあり、真つ暗な宇宙に二人つきりで放り出された
みたいだ。

シロウが、口を開いた。

「話してもいい……………けど、その前についてきて欲しい場所があるん
だ。」

もう……………逃げたりしないからさ、一緒に来てくれないか？」

シロウは笑った。

心の底から……………サミシそうに。

22 / 教会

ベルカ自治区とミツドの境界線。

今でこそ共存しているが、本来であれば敵対していた同士が互いの領域を定め、引かれた国境線。

二つの世界が入り混じった、不安定な 間。

その間に丘がある。
通商のため開かれた大通りからは外れ、人の往来があまり無く目立たない小さな丘。

覆い隠すような深い森と曲がりくねった道のせい、外界から隔離させたかのような場所。

そんな暗い道の奥深くを進むと急に開けた空間が現れる。
そこに、教会があつた。

白い花が咲き乱れる花壇が敷かれ、その中心に白亜の神の家がそびえ立っている。

ある種の神秘を湛えた独特の重みが、辺りに厳かな雰囲気を漂わせていた。

そう、くまなき月の下、私がシロウに連れてこられたのはそんな場所だった。

◇◇

「フェイト……綺麗なところだろ？」

「……………うん」

緊張感のない言葉に、自然と目尻が下がる。

ここに案内する間も、ここに着いた直後も、シロウはずっといつも通りだった。

いつも通り優しく、いつも通り暖かった。

何度も何度も、ただの勘違いだったんじゃないか、さっきの出来事は白昼夢だったんじゃないか。

そう言う錯覚に陥りそうになる。

その度に、シロウの服についた乾いた血を見て現実に引き戻される。

シロウが無理な駆動をした時、折れ曲がった腕から突き出た骨の欠片で出来た傷の血だ。

私が治療するまでも無く、傷が塞がり骨が正常な位置戻っているところを見るに、やはりそう言うことなのだろう。

そして、ここに連れてこられたのもシロウのそれに関係のあることなのだろう。

つまり……………それは、

「どうかしたか？」

「ツ、えああ、うん…何でもない」

「？、……………そうか、ならいい」

ぼうと立ち止まっていたせいか、シロウに声をかけられた。

慌てて返事したけど、なんとか誤魔化せたみたいだ。

ふと見ると、教会に続く道は未だ半ば、考え事をしながら歩いていたせいか気がつかなかったけれど、思っていた以上に広く、道を隠すように広がる花壇もかなり大きい。

丘を包む絨毯のように一面白い花が咲き誇っているのだ。

シロウがまた前を向いて歩き出したのでほんの少し歩幅を大きくしてついていく。

「これだけ大きな花壇だと、手入れなんかも大変なんじゃ……………」

「まあ、昼ならこの神父が全部一人で手入れしているはずだけどな、この時間なら……………」

急にシロウが瞳を細める。

私もシロウが見ている方向に視線を飛ばす。

視線の先には、作りの良い車椅子と一人の女性がいた。

女性は車椅子から降りて傍に置き、花壇の端で小さく鋏を振るって

いた。

硝子細工、とでも形容できそうなほど儂げな人だ。白磁の肌に同じような白い髪、手入れはされているものの生来そうなのか酷く痛んでいる印象を受ける。

痩せこけているわけでは無いのだが、白く薄い服の上からでもわかるほどに細い線は病的な印象を与える。

また、その肌を覆う幾重もの包帯。

不自然な程に巻きつけられたそれは真新しげでありながら、奥から染み出した赤い血とのコントラストで生々しく映った。

そんな身体のなか、月のように輝かしい金の隻眼が輝かしく存在を誇示している。

「こんばんは、クラウディアさん」

「……あら、こんばんは、シロウくん」

しつとりとした声で返事をした女性はクラウディアというらしい。鍔を置いて立ち上がり、私たちの方に歩いてきた。

覚束ない様子だったけれど少しの間なら大丈夫みたいだ。

「それで……そちらの方は？」

ふいと視線を向けられる。一瞬前まで、私の事は見えてもいない様子だったのだじろいになってしまう。

「えと、はじめまして。こんばんは、私はフェイトといいます」

「あつ、女の子だったのね。こんばんは、私はクラウディアです。同じ年頃の娘も居ますから、仲良くしてあげてくださいね」

人好きのする笑顔でペコリと挨拶するの様子は、見た目よりも幼げな様子を感じさせる。

娘もいる、との事なのでそれが彼女の性格なのかも知れないが、シロウの事を考えると不安もある。

それに………

「——ごめんなさいね、今日はカレンちゃん出掛けてて……」

「いや、今日はコトミネ神父に用があるんだ」

「キレイさん？、まあ それなら丁度帰ってきたところだったの……」
「そっか、ありがとう……フェイト行くぞ」
「……………え、うん」

クラウドディアさんと手短かに話をしたシロウはさっさと教会に向かかって歩き出す。

私としてはもう少し話をして置きたかったけど、すぐに花壇の手入れに戻った様子を見て邪魔するのも良くないと思い諦める。

代わりにシロウに気になっていた疑問を投げかけた。

「シロウ…………クラウドディアさんの眠って」

「……………見えてないわけじゃ無いけど……………ちよつとな、目だけじゃなくて五感が全体的に鈍くなってる。特に、味覚は激辛か激甘じゃ無いと判別出来ないらしい。」

予想を上回る答えに、呼吸が止まる。

やっぱり…………クラウドディアさんもシロウと同じ…

「……………フェイトが考えてるような事は無いよ、クラウドディアさんのは持病みたいなもので俺とはなんの関係も無い。」

心を読んだかのようにシロウが補足する。

少し気は楽になったが、持病と言うならそれはそれで気にはなる。

やはり、ミッドの先端医療でも治せないような難病だったりするのだろうか。

それとも、遺失物の事故での後遺症などだろうか、それならユーノ君に頼んで調べてもらおうとかで対処できるかもしれない。

どちらにせよ、助けられるなら助きたい。

シロウはそんな気持ちを知ってか知らずか、大きな扉に手を掛けていた。

「……………それより、気をつけるよ、これから会うやつはオレの知る限り最悪の性悪だ」

ギィイと大きく軋む音が聖堂の中に響いた。

月明かりで照らされたパイプオルガンと閑散とした礼拝堂がそこにはあった。

質素な作りながらも大きなオルガンは、弾き手が居ない今も荘厳な神秘を漂わせ、ここが聖域である事を象徴している。

光を大きく取り入れる造りなためか、夜にもかかわらずあまり暗い印象を与えていない。

否、暗がりは一つだけあった。

幾条も並べられた長椅子に真つ黒いカソックスを纏った男が、たった一人座っている。

この男の周りだけは、聖堂に満たされた神秘も呪詛の如く淀んでいる。いや、神秘そのものとして歪みをきたしている。

「…よくきた、エミヤシロウ。……………そして、フェイト・テスタロッサよ」

「ツツツ!!」

名前を呼ばれて急に身構える。

殺気を飛ばされたわけでもない。

決定的な何かを言われた訳でもない。

それでも、人として、生き物として抗いがたい嫌悪の様な感情に背筋が粟立つ。

間合いを測り、辺りを警戒する。バルディツシユは待機状態だが、いつでも展開出来るように四肢に力を込めた。

「そう身構える必要は無い、と言っても無駄だろうがあまり騒がしくしないでくれたまえ、子供達が起きてしまう」

「子供……………達?」

クラウディアさんの娘（カレンちゃん?）は先程出掛けていると言っていたが、他にも子供がいたのだろうか。

「エミヤシロウから聞いていないのか?。ここは教会だが、小規模な

がら孤児院でもある」

「そう言う事ですか……」

ミッドチルダには案外孤児院が多い。

というのも、他の途上次元世界で親を亡くした子供達や次元漂流者などを一挙にミッドで面倒をみるからだ。

管理局の下、彼等が大人になるまで責任をもつて育て上げ社会に適応できるように支援するのだ。

孤児院は管理局が運営しているものが多いがやベルカ自治区では教会が孤児院の代わりをしているそうだ。

管理局としては局員不足を解消するための策という側面もあるものの、彼等の幸せを願い活動している。

「掛けたまえ、聞きに来たのだろうか？エミヤシロウが何者なのか……」

何が楽しいのか薄ら笑いを浮かべ重々しく諭す様に男は語った。

迷い子を教え導くように、賢い悪魔が愚者に囁くように聖者然としていながらも何処か空虚で、水の底に溜まった泥のような雰囲気は、やはり神父であった。

遂にシロウの本当を知ることができる。

緊張からか、喉がひりつきゴクリと固唾を呑む。

「……………とは言え、だ。私からエミヤシロウについて語るの筋違いだ。この男の事は本人に聞きたまえ……」

「ッ、馬鹿にしているんですか……」

「そういう訳では無いとも、そもそも彼が私に説明して欲しいと思っているのはエミヤシロウの起源などでは無い」

確認するようにシロウに視線を向けた。

シロウは目を閉じて腕を組みただ沈黙していた。

つまり、それが答えという事だろう。

「そう言えば、自己紹介がまだだったな。説明に入る前に軽く挨拶しておくでしょう」

男は姿勢を正し私を見据え、小さく礼をする。

「私の名はコトミネ・キレイ。聖王教会の騎士であり、この教会の神父

でもある。」

騎士、聖王教会でもなんらかの功績を認められたものか、ある程度の力量を持った者しか与えられない称号。

正直なところ、あまりこの男、コトミネには似合っているとは思えないがどちらにせよ要警戒である事には変わりない。

「……………では、説明するでしょう。この孤児院は何なのか、をな」

◇◇◇

管理局が孤児院を大々的に運営する理由の一つに、局員不足解消というものがある。つまり、支援の見返りとして孤児達に将来管理局で働いてもらおうという事だ。

ミッドはそれなりに安定した社会が築かれており、孤児達も安心して生活することができる。

その反面、安定しているという事は仕事もあまり無かったりする。社会構造がそれなりに完成されているため、人手を必要としないのだ。

ここまで言えば分かるかもしれないが、必然、孤児達の進路は狭められる。

当然孤児院に子供達全員を大学まで行かせる資金はなく、奨学金を得られたとしても、将来返済のため奔走する羽目になる。

こうなると彼等が最も手を伸ばしやすい進路は何か？

いうまでも無く管理局だ。

万年人手不足の管理局は士官学校であつても成績優秀者であれば格安、あるいは無償で学ばせてもらうことができる。

他の管理局関係の学校であつても同様だ。

そういう、打算もあつて孤児院はミッドに集中している。

とは言え、ただ局員不足という事だけがこの状況を作り出している訳では無い。

管理局が真に必要なとしているのは、優秀な人材だ。

そして優秀であれば出自は問わない。
例を出そう。

エリオ・モンディアルという少年がいる。
彼は公には出来ない所で生まれた。

だが、その才能は同年代どころか、次世代を担うに相応しいものと言える。

その才能の一端は彼の出自に関係しているかも知れないが、そんな事は関係ない。

キャロ・ル・ルシエという少女がいる。

彼女はある次元世界の少数部族の生まれだ。

彼女は、何故か部族から追放され偶々幸運にも心優しい管理局員の手によって保護された。

何故追放されたかは、管理局も知っているが、だからこそ彼女を手に入れたがったのかもしれない。

管理局は常に優秀な人材を求めている。

とある研究者はこう嘲笑う。

造ればいいじゃないか、と。

◇◇◇

「憐れだと思わないかね」

「何が……ですか」

分からないはずがない。

けれど、そう言わずには居られなかった。

「利用され、将来を奪われる少年少女達が、だ」

「管理局にそういった側面があるのは認めます。ですが、あくまで私達は彼等の自由意志を尊重します。決して、彼等に強制するような事はしない。」

管理局は強制は決してしない。

あくまで道を示すだけだ。

彼等がそう選んだのなら私にそれを止める事はできない。

エリオもキャロも私が止める事は出来なかったように。

「状況がそれを許さないという事は君も分かっているのだろう に、まあそんな事はどうでも良い。

君が言う事も最もではある。

だがな、彼等の出自そのものに管理局が関わっていたとしたら君はどう思う?」

「……………え?」

心臓が止まったと錯覚する。

血が凍ってしまったのかと思うほど、冷たい何かが体を通り抜ける。

だが、それでもコトミネ神父の言葉は腑に落ちると言う言葉の通り、そのまま理解することが出来た。

「管理局として、完全無欠の正義の使者という訳ではないという事は君も理解しているだろう?」

だからこそ査察官などと言う役職がある訳だ。違法な研究に手を染めていないとも言いきれんだろうに」

確かにそうだ。

査察官の仕事は汚職の捜査だけでなく、違法行為の取締も含む寧ろそう言ったものを抑制するための役職でもある。

そして、違法行為に手を出す局員が存在しないのなら査察官などと言う役職も必要ないものだろう。

実際、地上本部のレジアス・ゲイズ中將には黒い噂が絶えない。

その上、遺失物や質量兵器の使用を推し進めていると言う噂もある。

「加えて説明しておくなら、この孤児院は管理局も聖王教会も認知していない。私の独断で秘密裏に運営しているものだ」

つまり、彼はこう言いたいのだろう。

「ここは、管理局の膿から溢れでた被害者の受け皿だと、そういう事ですか……………」

「実際のところは、管理局が関わっているかどうかは分からないが、可能性のあるだけ言っておこう」

また、人を馬鹿にしたような笑みを貼り付けてこの神父は言う。
楽しそうに。
たのしそうに。
愉しそうに。

「……………最後に、一つだけ聞かせて貰っても?」

震える声を押さえつけ、何とか言葉を形にする。

醜く歪んだ顔を見せないように、顔を伏せ、拳を白くなるほど握りしめて。

「ああ、良いとも」

「あなたは……………何故こんな事を?」

こんなにも歪んだ男が、何故。

「ふむ、そうだな。生まれてくる命、その全ては祝福されるべきだ、ただそれだけの事だとも」

ああ……………

やはり、この男はどこまで歪みきつても聖職者で、どこまでいっても只の神父なのだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

夜道を歩く。

星明かりを浴びながら、私はシロウと二人で歩いていた。

「……………ねえ、シロウ。シロウもやっぱりあの孤児院で育つたの?」

違うと、いつて欲しい訳じゃなかった。

でも、そうだといい欲しい訳でもなかった。

どっちの答えでも。

苦しいのは変わりないから。

口から溢れた言葉は取り消せない。だから、静かに答えを待った。

「……………あの孤児院で育ったって訳じゃないけど、似たような境遇だよ。鉄の子宮で生まれて堕ちて、命からがら逃げ出した。

フェイトが知ってるかは分からないけど戦闘機人ってやつのプロタイプだよ。俺は運が良かったんだ、失敗作だったけど直ぐに廃棄はされなかったから」

星を見ながらそう言うシロウはやっぱり寂しそうで、どうしようもなく寒々しい。

「じゃあ、……………何であんな事したの、静かに暮らしていてくれたら、それで良かったのに」

運び屋は犯罪だ。

物によって罪の重さの程度はあれど、後ろ暗いものを背負う事に変わりはない。

「金が……………必要だったんだ……………、オレにしたって孤児院の奴らにだって戸籍が無いからさ、まともな働き口も見つけられない。

だから、あいつらに戸籍を買うための金が必要だったんだよ」

戸籍を買う。

と言う事の意味はわからない訳ではなかった。

彼等は管理局に頼ることが出来ない。

そもそも管理局に存在を知られた時点で彼等はどうなるかわからないのだ。

「……………フェイト、オレはさ……………どこまでいっても闇から抜け出すことは出来ないんだよ、所詮 失敗作か廃棄物なんだ。どこに行っただって結局は隠れるように生きていくしかないんだよ。だってオレは――」

私にはシロウを助けることは出来ない。

私一人じゃ、管理局の闇を払うことは出来ない。

……………けど、

「だってオレは人間じゃないんだ――『そんな事ない』」

!!!!!!!!!!!!

その言葉だけは許せない。

私が私でいるためにはその言葉を許すわけにはいかない。
なのはが私に教えてくれたように、私は『人間』だから。
私は、『フェイト・テスタロッサ』だから。

「シロウは、『人間』だよ……、ちゃんと一人で立つて生きてる。誰かの失敗作でも廃棄物でもない……一緒にいると楽しくて、優しく、暖かくて、私の……大好きな人……。私の知ってる貴方は『シロウ』だよ……」

ポタリと地面に赤い雫が落ちた。

私の掌からだ、爪が手のひらに食い込んで血が出てしまったみたいだ。

「……まだ、私じゃシロウをあの子達を助けてあげられない……でも、私……頑張るから、いつか……みんなを助けてあげられるくらい……だから……」

——何処にも、行かないで——

涙で視界がぼやける。

こんな時間だからか、それとも他の理由からか体が震える。

不意に何か暖かいものが体を包む。

強く、私を抱きしめるように。決して離さない。

「ありがとう」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「なあ、ドクター。流石に出生記録すら無いのは怪しまれないか？」

まだ、幼さの残る青年が、白衣の男に話しかけている。

彼等のいる部屋は数多くのモニターらしき物が乱立する、所謂研究所の一角らしき場所だ。

「それで問題ないよ、いくら完璧に偽装したところでボロが出るのは当たり前だ、いちいち取り繕うのは面倒くさいからね、知り合いの孤児院長がいるから話を付けておくれよ」

「ドクターの知り合いって事は、ロクデナシなんだろうなあ」

「否定はしないがね、シロウはきつと気に入られると思うよ」

カラカラと笑う白衣の男に青年は溜息をついて今後の不安の種が増えた事に辟易する。

「て言うか、本当に大丈夫なのかよ、これ」

「大丈夫、大丈夫、」

白衣の男は何が楽しいのか、爬虫類じみたその瞳を輝かせニヤニヤと嗤う。

「嘘の中に、適度な本当を混ぜた方が真実味が出るものだよ。」

それに、正義感丸出しの管理局員が好きそうな心くすぐる設定だらうやい」